ぢやァないぜお前の難義をすくつて遣度から幽靈の人形を出して彼奴を驚かしたのだト言はれてお柳はこの二個の躰をよく〳〵看留るに何れも洒落た人々にて以前の奴等とは姿もかはる息子風少し心もおち着てりう「コレハモウ有がたふございますト禮をばいへどまだ前後に心を配ひ途方にくれるも無理ならず　×「アノヲ姉さんお前はまだ此身達が此樣な所に居るから變に思ふだらふが私等は今日此先の方の別莊へ茶番狂言に頼まれて來たのだはヲ今の幽靈は回向院前の宮川で損料を出して借て來たのださすがに人形でも泉目吉か細工だからあの奴も寔の幽靈だと思つて逃出しやァがつたのだノソレ見な幽靈の首ばかり跡は鯨で遣ふ樣にしたのだヨアハヽヽ此方も雨に降こめられて居る所へお前を彼奴がかついで來やァがつたから息を堪らして樣子をうかゞつて居たのだノよしか解つたらうサァお前の宅を敎へなとてものことに送つて上樣トやさしく言はれてお柳は嬉しくりう「ヲヤ〳〵それぢやァお前さん達は何所のか別莊へ茶番にお出のでありましたかへァノウ七さんもたしか其所へ行とお云ひでございましたッけが其所でございますかへ　●「ヱ七さんとは仲之町の七さんか當時は和歌町へ行て居るぜりう「アヽその七さんが先刻私に茶番のことをお言でございますヨ　×「ハァ左樣かへ道理で稲戸の旦那が其はなしだつけそれぢやァ友達の七さんの知つて居る娘ならまんざら知らぬへ顔は出來ぬへサァ〳〵早く送つてあげやうト介抱して居る其所へ七三郎もお柳を案じ彼是たづねて折よくも今此道へおか

かりて月のあかりによく〳〵見定め　七「お柳さんかりう「ヲヤ七さんかへトいへば二個の人々も×●「ヲヤ七さんか何樣して今時分に此所へ　七「イヤこれには大變な事があつてヲそれで此娘の跡を追て來たのサトお柳の身の上をあらましはなし聞せるゆゑさすがに東の氣質とて友達づくの好身も厚く　×「イヤハヤそれは大きな目に出合たノウまかしお前のはなしの分解では今日からも此娘の宅へ連ていつて遣つても安心なるめへ　●「左樣サ〳〵それこそ又今の奴等が何樣な事をするか知れぬへ兎てもの事に七さんの家内へ連て行て遣るがいゝぢやァねへか左樣すれば此方達も送つて行ァ此茶ばんの道具が目吉の方で明日早く入のでねへと別莊へ預けて來るのだが明日返して貰ひ度と言に付て今夜直に宮川へ置て歸るつもりで持て來たから是を目吉に渡せば何も用のねへ身分だァ宅へ歸らずに送つて行て遣ふぢやァねへか　七「イヤそれは有がたいそれぢやァ何樣ぞ左樣してお呉なせへノウお柳さん些道が遠いけれども左樣するかりう「ハイまとにお氣の毒だけれどもどうぞ左樣してお呉被成ナ左樣しますと私も調度姉上さんに逢て何かの相談をして貰ひますから　七「なるほどノウ粂吉さんに逢には能都合だ其樣ならば少しも早く小梅の方へ出て船をこしらへてもらつて　×「イヤ舟ぢやァ遲いはナ此娘ばかり駕籠へ乘せて遣んなせへ此方は途中へ寄もするし歩行方がいゝサァ〳〵駕籠のある所までいそぎやせう　×「ヲヤこの娘も素足だノそれぢやァ行ねへヱコウ七さんかはひそふだから脊負て遣るがいゝぢやァねへ

か草臥たらば此身達も替り〳〵におぶつて遣るはナリ」「ナニ何樣して其樣なことを勿躰ない素足でも痛くはございませんヨ　七「イヤまかし餘り苦勞をして氣色もわるかからふから脊負て遣ふト遠慮するお柳を脊中に負ながら路を急いで歸り行斯りし間に彼悪漢は五六人にて有ながら何ゆゑお柳を見うしなひあとをも追はざりしと後々噂に聞傳へしは一與のはなしなりそはいかにとこれを因にまるすにいたれば雨の止て後五六人一所へ寄集り　わるもの「忌々敷雨で大まくじりをしたぜナア　同「左樣ヨ出し抜に降出してこまらせやアがつた　同「ハヽヽ只今雨がふりますと天からお斷があるものか　同「そりやアいゝが虎の野郎は何樣したらう娘を連て行やアがつて一人好事を仕やアがるも知れねへゼ　同「左樣サ〳〵些もはやく探し出そふ　同「アレ〳〵〳〵向ふの通りにたしか女と男の影が見えるゼ　同「なるほど唆に違ねへ　同「サア〳〵早く來やれ〳〵ト駈出す路の横筋より忽ち並ぶ筥提灯先を拂ふて行列の足並揃ふ御同勢先供「ハイホウ引脇寄れヱ。待て〳〵　わるもの「ヲヤ〳〵大壯なお供だナア　わるもの「イヤこれは大變だゼ。アレ見や五町つゞくか六丁つゞくか知れねへまだ御駕籠も見えねへゼ　わるもの「こりやア行ねへ此御通行を待て居たら夜が明るだらふ　同「餘りな供廻りだぜソレやう〳〵に御駕籠が見える　同「なんとかまはず供を突抜樣ぢやアねへか　同「ホンニナア夜だから迯あふせられるだらふ間を見て向ふへ斷抜やうト言合せつゝ五六人一度にお供を横切つて走り抜んと飛入を捕押へたる御供の面々狼藉

者よ不屈奴と叱り懲らしで突倒すを悪漢どもが無法の働きさすがに酒興の狂人と勘辨あつてか切捨にもなされぬ御武家の御仁心それとも知らず無理無躰にあらそひ〳〵駈抜んと騒ぐ所へ御乘物間近く來りてお駕籠より鶴の一聲殿さまは威高き躰にて駕の戸引明けさせつゝ半身顯したまひ此躰を御覽あつてとの「まづまれ〳〵家來どもゝまづ扣イト仰にハット双方が地にひれ伏ておそれ入とのの「イヤナニそれなる壯人ども町家の者には稀なる働き不禮は憎き業なれども只今のその手練武家をも相手に無刀の戰ひ適れなる事と存じ聲をかけたは別義でない其方達を不殘召抱へて遣はさふが何樣ぢや奉公仕るかト仰にハアット御請さへ恐れ多いの言葉も出ずうづくまりたるばかりなりお供頭と見えたる御方　頭「コリヤ冥加なる殿の御意御請をいたさぬのか何樣ぢや〳〵とのの「奉公いたさば五人の者へ新知二百石づゝ與へ遣はす猶又只今より供立の中へさし加へ下屋敷へまかり越て内々申付る役義を首尾よく相勤め手柄を致さば三百石づゝの加增をつかはすぞト重き仰に悪漢どもゝ俄に心も侍となりすませし氣どりにて　わるもの「身に餘りましたる御意のほど誠にありがたい仕合に存じたてまつりますト言葉の中に廣益へ載て賜はる衣類大小直さま着替へて御供を仰せ付られ我ながら立涙に出立しよろこばしさ笑を含で行列に並ぶ月夜の影ぼうしいかゞなりけん下屋敷へお供はすれど何樣やら知らで當なき二百石加增の沙汰も樂しみに御下屋敷の御門を入り新に下さる御長家へ休足仰せ付られて御酒御肴も山海の美

味珍膳を下されて呑倒れしが　曉の烏の聲に目を覺し四邊を見れば秋葉の境内裏門の方の柴原に木の根を枕の春の夢たがひに呆れて顔見合せ苦笑ひをぞしたりける

○是なんお柳が父なりける植木賣正作が年來信心なしたてまつる三圍稻荷の神力にてかゝる奇瑞のありしならんとは後々思ひ合する事ありそれは次編を讀得て知るべし

笑訓亭　爲永春友

裾上る道まだ寒し春の風

門人の一句を備へて迎ひ島のけしきをつゞりたらざりし文をたすく看官お柳が野道になやさされし心の中を作者の筆に足らずともよろしく察して其情を哀れみたまへかし

辰巳清談

梅之春卷之四　終

辰巳清談

梅之春卷之五

第九回

むかし唐土に玄宗皇帝と申す天子の在しけるがその始は隨分かしこき君なりけれども楊貴妃といふ美人の故に依て臣下の爲にかろしめられ家國を亂され既に御命も危ふかりしが再度御運をひらかせて忠臣の功むなしからず以前の如く天子にならせられたれども楊貴妃に死別れたまひしゆゑ四百餘州ありといふ富貴の御身も彼美人楊貴妃の世になければ天子の位も甲斐なしと歎かせたまひしとぞ實も美女は人の爲におそろしき仇敵に極りしものなるべしたとへ愛する所の美女の心さま直にやさしくともその故に種々と思ひも付ぬ他人の恨みそねみを請て災ひの發るものなれば愛する人も寵愛される人もよく〳〵用心して愼しみたまへかし

○去れば春水が近年著したる中形本に婀娜なる美人の事をあるし好色なるに似たれども男に對して不實なる女を一人も記せし事なし男一人に惚たる女が二人も三人も在よしを綴れども嫉妬て爭ひ災ひを發す樣なる騷ぎも作らず只々男の爲に操を守り艱難辛苦して夫婦となり妾本妻圍女睦ましく語ひ合て姉妹のごとし斯てぞ寔の美人ならずや貌容のみうるはしく

とも男に不實をする女は鳥獸にも劣るべし因に依て楊貴妃の一代を畧〳〵鈔て卷をひらく童男女のために異見の端とす本文ならぬに怠屈せず猶一二枚の古事を辛防して讀せ給へ

再説彼楊貴妃と聞えしは唐土の土地にて弘農といふ所に住居たる楊玄琰といふ者の娘なり其母親がある時揚の木の下に晝寐をして居たりけるに楊の枝より餘る下露が落かゝりて胎内に宿と夢を見て妊身になり其生たる兒が楊貴妃なれば更々凡人の類ひにはあるべからず天人が假に下界へ他現しものか生質の美麗姿は繪にうつすとも筆に不及木偶に似せてこしらゆるとも自然の愛敬を寫す事かなはずされば此の楊貴妃が親許に居たる時分は諸方の王侯からさし上て吳ろの直に奥樣にするのと仰付られるもあれば町家の息子は地面を五ヶ所十ヶ所を持參して聟になり度の楊玄琰に地面を十五ヶ所と金を三千兩遣るから嫁に吳ろのと言込む者朝から晩まで絶間もなければ其斷に倦果て留守を遣ふ日の多かりしが實にも兩親が大切にしたる甲斐ありて天子の叡聞に達忽ち后妃に召出されしが民間にありし節だにも見る人毎に戀煩ひをさせたる程の娘が綾錦の此上もなき衣裳を十分に着飾 金銀珠玉の髮の上は好みを盡して野暮ならずこゝにおいて玄宗皇帝は晝夜楊貴妃を寵愛あつて片時も側をはなしたまはず餘りの柔なさに倩と思ひたまふ樣世の中の美人紅粉面に粧ひ身に羅綺を着たるは皆假の嬋娟にて眞の美質にあらず楊貴妃は其類ひのこしらへものにはあるまじ同じくは屬を顯し素顔の儘の美麗を見度ものな

りと思し召て驪山宮といふ御殿の庭の温泉を又新しく普請を仰付られて瑠璃の砂を敷水晶の玉を甃に積で温泉の筥のごとくになして楊貴妃を入湯させて御覽あるに白く清らかなる御膚のうるはしき躰月にも雪にもたとへがたく自からなる梅が香の薫りを湯烟に殘すおもむきは闌奢の油を解て湯に交へたるか麝香を湯に立たるかとあやしまるそれよりいよ〳〵御寵愛深く楊貴妃の衣裳は天子の姫君さまがたよりは遙かに勝り富貴なる事は百万石の王侯にも越たりかくの如くなるゆゑ楊貴妃の兄御楊國忠といふ者家貧しく賤しき生得なりしが畎畝所爲の中に成長才もなく藝もなく學文武道何一つ辨へたる筋はなけれども后の兄御なるに付て王侯にとり立られ飛鳥を落す威勢となり我意をふるひしかば上下ともにこれを恨み齒を喰ばつて憤りし所に吐蕃の國々はなれ背き軍を發すと聞えければそれを鎭る大將を撰む中に才もなき楊國忠が役に立ずと蔭言されるが悔しさにこの討手の大將を乞望み五十萬騎の大軍を引率て打手に向ひ大荒峰といふ山に陣を張つて居たりしが元來大將となる度量なければ只道理もなく力身ちらして酒を喰ひ女を引付て軍の事は夢中でありける所へ敵に責寄られ一戰もせず追立られて七千里四方の國々を不殘吐蕃に責とられ命からく〳〵都へ逃歸りしが面目なければ味方の中にて疲れたる者又人足に連て行し者を一萬人ほど引捕へ其首を切て敵の首をとりしと僞り都にて獄門にかけられしゆゑ其親類兄弟緣者の人々悔しく思へど楊國忠の勢ひにおそれ（以下原稿脱丁）の

大軍となり楊國忠を恨む面々先に進んで都へ責登り勢ひ竹を割ごとくなれば天子の軍兵はこと〴〵く逃去り歌舒翰といふ大將ばかり忠義深く防ぎ戰ひ玄宗皇帝にすゝめて兎ても大内にはお在被成ませんから蜀の國へお立退なさる樣にと敎へ申すゆゑ是非なく天子は楊貴妃と倶に五雲車に被召て逃落たまへば楊國忠も周章て逃る御供の中に加はり落行しが安祿山は後より追付既にあやうくなれども天子の御供さらに不動依之天子は御車の内より何ゆゑぞと御尋ねありければ御供の軍兵口々に此度の大變は楊國忠が驕を極め非道を行ひ候に付て發りましたる軍なればはやく楊國忠の首を刎て天下の人心を安くなさるべしと申上る中にはや敵の軍兵ども近付くゆゑ是非なく楊國忠を御供の人々の願ひに任せられしかば諸軍勢よろこびて楊國忠を馬より引下し戈の先にさし貫て一同にドット笑ひを催しけるか是を妹の(以下原稿脫丁)をも殺させ被下べしと申上たり天子もこれをば免したまはず后もおそれて天子の御膝にすがり付て歎きたまふを遠國より勤番に登り此御供に加り居たる邪見の武士情なくも勿躰なくも天子を突除楊貴妃をば五雲車の中より握み出し大地に投付け馬にてこれを蹴ころしたり其中に諸軍勢は天子の御車をいそがせ後陣の人々は安祿山を防ぎやう〳〵に蜀の國といふ所へ逃退たまひしが彼忠臣歌舒翰も俄の事ゆゑ一旦は敗軍をなしたれどもまた〳〵國々の軍兵を催促し五十萬騎におよびしかば猶忠義の人々を合せ八十萬騎の大軍となり竟に謀叛の大將安祿山を打ほろぼし蜀の國より

玄宗皇帝を呼かへしまゐらせ再度天子さまと敬ひたてまつりけれども玄宗帝は只楊貴妃を殺されたる事をのみ悲しく被思召て楊貴妃を殺されたまひし馬嵬といふ所を通らせられたる節も堤の柳草の露を御覽あつて去年の秋この所にて情なくも楊貴妃をうしなはれたるを悔みたまひて哀れにも不便の最後なりし事よたとへ再度天子のくらゐに上るとも楊貴妃なければ命ながらへる甲斐はなしと種々歎かせられ位をば御子の肅宗といふにゆづり其年の中に楊貴妃の事をこがれて崩御あそばしたりされば其以前楊貴妃と玄宗皇帝のおん中睦ましかりける節七月七夕の夜に牽牛織女の星の契りの幾千代も永久變らぬを羨みて在レ天願作ニ比翼鳥一在レ地願爲ニ連理枝一と誓ひを立られたまひしと言傳ふさあらば一念五百生繫念無量刼と佛の說せたまひしごとく生かはり死かはり天上人間の世はいふも更なり禽獸魚蟲と生れかはりても愛着の迷ひをはなれたまふことかなはぬ罪深き御契りありしとなんそれほどにまでおぼし召ても天子のおん威光ありながら此世の緣のいと薄く途中にての死別れいと口惜き事ならずやこれ何故と尋れば妾の兄の惡きに依て斯樣のことのありしなり遠きむかしの物語なれども今の婦女子の身に引當て他事と捨たまふなよく〳〵讀解得心あらば自然身の爲ともなるべしさて此次の條下にまるすは彼正作の處女お柳が温厚行狀のはなしにて右に說まるしたる楊貴妃によく似た事がありながら處女心のあどけなく前後不見のおもむきならで用心ふかく身を愼しみ哀れに感心する傳を

くわしくせり

第十回

くめ吉「玉八さん寔にいろ〳〵おやかましふございます堪忍してお呉被成ヨそしてマア七さんがお柳のおかけでひどい目にお合だと聞たから私きやアモウお氣の毒でならないは　玉「ナアニ其様にひどい目に出合たといふでもないヨそれだがネいゝ鹽梅に渡し場でお柳さんを七さんが見かけたつけねへ左様でないと何様な目にお柳さんが出合か知れないのだネくめ「アヽそしてまた妹を悪人が引出して行た途中に七さんのお友達がお在で助けてお貰ひ申すといふは手前勝手に言て見ると何ぞ深い因縁でもありますのかと思ひますは　玉「アヽ大かた左様だらふはネそれは左様とお柳さんをばマア何様仕やふとお思ひだくめ「ナニまだ何様といふ了簡もありませんヨ今に爺が來たらばよく相談を仕て遣ふとおもつて居ますは　玉「大かた今にお出だらふヨ今朝七さんがネ柳女の此家へ來てお在の事を知らせに使の人を上たらばネ寔に嬉しそうに禮をお言だとサくめ「アヽ左様でありませうヨたしかに若松からはお柳の家出をした事を云て行ましたのサそれにお柳は親父に不逢に此在地へ來たのだからさぞ案じて居ましたらふは其所へ知らせの使が往たものだから安堵しましたので嬉しい顔をしたと思ひますヨネヤそして何所かお柳は行ま

したかへ　玉「アヽ今しがた七さんが連て和十さんの宅へ往ましたは万一此所へ若松から傳聞て來ると悪いといふ心持で出かけて行たのでありますヨくめ「ネヤ〳〵左様かへ何様せうねへ其様にマア七さんに心配をかけて氣の毒だねへトはなしの所へ正作は生質たる正直律義彼若松からむづかしく談じつけられ是非もなしと他人の隱して呉るのを親身の口から其行衞を明白につげて伴なふ養家の後見鬼若松の澁九郎　正「ハイ御めん被成まし七三郎さまのお宅は此方でございますか　玉「ハイ此方でござゐますくめ「ネヤ〳〵爺かへト言ながら粂吉は立出て障子を明る澁九郎はちよいと小蔭へ隱れて家内の樣子をうかゞひ居る正作は粂吉の顔を見て　正「ヲヽお粂かなに何樣して此所へ來て居るのだか此身お柳が若松から逃出して居なくなつたといふので何樣に迷惑をして困つた事だらう寔にむつかしく言掛られたから若松の人を同伴に連て來たアナト言つゝ玉八にむかひ　正「ハイこれは御免被下まし貴嬢は此家の姉上さんでございますか　私は寺島の正作と申す親父でございますが今朝ほどはお使を被下まして有がたふございます殊に娘を種々お世話被成て被下ましたと　承りましたが寔に御信切に有がたふそんじます何卒旦那さまへよろしくお願ひ申ますそしてアノ娘を　私にお渡し被成て被下まし養子に遣りました先のお人がこゝへ同道で參りましたから直に其人にわたして遣度ございます其約束でその人を連て參じましたからトいはれてお玉は當惑し粂吉と顔見合せしがさすがに苦界の掛引を見樣見眞似で心

さかしく了簡つけて　玉「チヤ左樣でございますかへアノウ七さんが子今朝お前さんの方へ使をば上ましたが子他人さまの娘御を家内へ置のは少しの間も心配だからと申て先程あのお孃を連申てお前さんの方へ參りましたヨ途中で行違ひに成ましたらふト挨拶をしながら粂吉に眼配すればこれもまたお玉におとらぬ才智もの玉八の心を悟り小用の風躰で裏口から七三郎へ此事を知らせに行て今暫時家内へ歸るなと止めおき何くはぬ顔でまた元のお玉の所の裏口から這入れば此時若松の後見澁九郎は正作の脇に座して志ぶ九「ヱヽ私は若松の後見をいたして居ます者でございますが只今此正作さんの言れますにはお柳が此方へ參つて居るに違ひないから直に私へ渡すに依て家出をした所も此方さまで他人の娘を一夜でもお止なすつた落度も咎めずに勘辨して呉ろと段々詫言をいはれますに付て先私も何事なく連て歸らふとぞんじて參りましたがまた此方にも居ませんと被仰ては少し正作さんの被申た言葉と違ひまして　玉「チヤ左樣でございませうが私どもの方でも大事をとつてお柳さんを實の親御さんの御宅へ送つて行たンでございますヨトいはれて志ぶ〳〵澁九郎家内を窺ろ〳〵白眼まはしし志ぶ「ヱヽ成ほどそれに相違がございませすば是から直に正作さんの所へ參じますがもし又迎島へお柳が往て居ない時は此方へ引返して參つて七三郎さんにお掛合申て急度道理を付ないければ濟ませんから何卒左樣思し召て被下ましト面をふくらして表へ立出小聲になり獨り言　澁「アヽ何だかあやしい仲間だト行む

中に正作もいとまを告て立出る我娘なる粂吉にも親しく挨拶なさゞるは倶に疑ひをうけまじと澁九郎への遠慮にて唯正直の氣ばかりか他人と彼これ爭ひて理非の差別をする樣な氣質ならねば澁九郎の苦々しき言葉をおそれ玉八へお柳の世話になりし禮を念を入れて言もせずそこ〳〵にして出行ば脊後見送りて粂吉は氣の毒そふにお玉にむかひくめ「玉八さんさぞ氣に障るだらふけれども堪忍してお呉ヨ　玉「オヤ何をへくめ「ナニサ私の爺が餘り馬鹿で他人さまへろくに挨拶も出來ないで此樣にマア七さんやお前に苦勞をかけて置ながら平氣で妹を若松へ引戻される了簡で居るは子餘り齒がいゝ樣だはそれだから自分の事ばかり用心をしてお柳を若松へ歸してさへ仕舞へば苦扨をするといふ氣だは子　玉「ナアニ左樣でもあるまひが子たしかに今來た奴がお前の親御さんを嚴敷おどかして掛つたものだから如彼正直な氣でとりこしらへもならず在の儘にお柳さんが此方にお在の事をも言てお仕舞のだから詮方がないヨそれは左樣と早く心さんとお前とで能相談を被成な今欺かして歸したけれどもお柳さんの歸つたのは啌だから又あの澁九郎とかゞ取て返して此宅へ來るヨ其時には急度むづかしくいふからそれを能鹽梅に挨拶する都合をして置ないと行ないヨくめ「ホンニ左樣だねへ何樣したらば宜らふか私の智惠ではなかなか考が付ないヨト話しの所へ米太夫何かいそ〳〵門口より　米「玉八さんお宅にかへ　玉「チヤ米さんかへお這入な　米「はいれと言なくつても急用があつて罷越たから這入なければならない

がオヤ〳〵糸さん何を其樣に鬱氣でお在だ　玉「ナニ子糸吉さんは妹の事で氣をもんでお在だ
ア子くめ「マア米さんお上りな　米「ヲヤ昨日此方に居た美い娘は糸吉さんの妹だといふ事ち
やアねへか　玉「ア、あの娘の事て私の所の七さんも氣をもんで居るは子慈愛そふだといつて
米「左樣かへ此身はまたあの娘の事に付て慈愛そふぢやアねへ嬉しそふで來たンだアなくめ「ア
レサ米太夫さん戯言ぢやアないヨ寔にさしかゝつた難義が出來て今お玉さんとも相談をして居
る最中だは子　米「なにが何樣したのか知らねへがあの娘に情人があるの亭主があるのといふ分
解ではあるめへのくめ「ナアニ左樣ではないが子養子に行た先の家を駈出して來たのだからそれ
に付て面倒な事になつて居るのだア子　米「なんの其樣なことならば何も氣をもむ理屈はねへ否
なら實親の家へ歸つて養育金でも出して遣つたらば濟そふなものだマア何にしてもあの娘は何
樣した　玉「アノウ此所へ晝間の中置ては悪といつて子和十さん所へ七さんが連て行ましたは
米「左樣かそれぢやア七さんも和十さん所にまだ居るだらふノ　玉「アゝ左樣だけれども今に呼
で來るつもりだから　米「ナニ〳〵それぢやア待遠だくめ「ヲヤ〳〵なぜ其樣に急迫のだへ　玉「米
さんお前マア誰に用があるのだへ　米「ヱナニサ此米太夫さんの御用といふは別義でない彼娘の
事について早急に　玉「アレサ其樣な洒落所ではないヨ何樣したら宜らふと當惑して居るのだか
ちお前も能智惠を貸てお呉な　米「なんの智惠も相談もいるものかあの娘に情人がなければ直に

面白いはなしがありやすそれで此身が駈出して來たのだアナくめ「オヤ實正にかへ　玉「何樣仕樣
といふのだへ　米「ヱ情人がなければ此米さんが情男になつて遣ふと思つてサくめ「オヤ〳〵憎ら
しい米さんだねへ　米「イヤそれは戯言だが實正にいゝはなしがあるヨ

辰巳清談　梅之春卷之五　終

辰巳清談

梅之春卷之六

第十一回

小うた「さッとふり來る夕立に雷さんは怖けれど私が爲には出雲より結ぶの神の蚊帳の内帽や晴行夏の空ト婀娜なる聲の新唄は此頃流行杉坂の坐敷に絶ぬ客人の酒の相手に坐を持てほどよき調子は娘のお稻いれ「兎喬さんお前はんの作唱の新唄を私に敎てお呉被成ましョ　兎「ナニ〳〵私のこしらへたのは面白くないから傳次の曲節新文句をお聞被成餘程品の能出來た唄だいれ「ヲヤ然でございますかト言ながら大多の傳次（此傳次は歳わかなれども酒をおもしろくのみて三昧せんもよく彈き坐もちの上手通家のひゐき多し）にむかひて膝をすゝめいれ「傳さんサア何卒をしへておくれな　傳「ナァニ此節何も新ものをこしらへた覺えはなしサ兎喬樣が出たらめにお言なすつたのだァテトいふ時此坐に居たる折江町の唄女おそめ三味線を下に置きそめ「アノ子傳さん彼一件だから何卒兎喬樣へお願ひ申てお呉被成ナ　傳「ムゝホンニ然だッけ子わすれて居たトいひながら兎喬の耳に吁けば此節兎喬は餘ほど酒を過し肱を枕に横に倒れるゆゑ傳次が吁ぐはなしも半分は夢中なるべし　傳「お曾女さん私が承知して居るから早くお歸ん被成そめ「然かへそ

れやぢァ何卒お願ひで御ざいますョ　傳「大丈夫請合兎喬さんが萬々一お前が早く歸つたと言て腹をお立なさりやァいれ「其節やァ傳さんは知らない顔サテホゝゝ　傳「またお稻さんがお樣の惡態がはじまつたいれ「オヤ〳〵何時私が謗言を言ましたサァ何時お聞だ　傳「此間聞ました眼と耳ばかり正月ならば誰でも所爲なんぞと當言被成た事がございませう私は實も御もつともだと思つて聞やしたいれ「イゝエ喧ばつかりそれは姉上さんでございますョ　てつ「オヤ〳〵私も其樣なこと傳「そのよな言わけを夫より私が否ならばいれ「なんだね傳さんお前は三味線と酒で能に被成ナ清元は兎ても　傳「燒ても喰ねへかテ犬にでも遣つて仕舞やせういれ「お曾女さん兎喬さんには私が然申すから早くお歸ん被成ョそめ「ありがたふ夫では何卒よろしくお願ひ申ますト生得たる溫厚さは容易筆にもあるしがたし發明にて半可通ならずお客は元來連の人にも實意の挨拶自然とあらはれ古今の美人といふにはあらねど愛敬ふかく賤しからず何となく可愛らしき唄女なりなどゝ今更いはずとも折江町のお曾女といはゞ衆人御存じの娘なるべし

斯てお曾女は杉坂の座敷を出て立かへる折から又も兎喬の俳諧友達卷山をはじめ唄女二三人兎喬の居る席へぞろ〳〵とおし入り眠りかゝりし兎喬の目を覺させ再度賑はふ酒宴の席時節に叶ひし流行の料理は名におふ杉坂の慾を放れて心を用ゐお客の腹へ十分とはまるを穿は料理番の傳吉が庖丁の美味なり

兎「コウ〳〵袞山さん賑やかにするのはいゝが騒々しくしては悪いぜ　袞「はゞかりながら百も承知だが唄女衆の三味線を彈のは騒々しくは有まひか子　兎「エそれも時節によつて善悪があり やす第一此杉坂の主人が心願といふは家内の娘達をもはやく縁付て仕舞てサ娘ぶんも女中も仕はず男世帶の樣にしてお客のお給仕は小奇麗な小僧の艶治郎らしくないのに麁末でなく立派でなくもつとも無頼なぞは夢にも爲ない樣なのにお膳を持運したりお酌をさせたり仕度といふ心がけだとサ　袞「なるほど舞臺であれほど看官のひゐきの多いのを思ひ限て老實になる了簡だから然でございませうト言ながら床の間にかけし横物の表具を詠

往昔澤庵和尚示御者曰　鞍上無人鞍下無馬　余聞之云　局前無人局上無石

立徹堂主人　醉書

十一世大國手

三つのみやこに名も高き坂東の三津右衞門なるをのこ今はしもなりわひすてゝ杉坂樓平六と名のりしはいとかしこき心ばへにこそさふらふ。そも杉坂とは禪門にこゝろざしある人のゑめしにかとゆくりなく醉のあまり笑ひの種にひぢりの歌おもひ出紙墨の費をなし侍りぬ

極樂はいづくの方とおもひしにすぐさか下の又六がかど

ト讀下して　袞「なるほど面白い文章だ杉坂主が是を珍重するこゝろでは少し俗事を厭つて極好

情に會席をして時節禪家の茶の湯でもするお客をまふけて淨齋の料理なぞをも爲食察度といふ願ひとおもはれやすト言ながら庭の方を見やり筆と硯の形を彫りし石燒籠の古物を賞などして程なく醉伏して眠る

實に身のほどを知つてたのしめば酒は百藥の長にして世の憂事をわするゝ長生の養ひなるべし此時兎喬と傳次は暫時席を去て跡には娘と唄女のみなり

トッチリトンの小唄の出たらめ文句「唐と日本のまん塲のゥ河岸イで。鰹が一本家根船で。おれがさした酒なぜ呑ぬ。老女さま此方へ引と。此ちくしやうめ。大峰富士山湯殿山。日毎夜毎の歩詣。お湯があるからお茶が出來る。ドッコイ遣らぬと背後から歸りは夜ざくら日吉丸ゥ　●「ヲホ、、餘りでた交だねエ。そして不殘有文句を十二三交るのだから。かへつて紛らはしくつておぼえ難ひ樣だねへ　▲「ア、私も最初に聞た節はなか〳〵おぼえられそふもなかつたが子幾度も唄ッたら漸と間違はないやうに唄へて來たは　●「ヲヤ誰が唄ひ出したんだ子へ「アノ子此間落しばなしの席へお客と同伴に行たとき。龍太郎といふのが戯言に唄つたが子寔に可笑かつたヨ　×「ヲヤ司馬龍太郎といふのは醉客と勇のはなしをするのは上手だ子エ　▲「アヽ。ドヽ一なんぞは餘ぽど細節唄ふはそして艶治郎風がないから能いヨ　●「わたしは龍齋の京談ばなしが面白いヨモウ〳〵可笑くつてあんまり笑つたら腹が痛くなつたは　×「ヲヤそれは能が兎喬さんは

何所へお出だらふヲお客にかまはず此樣に私達ばかり遊で居ても能のかねへ ▲「ナニサ兎喬さんの樣なお客の節に十分樂をさせて貰ふが能はヲ ●「ヲヤ左樣お言だが歳は行なくつても兎喬さんは何樣なに如才なからふ ▲「アレサそれだから勤め能といふのだハヲ旦那威光て力身を言たり高くとまつて藝者や幇間に難義をさせるお客なら樂をさせて貰はふとは言はないヨ ●「ハイ〳〵お前の御勝手は御もつともでございますお互に藝者根生といふものは何故此樣に勤め惜みをするだらふノウ少し口が掛らないと暇だといつて愚痴を言し ▲「骨が折るお座敷が少し續くと泣ッ頬をして腹をたつていやがるし ×「御祝義は何程多分貰つても不足を言たがるし ●「ホンニ兎喬さんもあんまり永いねへ何所へ行とお言ひで出かけたンだヲヱ ▲「ナニサ大多の傳次さんが何かこそ〳〵と囁てお供をして行たからなんでも外に急におもしろい所が出來たんだヨ ×「ヲヤ〳〵然だらふかヲヱト大勢よつて種々に語ふ折節唄女の多き中にて土地の名代評判高き芳町の田中屋のおちやらと聞へたるは年は行ねど流行娘いと美麗姿にて次の座敷へ入來る。夫世の中の通不通好風と野暮との理論を聽に唯各々の好不好心々の思はくにてその賞るのも賴みにならねばまた謗るのも當にはならず然はいへ自然と土地がらにて娘の風俗衣裳形婀娜なる者の多くあり其中にして他の目に咬こそと思はるゝは適れ他人に勝れし事のなければ叶はぬものぞかし爰に次の間へおちやらを伴なひ入り來りし客は歳齢三十七八才人品よき大家の旦那じ

て名は嘉兆といふ温順人なり和歌町の米太夫と東賀の二個附添ひて萬端賤しからず座敷の躰つとも奥ゆかしく見えたり然ば名におふ唄女のおちやらは座付賑やかにて酒宴の興を催す事なか〳〵他の唄女の及ぶ所にあらず生得の容儀美麗慈愛しけれども行狀正しく好色なる所爲を愼み花やかにして浮薄の事なければ萬客ひゐきをせざるはなしとぞ

偖這嘉兆が寔席の躰をつゞけて說ときは同じ風情の長くして看官に倦の叺もあらんかと僅量酒宴の賑やかなる席をまばらく三編に讓これより次の一回は思ひがけなき田舍道の最淋まき塲を一幕綴りて看意を變たり然ばとて此卷に續かぬ事をまるすにはあらず直に三編を讀たまはゞ忽地前段十一回の嘉兆兎喬が話のつゞきも解また婦多川の玉八粂吉が一件も速かに說つゞく樣にまるしたり這は爲永が一流にて例咄を半途で止めそれから外のはなしを說て外の話が又以前のはなしの續きとなすものなり必しも看官の氣を短くまを給ふなと

いふ

第十二回

這邊に何所と知らねども人里遠き秋の野に父よ母よと鳴虫の哀れも知るや白浪の寄せてはくべる榾の火に輪坐取卷きがや〳〵とおのが儘なる咄し聲 ○□▲△●印かけ合のつもりにて讀たまへ

●「ヤイ吉やい昨夜はうまくしやァがつたなちつと借しやナ　△「馬鹿ァ言へたつた金で一分と錢で一本によ　△「フウ夫じやァ又宿女郎へでもひッかゝりやァがつたらう　△「違へなしヨコウ濁酒を小半合買から昨夜ァの一條をうけて呉んねェかふいふ仕組よぐつとお床へまはると女郎がいふにやァモシお前はんの樣な氣のおけぬへすいた客衆はありませんヨ私きやァ年が明たらお前はんの女房にしておくれなそふすると毎日毎晩さし向で團子や揚物の喰つくらをしたいからとぬかしやァがるから我も男だッサどふでもして手前を女房にするから案事るなと言つたら又女郎のべらぼふがいふにやァ實に嬉しいヨッサそんならどふぞ前祝ひに今夜團子か揚物を買なといふから我がいふにやァよし〳〵其くれいなことを仕兼る我じやァねへと言つて財布から錢を四百文出して投てやつたらの嬉しそうな顔をして女郎の言事を聞ねへヲヤ情人は氣めへもんだヨともつて往きやァがつたゼどふもこてへられねへ　●「あきれた色深だァ　○「コウ手前達ちやァ恍惚はまァ跡に仕やな夫よりは先刻跡の建場で見掛た二人連のソレ一人は若衆一人は甘才ばかりの頭巾を冠て居る尼ヨ　□「ヲヽそれ〳〵ありやァなんでも只ものじやァねへゼ　△「左樣ヨ衣類の樣子から頭巾のあんべいじやァ尼の樣だがなんにしろ美麗婦女だつたゼ　△「そんなら此洞道へ來るだらうか　○「來るとも〳〵さつき建場で茶を呑ながら南畑村へはどふ往といつて聞たからなんでも此道へ來るにやァ相違ねへ　△「づつしり分前のあるといふわけかノ

○「左樣ヨづつしりどもいくめへがまあ兩人の身ぐるみはいでも餘程にやァならふし路金も少はあるだらうし尼だから金にやァなるめへけれども美麗婦女だから此人數でまはりの〳〵小佛として見ねへずいぶん霜枯の仕事にやァ上首尾だらうト咄す拆から向ふより田畝づたひに此原へ夜道をいそぐ二人連一人は尼に今一人はまだ前髪の美少年杖にすがりて足引の山の端出る月影に顔見合て涙ぐみ　少「お前さんさぞ御足がお痛ふございませうこんなことゝ知つたら跡の宿へ泊ればよう御坐いましたに建場とやらで聞たら南畑へはぢつき一里か一里半だと申たからちつとも早くとぞんじてねへ　尼「左樣サどうせ斯ふやつて出たからにやァ怖いこともおそろしいともかまはない氣で居ますけれどもついぞ見たともない此樣な野原をたつた兩人で夜夜中歩行のはト咄し中途へ後の方すつくと立し悪者ども悪者「コウお前方何所まで往のだ送つてやるからどうぞ酒代をお呉んなせへト言れてびつくり驚きしが弱身を見せてはゆくまじと心を志づめて　尼「モシお前がた酒代なんぞとお言だけれど私どもは修行の身だからどふも持合がないから堪忍してお呉ヨトりつぱに言へどぶる〳〵とふるへる足を踏とめかね兩人は顔を見合せて透があつたら逃げ延んと思ふ氣色を見てとる悪者悪者「ヤイ衆人が這所へ來てお願ひ申すが能い我達ばかりじやァくださらねへトヨト口の下より六七人ヲイといらへて出來れば兩人はなほも胸轟き何といはんも先達涙袂を濡す野の露とともに消なん心地なり若衆は怖さうち忘れ　少「此樣に

先程から譯を言つてあやまるからどふぞモウ堪忍して見退してお呉んなさいナ　尼「アレあの少年がいふとほりどふぞ堪忍してお呉なさい今にわちきどもの身の上が元の樣になるとお前がたの名を聞て置てたあんと酒代でもなんでも上るからそして私は出家の身だから今はどふもあげたくつても何品にも持あはせがないから惡者「何だエ出家の身だエ夫じやァちよふどいゝ私どもがよつてたかつて念佛講をしてあげるからどうぞ往生する樣に慈愛がつてお呉んなせへ。ヤイ手前達にも跡で樂ませるから其若衆が邪魔を仕やァがるとめんだうだからそこらの木へでも縛りつけて置けト言はれてチイと三四人若衆の側へ立寄つて繩をかけんとする所へいつの頃にか後の方十六才ばかりの娘を連れし町人風の一人の旅客今この若衆に繩をかけんと立かゝりたる惡者が襟がみつかんで二三間もんどりうたせて投退たりこちらのかたにも五六人尼をとらへてりふぎんに手ごめにせんとするところを又もや後の辻堂よりあらはれ出たる其人は飛脚躰なる一個の男。尼が上帶引ほどき己が毛臑をあらはにして樂淫寄らんとするわる者が手をねじあげてづでんどう折しも月は雲に入り急に降來るむら雨に一寸先も見えぬ闇衆人これに途をうしなひ右とひだりへちり〳〵に命から〳〵逃ゆきけり若衆は尼をたづねつゝあつちこつちとかけまはり七八町もたづねしかど尼の行衞の知れざるに其身もいたくつかれしかば四隅見まはすむかふのかた薈家根ふりしひとつの社神か佛かまら壁も落てあらはす破れ小舞蔦にからくむ竹椽に

暫時と腰をうちかけて　若「マア何所へ逃てお出だらうさぞ私をおたづねだらうァ、案じられることだト言ふ折からまた雲をもる月影に後を見かへる堂の内ひそ〳〵泣居るひとりの娘。若衆はびつくりまたりしが心をまづめ娘の顔をつく〳〵詠め氣味わるければものをも言はずまばし見詰て居たりしにぞ娘も若衆の顔を見て少しは落居しおもゝちなり

作者曰　必竟これなる娘と若衆と顔を見合せて後またいかなる說話かあるべき夫は次の卷をよみて知るべし

辰巳清談　梅之春卷之六　終

梅之春三編序

そもこの草紙は北方の佳人が元日の未明に藪入てふする鶯の初音の告に二日の若湯五町の廓を觸しより大黒舞の癖までうつして彼山東庵の穿にもまだ見ぬ花の色香を傳へ遠く辰巳の河岸にも送り實に粹なる梅の一株餘の木に勝れる名木ならんと自稱の初編を出せしが第一の卷の一冊でも得がたき里の新趣向またあるまじき作意にあなれど野暮には不解粹書ゆゑさらに珍重の賞譽を聞ずさりとて二編三編とうらをかへさば自馴染となりて面白き評判うけることもやと作者をひゐきの文溪堂が得意へ上手の商ひ口這も利ものゝ新板なりと進めて捌く問屋の丹誠首尾を一時に揃へよと急ぐを漸〳〵元氣となし室咲と等しく無理こじつけに作りあげたる

梅の春最早一枝にて實を結ぶ全編とはなせり

狂訓亭爲永春水誌

辰巳
滑談

梅之春卷之七

第十三回

世の中は何が常なる飛鳥川昨日の淵は今日の瀬と變るならひを變らじと誓ひに嘘はなけれども定めがたきは男女の中。互ひに思ひ思はれて實と眞が有ながら屆かで長くこがれつゝ果は過さるむかしとなり只なつかしと年月をはかなく送る身の上を哀れと知りていとおしむ人もなきこそ悲しけれ爰に龜戸村の片邊り畑と町の裏の方柾木の垣の其中に雅俗を兼し庵ありあるじといふは年齢二十の上を多くも越えず人品けだかき尼にして色いと白く眼元口もと可愛らしく聲は鶯の音色にも勝して艶しければ自然と愛敬こぼるゝ如く適れ此婦人の世にありて黒髪の艶やかに紅粉の化粧こまやかなる節はいかばかりか美麗はなやかなりけんと噂せぬ者もなかりしとぞ當時斯如世をいとひて淋しき所に住居はすれど遣を見繼の縁者のあればにや何不足らしき事も見ず十四五才なる小女一人を使ひ折節は物縫女なども來りて庵の内賑はしく三味線の音も釐夜絶ざる事あり今日も朝より客來りて晝過頃まで遊びしが最さゞめきたる女連にて隅田の堤見の儘しにや田甫傳ひに出行しが跡には尼の淋し氣に溜息を吐て居る所へ止宿に來て遊び居

たりし二十四五才の女もつともこの尼のためには目下と思はれたり勝手の方より茶の煎花をこしらへて持出　女「モシ貴嬢へお茶を入直しましたから召上りまし。　チヤ涙を落して被爲入のかへ　尼「イヽエナアニ餘りお客の會釋に意屈したから血の道氣で涙が出たのだヨ　女「然でございますか乍併今日のお客では些お心悪ふございますノサ　尼「チヤ何故エ　女「なぜと被仰けれどお出店のお賤さんが今日のお衣裳やお髪の上の花美な事を御覽しましたかへ　尼「ア、見たヨ何も花美で似合はないといふ程でもないはチ容貌が美しくつてお在だから歳より餘程若くお見えだヨ　女「チヤ然う仰被から私しやア貴嬢のお心根が齒がゆひ樣でございますは　尼「チヤ〳〵何がへ　女「イエ外じやアございません貴嬢が其樣に法躰して世の中を捨てお在なさるのが悔しいほど惜しくつてなりませんヨ　尼「チホヽヽヽ何をお言かと思へば不理屈事をいふのだチへ私が此樣な姿になつたのは昨日や今日の事ではなし今更何樣なるものかチへ夫だから賬やかな所に居ると世の中の事が淺しくなつて悪いによつて此樣な所へ引籠で他人に逢ない樣にして居るのだはチ　女「チヤ今更何樣も詮方がないと被仰けれども貴嬢はまア今年幾歳におなり被遊ます此春やう〳〵二十一ではございませんか何程お死去なさつた啓次郎樣の御追善だからと申て啓さんもモウお死去被成てから今春は四年になるではございませんか一周忌が過と他所へ生れかはつてしまふと言ふ事を聞ましたから最早啓さんは他所へ生れてお出なさつて今年は三才ばかりの小兒でございませう

尼「チヤ〳〵然だらふかチへ夫でもお寺のチ女「アレサ貴嬢はお寺の和尚さまの言事を眞に承てお在なさるから行ませんお寺は職業だから他人を勸めて坊さんに仕たがつたり後生だの前の世だのと種々の事を啞を吐くのでございます夫はマア實正の事にもしろ貴嬢のお身の上は只啓さんとは夫婦の御約束ばかりでまだ御婚禮をなさつたのではなし一日でも同床にお眠た事はなし貞女をお立被成もほどがございますはチ不吉な事を申樣でございますが啓さんが殘つて貴嬢が先へ死なつてお仕まひ被成たら此節まで啓さんが獨身で坊さんになつてお在被成ませうか今年で二十二か三にしか成は被成ますまひ互に恍惚てお在なさつたからと申て男子の心で何しに義理を立て女の爲に十八や十九才で出家になりますものか其當座こそ悲しいとかいとしいとか言ても呉ませうが一生涯女房を持ずに居る男が廣い世界に二人とも在たら夫こそ年代記とやらにも書載られませう實正に貴嬢の貞女をお立被成のは誰も賞人はございません　尼「ヲホヽヽヽ然うなさけなく言つてお呉でなくつても宜はチ私が尼になつたのは他人に賞られ樣といふ氣ではないヨ只啓さんのお死去被成たのがおいとしくつて悲しくつてならないから直に死ふと思ひ詰たのを斯して尼になつたのだから可憐そふだと思つてお呉なねへ　女「サア夫がおいとしいから私が此宅へ上る毎度に何卒お心を取直して世の中へお出被遊樣に仕度と申すのでございます今貴嬢がお髪をお生し被成まして島田にお結はせなさらふものなら何樣にお美しくお似合被

成ますだらう夫こそ御本家の御兄イさんでも御隠居所の御母堂さんでもお悦びなさるのが目に見える樣でございます御兄弟三人の中で女の御子は貴嬢ばかりじやァございませんか其御身を澤山そふに尼になつて被爲入のが母御さんへ御孝行になりますか能まア考へなさつて御覽じまし斯してお在なさるお姿を折節御覽被成母御さんが涙を落してお泣被成ました事は幾度だか知れません何卒意地をお張なさらずに人並の御姿におなり被成ましなヲへト還俗をすゝめるは何樣か道ならぬ事に似たれど信實の心から如斯に言なれば又憎むべき事にはあらず暫時ありて

尼「ヲホ、、、、お時どんが私をひゐきにする心から其樣に言てお呉れのだけれどもモウ此樣に世の中をはかなくおもつて後生の事ばかり考へる樣になつて居るから行ないはヲ夫にまた此程から異變夢ばかり見ていよ〳〵萬事否になつて氣色が悪いヨとき「ヲヤ何樣な御夢を御覽じまして其樣に氣色が悪いとおつしやるのでございますへト聞れて少し言葉なく鬱氣し樣に在けるが

尼「アノウお前だから隱さずに言がねアノウ去年の秋父上さんのお寺參りに行たことがあつたつけヲへとき「ヱアノウ田舍のお寺へでございましたかへ

尼「ア、然うサ難波田のお寺へ參つたとき途中の旅宿に止宿た晩ヲ寔にモウ〳〵怖ろしいこわい夢を見たのサトこれより前に著したる六の卷十二丁め旅の所の一條をくわしくお時にはなし聽せければお時は其物語を倩と聽て呆れたる顔色になり

とき「ヲヤ〳〵マア夫がお夢でございましたのかへさぞ怖ふございましたらふヲへ

尼「アノヲ夫が些も夢の樣でなくつて雲助だの漢者だのゝ顔も飛脚の顔も娘と通りかゝつて前髪の子を助けた町人の顔もいまだに能覺えて居るヨそして其夢に見た前髪の子には旅宿た旅宿を翌日立て四五丁行と則夢に見た辻堂の前で逢てヲとき「ヱ、、イそれじやァ夢だか何だか分解ませんヲへ

尼「ア、私も逢たその節は前髪の顔を見たら恟りして又夢を見るのかと思つたらヲ先でもなんとか思つたそふで私の顔をまけ〳〵と視たつけが私も氣味の悪い樣な心もちになつたから供に連て行つた與助と定どんを前後に立せて難波田の方へ歩行たがヲ其前髪は其所に彳んで居たつけが供の人を待合して居たのだと見えてアノウ難波田のお寺へ參つて父御さんのお墓を拜んで居たらばヲモウ〳〵誠に恟りしたヨとき「ヲヤ何ぞ出ましたのかへ日中だから幽靈は出はいたしますまい

尼「ホ、、、、其樣なものじやァないヨとき「そして何でございますヱ

尼「アノ何サ途中で見かけた前髪がヲ亦お墓所へ參りに來たヨとき「ヱイお爺さんのお墓へでございましたかへ

尼「イヽヱ他のお墓へサとき「然でございますか夫からお歸りには路運にお成り被成ましたのかへ

尼「ア、先からものを言かけたから途中喧しをして歩行て夫から松山の箭弓稲荷さまへお參り申すと言つたらば其少年も信心だからお參りをすると言つてヲ其少年の供も二人私の方の供も二人兩方の人數では六人になつてモウ些も怖い事もないから同伴に稲荷さまへお參り申

てからヲさき「ヲホ、、、、些は面白ふございましたらふ　尼「アヽその少年の供をして來た次郎どんといふ人が寔に氣輕な人で可笑事ばつかり云ので氣散じをしたはさき「オヤ〳〵マア妙な事でございましたヲそして半分は夢で半分は現然といふのは寔に不思議でございますヲヘ

作者曰此書二編目下の卷半冊十二回の段は尼の夢と心得たまへかし彼十二回の末に夢といふことを看官に告たてまつらず文段にも夢らしき躰を綴らざりしは腹稿と執筆し門人の行違ひ校合の誤りにて數十種の新版ゆゑ全く春水の麁漏によつてなり御ひゐきの諸君よろしく見ゆるしたまへと願ふものなり

斯てお時は夜食の支度など調へて主の尼に備ゆる用意をして居る頃は普門院の鐘入相を告げ庭に咲亂れたる櫻花のちら〳〵と椽側へ散しく風情閑清なる事いはん方なく他視にこれを眺めなば庵主の尼の躰相はいかに

とれもまた入相の鐘にちりやせん外山の梢咲初にけり

と詠れし樣にはあらずして花の姿を蕾の時より我から嵐にさそへかしと日蔭にまぼみし尼の心根哀れにも又歎かはしけれ

第十四回

再説お時は兼てより心に思ふ由あれば夢の吐しを幸ひに最うち解し風情をなしさき「お八重さまへ尼の頭の節の名なり今尼「ヲヤ何故以前の名をお呼びだエさき「それでも貴嬢を他のお比丘尼さまの樣に佛門名を申てはお似合なさいませんものを夫は左樣と先刻のお咄しの美麗前髪男さまは何所のお方でございましたヲヘ　尼「アノウ私は其時聽かなんだがヲ與助が聽たらば親川のお酒の問屋で大造なお家だと言事であつたヨとき「ヲヤ然でございましたかそして其御方と途中の旅宿で相宿を被成ましたらふヲトいはれてお八重はおもはずも顔を赤らめ　尼「アノウお稲荷さまから歸りに河越といふ所の旅やヘ同伴に止宿たが何樣も私が此樣な姿だから私も先も遠慮して別〻の座しきに止宿たのだから必あしく察してお呉れでないヨさき「ヲホ、、何樣して私が惡く存じますものか其時私が御供いたして居ど貴嬢が何と被仰ても無理に何して上ますは尼「ヲヤ何してとはエとき「アレサその美少年と貴嬢と情人におなんなさる樣にいたして上ますと申す事サ　尼「ヲホ、、何樣してマア其樣な事が出來ませう勿躰ない罰があたるはヲト口には言へど心の底には其人の俤眼前に絶ぬ思ひは過去りし夫と定めし啓次郎に似たるも迷ひかそれよりは十增倍の好男と思ひそめたる身の上も千すじと撫し黑髪を落して今は情ない愛相盡し首の上悔めどかへらぬ溝命此世に出し甲斐もなき因果な事と此程はくよ〳〵愚痴を繰かへす折しも我より歳上なる緣者の娘が花見にとて今日立寄りし花美姿流行小袖の色好み他視も花の盛ぞと賞

そやすのを聞しにつけ此身もなま中世を捨ず元の姿であるならば何あの嬢などに負なんやと思ひもせしが然ありとも自惚ならぬ天然の美人にあれば髪なくとも心を惱し彼是と言寄し男も少からずされば お時が種々とうち解かたる艶言に菩提の道は何所やらわすれて除し春心溜息を仕ばかりなりとき「ヲエお八重さんへ貴嬢は何と思しめしますかは存知ませんが母人さんへの御孝〳〵行にモウ〳〵過た事をば捨てお仕舞被成まして何卒今一度世間へお出遊ばす樣には出來ませんか後生願ひも義理立も母御樣の御心を安堵させ申てこそ神佛のお心にも叶ひそふな事でございますまだ同床もせぬ人へ貞女の道の操のと古風堅い事を被仰ても未來とやらから啓さんがお嬉しいお返事かお禮の沙汰がございましたか寔にマア椽の下の力持とやらでございます夫よりか世間には幾人も好男がございますから何れでも貴嬢の御氣に入た人を撰どつて御緣をお結び被成て御覽じまし母御さんはじめお兄上さんも御親類も御一同に御安心被成事何卒お心をお改めあそばして然被成て被下ましナ左樣あそばすと 私も何樣にか肩身廣く花見や芝居の御供をして歩行ますはヲ 尼「イヽヱお前ばかり然う言つてお呉れでもモウ何樣も先刻此宅へお寄のお賤さんの樣には美麗はなられないヨそしてヲト言かけしが後を不言無言て居るとき「ヲヤ〳〵貴嬢もマアお氣の弱いもほどがございますナニアノお賤さんが何樣にモウお化粧を被成て他視繕てお歩行なさつたとて貴嬢が今でも島田にお髪を被遊てお振袖を召か夫でなければ何でも花美な

衣類を着て御覽じませなか〳〵お賤さんが及びもない事てございます第一貴嬢はお賤さんよりお歳が三才もお下ではございませんか實正に貴嬢がこれからお娘御さまのおすがたにおなりなさいますと夫こそ戀煩らひをする男だの色狂氣になる男だの人死だのと大騒ぎでございませう尼「ヲホヽヽ其樣な馬鹿をお言でないヨ誰人が私の樣な者に搆ひ人があるものかヲ とき「イヽヱそんなに卑下なさるには及びませぬ今でも貴嬢を戀慕ツて居る人が幾人あるか知れやァいたしませんは夫は左樣と只今貴嬢が何か言かけてお止なさいましたが何だか後を被仰ましな 尼「ナニ何でもないヨ只ヲ何樣しても私は緣付やうなことは思ひ切ツて居るヨトいふをお時は倩々と聽て考へ居たりしが彼南畑め旅の事夢と現の前髪の事何樣やら其時お八重の心に慕はしくもなりし所尼の事ゆゑ詮方なく其身を耻て言出さず過去りしあとに今も猶其人ならではと思ひ詰ていよ〳〵世の中をはかなく悟る心底ならんと推量したるゆゑとき「アノウ 私が考へ付ました事がございますがヲ貴嬢のお心は 私の考へ付た事に相違ないと存知て申ますから必ず〳〵 私にお聽し被成ますナエやゑ「ナニ幼年時分からして側に居てお呉のお前だから隱しは爲ないヨ何だかマア言つて試てお呉なとき「ヲホヽヽ何樣もお隱しなさりさうな事たやゑ「ホヽヽ何だかお言なヲへとき「然なら申シませうがヲ。アノウ河越でお逢被成た親川のお方なら御夫婦になさりなさる氣がございませうヲト言はれてお八重は惚りし顔赤らめしが紛らしてやゑ「ヲヤマア思ひも

付ない何樣して其樣なことが思ッたとても及ない願ひだはテさき「イヽエ夫は貴孃のお心一ツで不及とあきらめて迚も世の中へ立かへッて男を持ならば其節の若旦那ならば元の姿の花も飾らふが然も出來難い事だから一生涯男は持まいやつぱり尼になつた容形で居よふと思し召てゞざいませうト星をさしたるお時が詞にお八重はいとゞ耻かしく思へどさすがに隱し兼て心の底を語合ける

是よりお八重の物語は猶永ければ次の巻を看るべし

辰巳清談　梅之春卷之七　終

辰巳清談

梅之春卷之八

第十五回

夢の浮世に見る夢の思ひがけなき正夢あれば扁なる悟り顔も亦人情に疎しといはんか爰に眞河とかいへる町に大黒屋福右衛門といふ酒問屋あり主人は三十七八才にて俳名を嘉兆と稱萬事に行屆いたる通人なりしが一個の男子ありて福之助といひ今年は年齢十八才なれども生得病身ゆゑか世の常の子供より容形もちいさく殊に物和らかな氣性にて顔かたちは些やさし過る風俗色白にて眼すゞやかに口元かはゆらしく若衆で居れども娘の子なるべしと思はぬ者はなかりしが此ほど何やら氣病にて兎に角鬱情風情ゆゑ家の血脉の一人子なれば兩親の案じ大かたならず兼て出入のお醫者にかゝらせ久しく藥を用ゆれども一向に驗もなく日に增し元氣は減じつゝ瘦て漸々に色青ざめ最覺束なき大病となりしかば家内の驚きはいふも更なり親類緣者出店の人々毎日に見舞音信で彼所の醫者此所の療治と種々に相談し唆是と心を盡せども更に其甲斐あらざれば如何なさんと評議しけるが其頃武州松山に箭弓稻荷大明神と申奉るは靈驗利生あらたにて祈る所の願ひ成就せずといふ事なし殊に別當何某は神德を盛んならしめんと大志願を發し日

護摩の修行怠らず講中の息災延命を祈られしが大黒屋の親類礫川なる伊勢屋吉右衛門といふ者來りて福右衛門にその御利生を物語ければ福右衛門は信心を發し倅福之助の病氣全快を祈り奉らんと代參を立護摩修行を願はせしが其代參の者歸り途にて旅の出家に出合それより路連となり不圖福之助の病氣の事亦松山なる箭弓稲荷へ病氣全快の願掛に參りし事を咄しければ彼旅僧は歩行ながら指を折りて占卜を考へる躰なりしが代參の男に向ひ旅僧「モシこりやァむづかしい病氣だねへ　代「へエ左樣でございます先勞症の樣な樣子で兎角に氣が鬱情と申ますから旅僧「イヤ〳〵是は然ではござらぬ全くこれは邪祟がして居るのでなか〳〵藥りばかりでは治る日はないからその祟りを鎮める樣に被成が宜　代「へエ夫じやァお加持でもして貰ひますのでございますか旅僧「イヤ〳〵加持祈禱をしても双方の心のはれる樣にして進ぜられないければ此病氣は治らないて　代「ハテそれは些不解事でございますヲ邪祟があると被仰かと思へば双方の念のはれる樣にしろと被仰のは何樣いふ理由でございますか旅僧「なるほど夫は不解はづじやが煩つてゐる當人には知れて居る事だテまかし恥しがつて他人にとはなすまひから誰ぞ心置のないものに内々言付て當人の胸に思つて居る事を聞せるが宜また近頃見た正夢が凡夫の了簡に不解に依てます〳〵迷つて病氣にもなつたのだ先方も氣病にして居る念が自然と通じた因縁事なか〳〵一通りの病人でないから何れ家内へ歸つたらば兩親に言聞せて先病人をば東の方の閑

清な所へ養生に遣つて置が能左樣すれば當人の迷つて居る念も屆き的然の存念も遂る樣になる道理があつて夫から縁を引て家内和順の嫁も貰ふ樣になる事が出來るまかし此僧が言事を疑がつて家内に斗り病人を置ては行ぬこれも箭弓の御社の御告だと心得てかならず麁略に思はつしやるナ後々思ひあたる事が有ふから　代「へイ〳〵これは有がたふございます貴僧はこれから何地へお出被成ますか相成ませうならば私の親方の住所の眞河へお立寄被下まして右のお咄しを委しく主人に御聽せ被下ます樣に旅僧「イヤ〳〵夫には不及事サ唯當人に言ふには夢に見た尼の事も娘の事も前世の約束事だから遠慮をするに不及恥かしいと世間を氣難せず他の願ひも叶へる樣にと言聞せるが第一じや。アイヤ私は是から其事に付て隅田の三圍まで行ねばならぬから貴樣と別れ申そふト言かと思へば忽ちに板橋の宿の東端より田圃道へ曲ると直に旅僧の形は消えてかげも見えず箭弓參りの大黒屋の手代と抱への鳶の者は互に顔を見合せしが凡人ならぬ旅僧の告し詞は是偏に松山さまの御告ならんと心付ては勿躰なく亦氣味わるくもなりしゆゑはるかに河越の方を伏拜み路を急いで眞河の家に立歸り福右衛門夫婦に萬端委しく語りければ倩〻と途中の事旅僧の旨趣を考へ全く箭弓稲荷の御利生の御告に相違なしと尊み愼んで彼旅僧の言たるごとく福之助をば婦多川の千葉といふ所へ別莊をまつらへ女・男三人程を付て病氣の保養をなさせんとはからひ其もよりにて心利たる人を撰みしが幸ひ嘉兆のひゐきにする米太夫

を思ひ付しかば此度の事を巨細に語りて萬事米太夫に任せ頼み置嘉兆の内儀お鹽といふ福之助の實の母は日毎の樣に通ひて看病し醫師も二人までかゝり居る同前に見舞療養おろそかならざりけるが或時米太夫は福之助の氣を慰さめんと來りて床の側に種々と浮世ばなしなどして氣をはらさせ居たりしが今日は例よりも病のなやみなき樣なれば折よしと思ひ　米「トキニモシ若旦那お前さんマアお心の中に物を考へてお在被成て夫が御病氣のはじまりじやアございませんかそして亦その事を夢に御覽じて彼是と苦勞に被成と聞ましたが慥に然でございませうヲト言はれて福之助は惘りし　福「ユナニ思つて居る事を夢に見たとへ何樣して夫をお前が知つて居るのだらふヲ今迄私が誰にも咄して聞せた覺えはなし亦夢に見た理言は當人の此身にさへも不解事だから他人に咄しの仕樣もない事たが寔に奇妙だノウ　米「何樣も不思議でございませうヲ夫だから萬事私にうち明て被仰ましナ當時古風に戀煩ひでもございますまいが何かお氣に成被事がありませう何でもお隱し被成ないでお咄し被成ましヲ　憚　米太夫が身に引請て何樣な事でも働きますぜ亦お前さんの事たから唄女ヤ娘の事ならば向ふで氣を揉ふといふ男振でお在被成し金銀に御不自由な事は夢に御覽じる事もあるまいし何でも氣やみに被成樣な理はないはづでございますぜ是非今日は思し召め有事を私に明して被下ましト實意をもつて米太夫が只向に說つくれば福之助は起直りて　福「それほどお前が信切に言つて呉れるのを隱して居るも悪いか

ら過去た事の咄しと近頃見た夢の事を咄そふかからかならず笑つて呉なさんな　米「ナニ何樣いたしてお聞申程で笑ひますなんぞといふ不實な事がありますものか何卒委しく被仰て被下ましト福「夫ならば咄そふが馬鹿〳〵しく永い事たから退屈をするだらふ　米「ナニ〳〵長ひ續きものが流行ますから成丈長く十編までもつゞくのが宜ございます　福「ソレ其樣に雜言か丶否たが米「イヱこれは不調法眞平〳〵サア老實に聽聞いたします偏にお願ひ賴み上ます　福「コレサ勿躰ない富士講の事なんぞを酒落に言つちやア悪いはな　米「ハイ〳〵然ならばモウ〳〵正然と愼しんて承りますトいへば福之助は少しく笑ひ顏の元氣も出て過にし事を語り聞せるそのをもむきは物語に咄させがたきすじなれば在ける儘を書綴りて福之助の詞にかへたり

且いふそも〳〵此物語りは二編より以前に說著すべき段なるをこゝにいたりて書つゞれば兒女子達は讀わけがたくも思し召す事ならんが初編より追々に繼出す卷を繰かへし照し合せて見たまはねばわからぬ事の多くあり亦作者の筆癖にて當時の人情にあたらぬ所は例も夢か芝居の旨趣に綴りて本文の助とせりそも〳〵此人情本といふ草紙の一流を發し爲永物と御評判御ひゐきを蒙りしより以來二十年毎春發行新板歲々に數百部なればやゝともするときは八文字屋の古きが種にほしくなり淨瑠璃本の趣向を借たくなり歌舞伎の正本を用ゐたくなる事あれど人情一家の風調を改めず只々今の世の中にありそふなる緯を綴りいださ

んとすれば古きを捨て新しきにうつる事なし難く止事を得ずして卷毎に夢てふものを頼とせり看官作者の拙きを叱り給ふなと願ふものなり

第十六回

再説福之助は米太夫に事巨細に夢の旨趣を語りければ米太夫は不審は思ひながらも福之助にうちむかひて 米「ハテ不思議な事でございますナ　ヱ　おかしながら其様にお思ひなさつても今が即時といふ譯にやァ行ますめへが時節さへお待なせへますと夫りやァ譯はございません夢といふものは五臟の疲とか申ますから兎角不快がわるいと看るもんでございます其様なに夫ばつかりくよ〳〵と思つてお在被成ますと行ませんテ。ナァニ婦はそればかりじやァございません廣大世界でございまさァ夫に似た婦人も幾等もあります　私が見付たらば藝者だらうが處女だらうが早速お世話をいたしますからマァ〳〵氣永に被成ましト迷ふ心を鎮めしは通か不通か知らねども有繋嘉兆の氣に入とはいわねどおれて眞成なり福之助も始終を聞て居たりしがいと信切なる言葉を悅びて 福「然信切にいつて呉るから何でもお前にまかせるから何様ぞ野暮な者だと笑つて呉なさんな是も深い因縁か因果だらうヨ雄子らしくもねへと自分じやァ思つても何だか氣にかゝつて忘れられねへ 米「なんのお前さん其様な事を思つて宜ものかねへ夫りやァお前さん

ばかりじやァねへ世間にある習ひだから若輩時にやァ誰しもあたりめへでございますのサ夫だから淨瑠璃の文句にも「如何さま是は然もあらん景清ほどの勇士なれども現に色情は思案の外トあるじやァございませんかあれほど強い勇士でさへも婦女に心を惱ましたじやァございませんか昔でさへ然でございますものを當世は猶の事誰も笑ふ樣な無意氣者がありますものかト種々と心を慰めければ福之助も莞爾わらひを含みながら 福「大そうに故事來歷を引出したノウ今じやァ時代ものは流行ねへぜ 米「それ御覽被成芝居や狂言でさへ古めかしいものはすたつたじやァございませぬか夫にお前樣は亦河越のお寺參りにお出被成た時途中の辻堂の前で顏を見合して夫からお寺のお墓の前で再度顏を見合て知己の樣になつてそして一夜同じ旅宿の家に止宿合して其前の晩に夢にも見た尼と娘が戀しいとは餘り古風なものがたりにもなさそふな事て珍らしいと申度が芝居の狂言になんぞすると些も見物には不解ませんぜ 私が此樣に お聞申ても夢の所と夢でない所と同じはなしが續くから即時考へましても何所が夢で何所が眼前に在た邊所だか紛らはしい樣でございますハ、、、、、

ト笑ふ所へ侍女の蔦といふ十五六才の娘茶を煮花にして持來り愛敬をふくみ茶をさし出して勝手へ立て行

米「モシ餘程可愛らしい娘でございます子　私はモウ色氣を捨て此頃は桑門の樣になつて居

ますから女はいつこふ眼に付ませんが此方の下女はよつぽど宜ひ婦でございますに大方目把のお氣に入でございませう福「イヤこれは御挨拶お前の御意にいつたら媒妁を仕やうかな米「イヤそれは寔にもつて有がたいがまかし不釣合でございますから先お斷申て面でも冠つて參つた時にいたしませふ此面で情男になると敵役の樣で看官にわるく言れますから　福「看官ァわるくいつても婦せへ得心なら能じやァないか。イヤまかし女承知すればいゝがちつと六かしい相談だのふ　米「イヤハヤ大は情ない御挨拶だ。エヽ最う少し能生れたら此樣な事にあるめへものを。なぞと言つて氣をもむやつサ時に旦那それは然と私はお暇乞にいたしませう　福「大そう急ぐぜ是から直に妾宅といふ洒落か子　米「イエ最う情男も闘しいものでごぜへます女せへ見れば狂氣の樣になつて口をかけて見ますが兎角首尾よくめへりませんハヽ、餘り長咄しに遲くなりましたトいひながら烟草入や烟管を仕舞暇乞して立歸る

古今和歌集に在原の業平朝臣の戀歌に。みずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなくけふや詠めくらさんと詠けん思ひ焦れし君ゆゑにはれぬ月日の武藏鐙かけて誓ひし神佛其御利益があるならば末は婦夫となりおふせ中睦添ふが樂しみと一途にこがれしさまなりける福之助はさまざまと米太夫に慰められけれど晴ぬ心の夕月夜雲間を漏て椽先へうつる風情は木々ならで思ふ君がともの思ひまさる正夢覺やらで戀と色との二筋に迷ひしゆゑか煩惱の羈に今はからまれて解

もとかれぬ蔦かつらさがりて松の甲斐あらば今ひと度の面影が移る樣なる水鏡光る木の間の月影がさして差込む胸の癪これも惑ひのひとつから發ることこそわびしけれつた「アノ旦那さんエ何を其樣にふさいでお在被成ますのでございますがなほ〳〵悪くなりますと宜無御座ヨ早く快お成んなさいますと向島だの觀音さまだのへ私が御供いたしましてさんじますから何卒お早く全快おなんなさる樣に神さまや佛さまを朝夕拜んで居りますヨ　福「ホンニお前も諸倶心配して臭るのは寔に忝ないけれど何だか此身の病氣いはか〳〵しく全快ないからいけないヨまたが今日は餘程氣色が能から明日にでもなつたら能なるだらふつた「左樣被仰ばいつもよりか御機嫌が宜やうでございます。アノお庭の光景の能ひことは。とんがさへ〳〵といたしまして午刻よりも明るふございます。アノお庭の光景の能ひことは。と絵にでも畫た樣でございますねへ　福「左樣ヨ餘り晴たから月に耻かしい樣だァ今夜は月の入までは夜なしを爲るがいゝヨ併情人でも俟て居やァまねへかエつた「チホ、、、私は其樣な事はぞんじませんヨ貴君の戀こがれてお在被成ますお方の事でございますかエト聞て福之助は胸にこたへて悄りと仕たる顏をば笑ひになして　福「へ、、、あんまり知らねへ事もあるめへお前の樣な美麗婦女を當世捨て置やうな野暮な男があるもんかへマア少計した所が二三人は請合だァつた「ホ、、、貴君は何を被仰のでございます　福「餘り浦山しいから嫉妬見たのサ些と此身

もお前の樣な婦に思はれて見てへもんだが何と思つて吳る氣はなしか子つた「ヲヤ〳〵マア私風情が勿躰ないそして貴君にはモウ〳〵焦れてお在なさる情女がでざいますじやアありませんか　夫に其樣な憎らしい事を被仰と情人さんに言告ますヨト

いはれてさすがに福之助はまだ緣にしをも結ばねど宿世の因あればこそ夢てふものも賴みとし米太夫にさへうち明て笑はれ種をかたりしものが譬その人戀しとて今側近く介抱人に賴みしお蔦にたはむれを言ては浮薄の不實にてなるべき願ひも破れぬべしまた然なくとも

これまでに兩女の婦を慕ひながら夫を本意遂ずお蔦に言より若いたづらをするならばこれも大事の他の娘を疵付るにあたる不屆ぞと心で心を禁るは適れ有がたき若者なりけり

福「ハヽヽ戯言を實事にして腹を立なさんなヨサア〳〵最早行て寐なせへ夜が更るヨトいふ折から月かげは雲にかくれて庭もせの木の間もくらき朧の空子の刻の鐘さやかにひゞき遙に按摩の聲物嫁蕎麥の聲いとゞ淋しく聞ゆめりそばや「蕎麥ア引うひ引　あんま「按摩引。〔引鐵棒がラン〳〵〳〵

辰巳清談　梅之春卷之八　終

辰巳清談

梅之春卷之九

第十七回

我戀は知らぬ山路にあらなくに惑ふ心ぞわびしかりけるとは實に此歌の如く戀路に迷ふ時にこそ夢か現の差別さへなくて忍べば鳴ぬ螢の身を焦す思ひは猶も十寸鏡移れば變る世の中にかわらぬものは戀の道昔も當世も貴も賤者も別ちなく互に忍ぶ文字摺の君ゆゑ心亂穂の招く芒にあらねども振むく笑顏の有情さはいとゞまさりて手弱女の姿を床く思ふなるべし爰に玉八と七三郎はお柳の事や何やかを咄すも互に睦しく惚つ惚にし中なれば斯もあらんと思はれたり玉八は七三郎の傍へ寄て　玉「アノ子お柳さんの締はどう仕たら宜ろふかチエ　七「然ヨ此身も誠に困つて居るテ隱して何所へか當分の裡置てやらずばなるめへヨ如斯に姉上が來て賴から今さらつき別しても遣れも仕めへじやアねへか　玉「ほんにチエ　粂吉さんもどんなに困て居さるだらう度々私きに恃被成からチエ正可捨ても置ないヨ何卒四方八方が治る樣に早く仕てあげたいチエ

七「どふも然早は行ねへハナ自然と相談を仕なくちやアいけねへノサ夫はそふと最早何時だらふ今日早く起たせへか日が永い樣だノチ未日暮にやア餘程間があるかナア　玉「何故其樣に日が

暮るのをお俟だェおほかた情婦でも晩に來るのかへそれじやァ追ひ出されないうちに私きは何處へでも行て仕舞ますヨお前さんの傍を別れちやァ私きは生て居る氣はさら〳〵ないから淵川へでも身をなげて死で仕舞ますから何卒可愛相だと思つて香花でも手向けてお呉被成ましと涙を袖にて拭ひつゝさめ〳〵と泣ければ七三郎は玉八にむかひ　七「何だどうか仕たかェ死の生るのと誰と死んだェおほかた外に情男でも出來たんだろふ夫だから種々の事をいつて愛相をつかさして此身と縁を切る氣かへ　玉「ヲヤ〳〵マァ何をお言被成んだェ私きが夢にも思ひも仕ないことを其樣いふ譯じやァありませんヨお前樣の心を引て見たんだヨ堪忍しておくんなさいヨモウ〳〵これからは決して其樣事は言ないからヨ　七「コレサ其樣に正氣になつて騒ぐ事はねへワノ此身が方でも不安心だから氣をひゐたのサ婦といふものはいくら正直と言たつても毎日〳〵傍にばつかりも居ねへからの事サトいはれて些し心も鎮まりて莞爾と笑ひを含みて　玉「私きやァどんなに氣が揉たかしれないヨアノお柳さんとでもどうか仕被成たんだと思つたはヲエ急地にお前樣が其樣事をおいひ被成たからヲ是御覽な胸がどき〳〵するヨ　七「エどふか仕被成とは聞にくひぜ何をどふ仕たんだェ　玉「アレサお前樣も言葉咎をお仕だヲエ竟それは私きがいひそくなつたのだヨ堪忍してお呉なヲ　七「エ餘程虫がいゝなァ此身が方に些とでも謬があると目くじらをたつて置て自分の事は如斯通りだァ時に胸の動氣は如何だェ　玉「モウ〳〵私きにやァ不

解ないヨ何だか種々な事を仰だヲ最先刻に能なつたはヲエト自分にて胸へ手を入て見て莞爾笑ひを催しつゝ　玉「ヲヤ〳〵未此處が動くヨ七さん少許御覽なさいなヲ　七「ヘゝエ此身が看たつて能もならねへノサ誰ぞ情男に直して貰ひ被成へ　玉「實がないヲナァニお前樣でなくッちやァ早く直りは仕ませんはヲト互に睦しく笑ふ折しも近所の者と被察て障子の外より窺ひながら出し抜に　玉「不義もの見付た其處動くな　玉「ヲヤ悒くり爲たヨ誰だと思つたら吉どんか否な聲色だヲ　玉「ナァニ餘まり急ひたから出來損なつたノサ聲色にやァ餘程骨折たもんだが年を重たら齒が抜たせいかひどく悪かつたァ　玉「ヲヤ未齒の抜る處じやァあるまひヨ若いくせに　玉「イヤコリヤァ有難い壹升買ふかヲ　玉「アゝ壹升でも二升でもお買ヨ正實だから　玉「夫アそふと些と用があつて參りやしたが玉さんが愛相が能からせりふを忘れたァ　玉「何だェ正實に用があるのかへ　玉「其樣旦那樣が然被仰たが何卒清元の稽古本を借てお呉なさいまし　玉「ヲヤ〳〵肝心の御用はいつでも後廻しだヲエ他の人だと否だけれどもお前の締だから借て上るヨト清元の本を取て遣ると手に取戴ひて　玉「アラ有がたや忝けなや是さへあれば我願ひも成就　玉「ヲホゝゝお止ヨ聞に何樣に骨が折るかもれないヨ　玉「然かへそんなら歸りやしやうヨハイさやうならば玉「ヲヤ最うお歸りかへ早い仕舞だヲヲホゝゝ　玉「歸るといふと大そふに御機嫌だァ　玉「ヲヤ〳〵マァ憎い口だヨ　玉「これぞ則親ゆづりサトいひながら出て行く七三郎は先刻より此事を

聞て居たりしが可笑さに莞爾して玉八と顔見合せ　七「ハヽヽ何んだかつまらぬヘ用だナァ彼奴のお蔭で可惜處を幕にして仕舞たァ　玉「ほんに能氣なもんであります子人の心もまらないで戯言ばつかり言てからに私きなんぞはどふか如斯氣に終日なりたいもんだ子　七「何時でも如斯氣じやァねへかへ人にばつかり氣を揉せて自分じやァ人情の事やなんぞを思つて居るもんだから仕る事爲事が手に付ねへヤァ　玉「アヽ正實にお前樣のやうな情男があると子氣がもめて〳〵命も心も短かく成る樣でいけない子　七「道理で無闇に發憤と思つたらモウ此方は御斷りか子玉「アレサ左樣じやァ御ざいませんヨお前樣が浮氣だから子他にでも情人が出來たろふと思つて案じるのだは子　七「エヽ口と腹とは大違ひだろう當世は其樣事が流行からト咄の折も前向の二階にて

まんない「後に尾上は伊太八が顔つく〳〵と打詠わしと云者ないならばかふした身にはならんすまひ親御さんの御かんきもみんな私がまわざぞやあひ初てより一日も烏のなかぬ日はあれどお顔を見ぬ日はないわひなゥまげ〳〵あへばおやどのしゆび合悪きは胸にまりながらすいたが因ぐわつかのまもそば入離るゝがいやまして朝の歸りもまだはやいもふ一ッぷくとだきまめし其ことのはがいつゝけとまげりしゆゑにおまへの身あだとなりゆくかなしやなゆるしてくだんせ八樣と手を合せ伏おがみ思はずはつと泣出す

玉「ヲヤ氣障だヨなんだか私きが身のうへの樣で悲くなつて不意涙が溢るやうだ子　七「お前が尾上とか　玉「餘り自惚だ子それだが嘘にも如斯眞實のある婦に競てお呉だから嬉しいヨ何卒何樣に七さんも私きを澤山可愛がつて必浮氣なことをして氣を揉しておくれでないヨ　七「ヲツト夫は此身の方でいふ事だァ浮氣な藝者活業だから世間に夥も好雄子があるもんだからひよんな事でもして此身の面を汚穢ねへ樣にして呉るがいゝのサト互に顔を眺めつゝ痴話も口舌も嫉妬も惚た中とて猶さらに可愛さまさる嬉しさがつもり〳〵て沖の石人こそまらぬ乾く間も身をまる雨の淫々と泣も涙のむら時雨時ならなくに沾然と濡にぞぬれし濃なかは濱の眞砂の數々や拙き筆の命毛に盡せぬ中とぞ知れけり當下粂吉は妹の事も案じられそれに付ては種々と相談もありけれど抱の身なれば氣もいそがはしく兎に角安堵ならざれば右やせん左せんと思ひしが先七三郎玉八にも語らふての上にてと心をさだめ此家へ來りて門の障子を明てくめ「御免被成ましヨト此聲を聞付て玉八は粂吉と察しければ　玉「ヲヤ粂吉さんかへサァお上り被成ヨこれよりたがひに粂吉はいろ〳〵と過にし事の禮を陳て火鉢の側へ居りて笑を含みながら氣の毒そふに七三郎にむかひてくめ「アノヲ七さんェお柳が事に付ては誠に心配をかけまして有がたふございますヨ何卒能やうにお願申ます　七「何に其樣に案じ被成事はねへは子人の世話ァ他が仕なくつちやァする者がねへは子なんでも此身に任して置なさるがいゝくめ「ホンニ御信切に被仰て下さいます

はおほかた深い因縁で有ませうか子へ彼通り爺は律義斗で益に立ませぬからお前様斗が便で有ますヨトことばすけなく勝手ないふも娘唄女のまんじつにて心あはれに思はれける

第十八回

却説鬼若松の澁九郎は寺島の正作が許へゆきて尋れども お柳の往方一向に知れざるゆゑ是非とも七三郎が方か妹の粂八の所爲にて隱しおくにちがひあるまじと推量しければ再度婦多川の方へ到りてその動靜をうかがひゐたりけるが七三郎の方にては油斷ならずと思ふに依て和歌町の家にお柳をおかず園庄の四ッ目といふ所に心やすき者ありて其家はまかも田畑の入まじりたる百姓の家の間にて餘り人の往來せぬ所なれば世をまのぶに便りよしと心付て當分はお柳をあづけおき其間に鬼若松の方の掛合をかたづけんと隱して賴み預けしを澁九郎はいさゝかも氣が付ず四五日和歌町の邊をうかがひ餘り尋ねあぐみて五日目の夕方五ッ目の友達の方へ行んと何心なく四ッ目の田甫を通る折しもお柳はかくと知らずして近隣の家の据風呂へはいりに行かへり路の眞中にて澁九郎と丁度行合これはと驚くお柳をば目早く見付る澁九郎まぶ「ヲヤお柳さんかいゝ所で出合た何樣してマアこんな所にうろ〳〵してゐるのだトいはれてお柳は胸とゞろき逃出さんとおもへども一筋道の左右は泥溝詮方なければ立とまり　柳「アノ用があつて此近所へ

來て居ますが子　頓て、また廓へかへりますヨト言紛して行すぎんとするを男は引とらへコレサコレサそんな平氣な事をいつて濟ものかおらァ若松の内ぢやァ大腹立だアサア〳〵すぐに連て行柳「ヲヤ〳〵私やァ實正の爺に然言て斷つて此地へ來ましたからおまへと行ずと宜ございますヨまぶ「イヽヤ母人殿に賴れておまへを連に來たノサ　柳「ヱヽ正實かエまぶ「ヲヽまれた事サそんなに惚々〳〵する事はねへハノヲサァ此身と同道に歸りなせへ　柳「アレサ夫でも私ァ最些と此地に居たいからどうぞ置てお呉よい時分には私が獨りで歸るから子母上にも然言てお呉ヨお案じでない姉上の所に居るから明日にでもなつたら歸るは子まぶ「ナニそんなに便々として置て能ものならば態々〳〵尋て來やァまねへはナそんな事をいはずとおれと一所に歩びなせへ　柳「イヱ〳〵夫でも否だものをト落る涙を袖にて拭ひ苦しき胸をおさへつゝ暫時應もなかりしが澁九郎は怒氣面にあらはれてなほ〳〵聲をあららげまぶ「コレサこの柳女は泣ほどかへるが否なのか　柳「アァ私は歸ると活てはゐないまぶ「ヱヽこの孃は聞譯のねへ顏に似あはぬまぶとい女だナァサァきり〳〵あるかないか最早日が暮らァナトお柳が手を取無理無躰に將てゆかんとすればお柳は聲をもたてず堪びなきまぶ「ヱヽ、ゑれつてへ性のこわい孃だァ否なら蹂縛てゞもつれて往にやァならねへせまだこんな手緩い事ちやァねへヨきり〳〵あるかねへと斯だぜト手をひどく握るゆゑ柳「アイタヽヽどうぞ堪忍しておくれヨ往からまぶ「サァそんならあゆびねへナ　柳「アイヨト

應へはすれど心はすまぬ歸り路を先へひと足迹方の事のみ思ひ出されて往もゆかれず歸りなば辛き呵嘖にあふならんと心迷ひて胸も轟き身もわな〳〵落る涙は八ツ口の袖にも漏て鏗々と聞ゆる鐘は利勘寺の御法の聲と諸倶に諸行無常のひゞきさへ五臟六腑にしみわたり思ず涙瀾然と降くる雨の音さへも時にとつては寂寞しく篠をつくかと思はれけり折しもむかふの衢道よりあらはれ出たる駕籠かきども互にひそ〳〵私語て點頭ながら立ならびかゝ「モシ旦那さん下直やりませうがお乘なさらぬかへト訪かけられて僥倖と獨り笑つゝ悅びてゐぶ「イヤ駕籠やかいゝ處へ來て呉た何程でも遣るからやつて下ッしィヤまかしながら此通りの依怙意地ものだから容易の事ぢやァいかねへみんな手をかして呉なかゝ「ハイ〳〵ト手とり足とり駕籠へ入んとまたれども聲たてられては面倒と澁九郎は手拭をとりてお柳が口へさる轡泣にも聲は立られずたゝ茫然とまたりしがお柳は駕籠へ打乘れて何處へゆくかと思へども手の縛めを荒繩にからめられたる苦さはたとへていふべき樣もなしまぶ「イヤ大きに御苦勞〳〵まことに氣骨をおらせやァがつた　トキニ鬼若松へ直に遣てくんなかゝ「ハイ〳〵承知いたしましたトいひつゝ走りて行けるが思はぬ道へゆかんと仕たりければ澁九郎は後方より聲をかけまぶ「ヤイ〳〵其方ぢやァねへどこへ往んだァ引コレ〳〵ヤイ〳〵トいへども聞ず行ゆゑに漸々追つき駕籠を駐んと仕たりしがまたも出たる二個の偷兒聲をもかけず澁九郎が襟首つかんでなげ出し何方へなるか逃さりける

九郎は暫く息をも吐ず悶苦みしが漸々心も付ければ彼方此方と見まわすにお柳が往方一向に知れざれば周章むかふより近所の者と見えて二個連　▲「コウ吉やァ先刻の婦は餘程美麗ナどふか我等たちも如斯のに思はれて見たら嘸嬉しからふなァ「ェゝもう恍惚か其顏ぢやァ及ばぬ鯉の瀧のぼり則醜婦が相應だァ「おきやァがれ己が顏ァなんだ乞食を見るやうだァ眼は窪んであるしお負に鼻は低し云ぶんはなしョ　●「コウ〳〵そんなにわるくいつて呉なさんなこれでも情人の三四人はあるぜ其情人が聞てみねへ嘸々なくだらふト途に寐て居たる犬の尾を踏ゆゑに　犬「キャン〳〵〳〵　▲「それみろうぬが情人がなくはァハゝゝ　●「こゝまで出て俟てゐたんだらふ信實もんだナァ　▲「さうヨおめへの情人は毛が抜ていけねへノヲ　●「ェゝなんだェが事を斯いひやしたァ　▲「なんといひやしたヲ　●「さればサおまはんは意氣な人だがヲ私は此間から焦れて居ますけれどどうも言出しにくいから今まで無言て悐て在けれどこれからは情人になつて可愛がつておくれョトいやァがるからムゝよし〳〵といつたッけが嘸俟て居だらうおらァもう歸るぜ　▲「正實か　●「まれた事サなんと隨分いゝ色事仕だらう　▲「ムゝ市村か紀伊國やのやうだァ　●「イヤコレハ〳〵御挨拶ト咄しの半へ以前の澁九郎は横合からまぶ「ヲイ〳〵何時だヲ　▲「ァゝ惻り仕たァ　●「盜賊だぜ　▲「ワァ引ト走出し逃んと仕たるゆゑまぶ「コレサ〳〵

情ない盗賊ぢやアねへは子　●「アヽ然かへ我等また盗賊だとおもつたアト兩人胸をさすりて　▲「コウ吉やイ昨夜の今時分だらふかナ　●「コレ〳〵そんな戯言を言ちやアわりいぜ　▲「それでもおらにやアきれねへはナトいふ時わはや雨もやみて月は雲間を出けるが亥刻の鐘ゴン〳〵〳〵ト搗出しければ澁九郎は指を折數てまぶ「ムヽ最亥刻かアヽ飛だめに逢たアト呟き乍ら痛手を堪て後方の道へこそ〳〵と後をも見ずして失たりける二個の者は嚮の方へ往乍らトヾ一▲「月は婀娜にて田毎に移る主のまことはいづくへか　●「イヤ〳〵まだいゝのがありやす　▲「なんといふのだ　●「ないたばかりで涙は見えぬうはべばかりか時鳥　▲「なるほどこいつアいゝトいふ聲も遙に過て淋しさいとゞまさりけるが跡さ風のそよ〳〵と草木の音のみ聞へけり（以下原稿脱丁）

辰巳清談　梅之春卷之九　終

梅之春四編序

なには津に咲やこの花冬ごもり。今は春べとさく梅は。花の諸木の魁にて。既に花の兄とはいへり。是この册子は狂訓亭が。一世の戯墨多かる中に。すぐれて丹誠の功を纂み。枝を撓培して。手に手を盡せしもの故に。樹ぶりのよきはいふも更なり。匂ひも殊に濃やかに。一輪ごとに婀娜と艶なる色を含みし咲わけのまだ莟なる少女ありひらき初たる盛の花はやすがれたる年増女もありて。その情態を穿ちたるは。現に中本の魁にて。他に儔もあらし山櫻の花のたよわきより。尚詠ある梅の春。四編は四月結局の實をさへこゝに結びとめ

しは。粹書の本意とやいふべからむ。

應需積翠道人松亭の北窓に書す

辰巳清談

梅之春卷之十

第十九回

東安樂寺は筑前宰府天滿宮の別當信祐といへる人天神の御告によつて廻國執行の時公の御免を蒙りて勸請あられし宮居にて天國の御劔飛梅の若木なんど疑ふまじき靈寶なりとかや

因に曰世俗童の諺に天國の劔を拔放す時は雷雨烈しく止事なしこれによつて鞘より少しも拔出す事を忌恐るゝと言傳へたり是天國といふ名を雨に緣ある樣に心得且は天拜山の虛說を實事と思ふ童蒙の言出したるおろか事にて笑にも不足說なれども幼兒の爲に其事をいふ夫天國とは刀鍛冶の名にして神代の物といふにもあらず神の授けしといふ品にもあらず抑天國は人皇四十二代文武天皇の御宇大寶年間の刀鍛冶にて大和國宇多郡の住人なりその弟子に天座といふ上手ありもつとも天國は日本刀鍛冶の名人十七人の中の一人なれば名作ものにはあれども雷雨の事は取に足らず但し今天保十二年より千百四十年の昔の古物の事なれば珍重なる劔にてはありけり

夫は爾て置き天滿宮の此所に鎭坐ましますは二百餘年の事にして東に知らるゝ名所なり春より

夏にうつる頃は藤の花房美しく池のめぐりを咲亂れ水にうつれば紫の色のさゝ涙書くがごと、行路かたしと敎の爲か登り下りの反橋は心丸かれ角あるなと異見あたまふ御利益を表せしものか境内の梅は粹なる參詣の中に近頃遠からぬ住居とはいへ朝夕に兩度詣でゝ中門より百度を上る二人の女朝は江湖上で戸を明ざる曉ごろに參詣し夕方になれば人顏の見えわきがたき黃昏にかゝさで參詣も百日ばかりはや滿願の日なりけん例より遲きを厭ひもせず百度をあげて御門を立出でき「お八重さんさぞお心がせきましたらふヲエヤ」「イヽエお前が是非とお言ひだから無理にお參り申たが子夫でないと百日目の今日になつて參りそこなふ所であつたヨとき「ホンニ然うでありますヲエ深草の少將さまとやらではございませんが九十九日目で出來そこなつては悔しうございますは子何でも今夜斯して百日目で一日もかゝさずにお參り被成ましたから急度御願が願ひの通りになるに違ひございませぬヨヤ」「然うだと誠に嬉しいけれどもこれまで長い間に少しも斯うだといふ手がゝりがないから何樣もとき「イヽエ夫はお前さんの了簡違ひでございますヨ實は私が先さまへ參つても出來る樣にいたしますけれども何を申ますにもお前さんのお髮が延ませぬのに先の若旦那にお逢せ申すのが否でございますから其儘にして置ましてございますが最早此節の樣では何樣な美男にお逢ひ被成ても恥しくはございませんヨ明日あたりは入髮をして島田に結て見ませうか子エヤ」「ヲヤ〳〵何樣してまだいけないヨ入髮をしても箕をかけ

ても廻りが根になる樣には屆かないものヲさき「イヽヱ少し油を餘計に付ますと大概は屆くものでございますヨやゑ」「ヲホヽヽ何樣してまだなか〳〵いけないものヲさき「ヲヤ急に空が闇くなつて參つた樣でございますヲやゑ」「アヽヲ子へ雨でも降つて來ると困るから急がふヲへト天神橋をうちわたり我家へいそぐ河添の田畑田家に商人家のまぢりし路の向ふからあはたゞしく駈來る人影お八重とお時は心驚き片脇へ寄り樣子を見れば駈來るものは十六七の娘にて白き素足の褄高く脊後の方を見かへりながら息もたゆげに走りつゝ小石に爪突て漸々起上り四邊を見まはし泣ながら袖を顏にあて行かゝるを小かげに伺ふお八重とお時生得やさしき心から巨細も知らねど年ゆかぬ娘の夜道に泣躰を見れば哀れに察しやり囁きながらお時は立出言葉をかけんとする折しもにわかに。サア引と降下る雨娘は先へも行かねて茅家の軒に駈入てさもわびし氣に空を見あげ又お八重とお時を見つけ心に驚く躰なりしが女二人の外にまた人影なければ安堵してむすめ「こまりました雨でございますヲへさき「ハイサ急に降出しましたから困りますヲへお前さんは何所までお出のでございますか日の暮れましたのに只お一人かへト聞れてさすが娘氣に當惑せしが隱さずに言ふがましとや思ひけんむすめ「アノウ私は實父の實は寺島でございますが他所へ止宿に參つて居りました其家から近所の風呂へ參つた途中で怖ひ目に出合て逃て參つたのでございますヨト涙ながらに話說ける

そも此娘はお柳なりとは知らせたまふべき事ながら彼澁九郎が途中にて引捕へ辻駕籠に乘せし所路を違へてかつぎ行ゆゑ澁九郎は是を咎めける折しも悪漢らしき者どもが出て澁九郎を投倒されかごもろともに行衛なくなりし躰は此前九之卷に記せしごとし然てお柳は澁九郎に捕へられしは現なき樣になりて脊後の方を見かへれば多くの狐火飛違へて其かげに澁九郎何やら獨言を言つゝ駈まはる躰に見えしかば夜道の野中怖しけれども捕へられて鬼若松へ連行れるが否なれば只當もなく逃出し五ツ目の方より此所まで走來り降出す雨が緣となりお八重お時に身の上を尋ね問るゝ事とはなりぬ

ときヲヤ〳〵それじやアお前一人で寺島へお出ではまた何樣いふ難義が出來るかも知れないヨ。子へお八重さん左樣ではございませんかやゑ「アヽヲヱ何樣して此お娘御ばかり其樣な遠い所まで怖くつて行れるものかヲこの嬢子さへ否でなくばマア私の家へ連て行て今夜は止宿お上なそして明日甚助にでも送らせてお上げなト實に温順育たる大家の娘の慈悲ふかく隔心のなき事はありがたき氣質なるべし同じ心のお時もやさしくときヲヤ「アノヲお前さん私どもの所はこのお嬢さんと私と女中が一人甚助どんといふ御飯焚が一人都合四人限りで他には氣の置れるものはないから御遠慮なしにお出被成ナりう「ハイ有がたうございますがお氣の毒でございますかちやゑ「ナアニ些も遠慮を被成でないヨ袖ふり合すも他生の緣とゝ〳〵ございますから心配を

爲ないでお出被成ヨトすゝめずとてもお柳の身は行先それぞと定めかね當難を除れたる途中の事ゆゑ願ふてもありがたかるべき僥倖ゆゑ嬉しさ譬へるものもなく是また親の信心する三圍稲荷の御利益かと思へば先刻の狐火も斯る所へ導きたまふ御惠みにてありぬらんと心の中に念じつゝりう「左樣ならば何卒お供をしてとき「アヽ氣がねをせずにお出被成ヨトいふ所へ張燈を手に提げ傘を脊負ひたる男前後左右を見まはしながら來るをはやくも見とめるお時は聲をかけてとき「チイ〳〵其所へ來たのは甚助どんかお八重さまは此所にお在なさるヨ　甚「ハイ〳〵お傘を持て參りましたらば最早止そうになりましたとき「ホンニ小降になつたチヘ路はわるくはあるまひチ　甚「ハイ私は素足でございますがお嬢さんはたしか東下駄をおはき被成てお在なすつたとぞんじましたからお傘ばかり持て參りましたが路はから〳〵して草履で歩行れますやゑ「夫じやア直に參らふチへ。チヤお前は素足で痛くはないかへりう「イヽエナニ宜敷ございますヨ　甚「アノお時さんの下駄を持て參りましたとき「ナニ私はこの駒下駄で能いからその下駄を此お娘に貸て上てお呉れナ　甚「ハイ〳〵とさし出す下駄をお柳は氣の毒そふにりう「イエナニ足がよごれて居りますから素足の方が宜ございますヨとき「アレサよごれても能からおはき被成ヨト甚助に言付て足を拭はせ無理にはかせて伴なひつゝ頓て庵へ連れ歸り情深くもいたわりける

第二十回

斯てお柳を七三郎の方より被頼て預り居たる家にてはお柳が近所の風呂へ行て其儘歸り來らざるゆゑ俄に驚き騒ぎて此所彼所を尋ね探しけれども一向に行衞知れざれば氣の毒ながらも其事を七三郎の方へ言送りしが其夜はすでに子刻過にもなりしかば只桑吉の方へ知らせたるのみにて夜を明し桑吉は其夜桑本の座敷に出て在しかば案じながらもすべき樣あらざれば是も同じく夜が明て七三郎の方へ來ればはや玉八も來て居たりしが　玉「チヤお桑さんかへマア大變だチヱお柳さんは何樣したらうチくめ「寔にモウ異樣事てお前樣や七さんにまで苦勞をかけて私きやアお氣の毒で何樣かと思ひますは憎らしい嬢でございますヨ　玉「ナニサ夫だからといつて彼柳女に咎はないヨマア何所へ連て行れたらうチへ若松の方の奴が見付て連て行たのか夜だから人賣男にでも盗行は爲まひかチくめ「ナニたしかに澁九郎とかいふ奴に見付つたのだヨ　玉「なんにまてもマア可憐そふだチへくめ「七さんはエ　玉「今人を頼んで來て柳女の樣子を聞糺しに行と言て誰人頼みに行ましたへくめ「然でありますかお氣の毒だチへ　玉「ナアニ七さんは然う言つて居ますは譬若松で何と六かしく言つても金さへ都合て遣と落着から何卒其算段を仕度ものだと工夫をして居るから何樣か能樣に掛合だらふがチ肝心のお柳さんが居なくツては行ないチト案じ入

りたる折からに急ひで來たる米太夫門口を入より早く奥へ通り　米「いかに家内の者ども慎んで承われ鬼若松より討手に向ひたる某は否身吟三郎張安と名號ものお柳といふ美女を此家にかくまひ置よし慥な注進サア尋常に渡すまひかくめ「ヲヤ〳〵米太夫さん何だ子へ聲色所ではないヨ　米「ナヽなぜ〳〵　玉「何故じやアないヨお柳さんは昨夜居なくなつたは子　米「エヽ引ナニ實正か啌だらふ　玉「アレサ啌じやアないヨ

トお柳が居ざるによつて七三郎が人を雇ひに出行し事などを委しく語れば

米「イヤハヤそりやア行ないのウ實は柳女の事について妙な一件が出來たから寔に僥倖な咄しだとおもつて駈て來たが居ないと聞ては落力だ何卒して此方へ取戻し度ものだノウトいふ所へ七三郎は立歸り　七「イヤ米太夫さんお早ふ　米「ヘイお早ふ　玉「アノ子米さんが能事があるといつてお出だが行ないヲヘ　七「ナニお座敷なら粂さんお前もマア行が宜はナ　玉「アレサ私たちの事てはないヨお柳さんの事てサ　七「エ米太夫さんが見かけた山でもあるといふ譯か子　米「大ありサ併肝心の本尊樣の往方が知れないじやア何にもならねへ些たア手掛でもありやすか　七「ナニさつぱりどうしたのだか仔細のわからねへのだから困りきりやす那嬢にかぎつて男をこしらへて逃るやうな事はノウお玉　玉「アヽ何樣して那お幼稚がそんなはたらきが出來るものかヲお粂さんのまへだが他の事の怜悧なのに合せちやアあの道はまだねつからだものをくめ「ア〳〵さ

つぱり氣意地はありませんヨ　七「トキニ米さん柳女の事について宜はなしとはマア何樣な譯だヲ　米「その僥倖な咄しといふは誠に奇々妙々な因縁で申さば神佛のお引合といふ樣な理屈サヲ其處でお前はん方や柳女にも咄して悦んで貰ふと十分思つて來た處で斯ういふ譯だからすつかり思入が違ひやした先其相談が究れば鬼若松の方の立金も何も世話なしに濟で實親の正作さんまでが浮みあがるといふものサと云て先の旦那が六十ばかりの隱居爺さんで柳女を妾にするとか圍ひたいとかいふ相談なら私も兎や角口を利も爲ねへけれども其旦那といふはさる大家の息子株でお柳さんも慥か一度顔を合せた事があるといふ事だが其息子さんがおつりきな因縁で柳女を女房に仕たいといふ譯サ處でその息子が何樣いふ人品だといへば男振がすてきに美ッてさづ譬て云て見やうものなら田舍源氏の光氏を町風俗に爲たのだから急度柳女の氣にも入るにやア違へねへト咄しの折から門口より　使「ヘイ些物がお聞まをしたうございます此御近所に七三郎さまと被仰お方はございませんか　七「アイ七三郎とは私だが何方からお出だヲ　使「ハイ私は龜井戸の別莊からお使にまゐりましたが七三郎さまにお目に懸つて此文箱をお手渡しに爲て來いと申し付けられましたト云ひながら黑塗の文箱をさし出すを七三郎は請取て其上書を讀み見るに

七三郎様
玉八様　まゐる　侍存ず

七「ハテナお玉と此身が名前で御存よりとは誰だらふノウ　使「中を御覽じると解りますから他人に知らさない樣に内々でお願ひ申ます貴君は七さんに違ひございませんヲ　七「ナニ七三郎は私に相違ないが何樣も龜井戸には　使「お心あたりがなくともお頼み申ますト言より早く使の男は　使「ハイ左樣ならト歸り行　米「サア〳〵御存の當人を當て見な　玉「ヲヤ米太夫さんの廻しものかヲヘ　米「イヤ是は迷惑千萬何此身が知るものかくめ「もしもお柳が越したのではありませんかヲヱ　七「されば〻ヤ柳女ならば狀箱へ入て仰山に越さふもないものだノウ　玉「何にしてもマア早く中を開て御覽被成ナ　米「志からば夫にて内見あられヨ七三郎の外は何れも次へ立去めされイ。ドレ〳〵　玉「ヲホヽヽ此樣に苦勞の中でお洒落でないヨ氣樂だヲヘ　米「たとへ苦勞だといつて此方等が素人の樣に苦勞を表向へ知らせる樣ではいけないはナ何でも惡事を爲ければ世の中に怖ろしい事はないヨたとへ少々災難があつても程なく除れる樣になりやす先狀箱をあけて御覽じろ私しやア何でも吉事沙汰に違ひないと判じやしたトいふ中に七三郎は狀箱の蓋を開中

より手紙を出して見れば

七三郎様
ほあもし様
お柳より
柔様

七三郎様　龜戸村
ほもと へ　八重内
時より

七「ヲヤ米さんのいふのが當つたゼ　米「ヘンそれは知れた事サこれでも花井觀光の弟子で人相墨色一代の吉凶　玉「ヲホヽヽまたはじまつたヲヘ夫なら待乳山へ行て觀光さんの名代をお勤ナ　米「ハイ大きにお世話トいふ時七三郎は二本の手紙を繰かへし　七「イヤこれは有難へまづ安心た　玉「ヲヤ〳〵然でございますかくめ「誰が連て行たので有ますヱ　七「ナニ誰でもない此手紙の樣子では柳女一人で駈出して行途中から女の連が出來てお八重樣とお時さんといふのが可憐そふだといふ事でお時さんといふのが介抱して昨夜は其所へ止宿て置てその宅から今の男を使に

よとしたのだ　玉「ヲヤそれじゃア嬉しいネヘそしてお柳さんは何故預けて置た家を駈出したのだらふネ　七「エそれは柳女の書て越した文が委しくわからないが何でもマア近所の風呂へ行て歸りに澁九郎に捕まつたところが狐火が何樣かして助かつた夫からお八重さまとお時さまの御影にて昨夜はそのお家に止宿てお貰ひ申ましたから御案じ被下まじくトしてあるから先別條なしに其所に居ると被察のサ　米「それじゃアマア些もはやく其家へ往て能禮を言つて請取て來るが宜ではないかネ先刻の咄しもあるから私も同伴に行て上やう

トいふに此座の人々は互ひに安堵の顔色になり悅び言葉に盡ずして米太夫と七三郎は支度を調へ急いで龜戸へおもむきける

斯て龜戸のお八重が庵へ米太夫が到るに依て福之助の願ひも一時に叶ふ一奇談松山稻荷三圍の利益にひらく梅の春はや二卷にて實を結ぶものなり

辰巳清談　梅之春卷之十　終

辰巳清談

梅之春卷之十一

第二十一回

再說七三郎と米太夫は龜戸村なるお八重が行て世話になりたる挨拶を叮嚀に言演てお柳にも逢ひ昨夜よりの事を委しく聞思ひがけなき幸ひとなりしを悅び尙亦お八重とお時が信切に相談して呉るを願ふたり叶ふたりと思ふゆゑ米太夫に相談すれば米太夫は先刻より承知と見て　米「いづれにしても御信切にあまへてお柳さんを此方へお願ひ申て置て落着のを早く仕やせうそれに亦此方のお家の事も何樣か私に御用がありそうだから　七「コレサ〳〵米さん餘り其樣な不躾な事を言ては悪いはナさき「イエナニお心置がなくッて宜でございますヨヲホ、、、、　米「エイ私は米太夫でございます以來何分御ひゐきをお願ひ申上ますト何やらせわしく言ひちらし七三郎を伴ひて庵を出る歸り路七三郎は歩行ながら米太夫に向ひ　七「トキニ米太夫さんお前は何だか彼家居をこじつけて輕々しくする樣に思はれたから袖を引ッぱつて知らせたけれどもお前は平氣で柳女を彼家へあづけて置つもりにするし彼家でも信切に止宿て置て遣らふといふから此身の家内へ連て歸るよりも安心だと思つて歸りはするものゝ些押の强ひ爲方だから今いとま乞して

出て來るのが餘ぼど氣の毒でならなんだ　米「ナアニ少しもその心配にはおよばずサ　七「ナゼそれでも氣の毒らしい樣だノウ　米「なる程此身の心の中を知らないから然思ふも尤だが少しも氣の毒に思ふ理でなし寔に古今稀代妙不思議といふ事がありやす此一件はなか〳〵お前にはなしても聞解られまいと思ふ樣なことがありやす　七「ハテナ夫はマア何樣いふすじの咄しだの　米「まづ前後畧して咄そふが子私の出入場の旦那に嘉兆さんといふお方がありやす其若旦那に福さんといふのが有て此節戀煩ひで隱居所の方に居被成が其事に付てお柳さんを世話をして遣らふと思つたのサ所で今の庵へ行て看ると寔に悶りしたから能鹽梅だと心の中で悅んだのヨ　七「ハテ不解詞だはへ悶りして心の中の悅びとは思ひがけなく金でも拾つた樣だノ　米「ナニ〳〵金を拾つたとても直に此身のものにしては濟ないかへつて邪魔にはなるとも悅びにはならないのス　七「イヤ六かしく詞咎をするぜ夫はマア何樣でも能が內心の悅びといふは庵室の娘が戀情目遣ひでもして惚た樣子に見えたかの　米「イヤ〳〵其樣な水の向樣をしたといつても米太夫が夫に乘つて自惚るものか然ではない律義に妙な事がありやす　七「ハア左樣かそして其理は　米「一躰夫樣の風俗は　七「花アにもまさる　米「コレサ〳〵其樣に茶にしては否だぜ　七「ヱヽ何のお前が前言へ方言口を言出したではないか　米「ナニ〳〵方言ではない老言の事だアナ　七「それだつて一躰そさまの風俗はと言出したじやアないか　米「ヱ左樣だッけかノ　それは此身が惡かつた

から堪忍をして吳被成肝心の一件を咄すから　七「その一件といふは　米「かねざし六尺の事サ　七「コレサ〳〵戲言は最早能にして氣の安堵樣にして吳被成　米「おちつく樣には黑丸子か針治でもして貰ふかたが持合せて居ないから萬金丹では何樣だ　七「アレサ洒落てばかり居ては行ぬへ實正に道理をはなして吳な　米「それほどに氣にかゝるならば咄そうが何ぞ美味でもふるまふか　七「ムヽ承知〳〵　米「アハヽヽヽ頭上てん〳〵かて吳なといへば　米「ヤレ〳〵せはしない人だぜ。語つて聞せん能く聞抑　七「コレサわかりも仕ない地口を言ずとも早く言荷の神德にて　七「コウ〳〵否な聲色の乘地を聞せずとも後生だからお柳女の一件を　米「アレサ今いふ松山の稻荷さまと三圍の社の御利益に違ひない事が最初で此米太夫が被賴て居るのだから案じ被成ナ　七「イヤアお前には分解だらふが此身には些もわからぬへ　米「ナニ〳〵不解といふ事はない實正にいへば斯いふ咄しだアナト

これより米太夫は大黑屋嘉兆の息子福之助が夢に見たる尼と娘を戀煩ひに及ぶ事亦松山稻荷へ代參におよびし男が途中にて旅僧にをしへられし一條福之助が河越の路の辻堂にて顏見合せたる尼の美麗人相其時同じく夢に見たる娘の人相がお柳に似て在るゆゑに福之助の方へ緣を結ばせ戀情を鎭めさせて遣はそふと思ふ心にてお柳の身の上を尋ねし事を委しく語ければ七三郎は膽を潰して

七「イヤそれはマア奇妙不思議とも何ともいはれない咄だのゥ　米「ところが今彼庵へ行て看ると尼でこそなけれ近頃髪を生したといふ旨趣の庵主の風情人相が若旦那の好み通りでうつくしいといふものだから何樣も奇妙な事ではないか　七「ハテそれはめづらしい事たノゥ何卒夫に違ひなければ能が思ひの外庵主では無つて御亭主の立派なのが有といけないノゥ　米「イヽヱそれは大丈夫此身が鑑定に些も違ひなしサ　七「然かノゥいよ〳〵それに違ひなければ何樣したものだらう　米「急度違ひないけれども正可に直さま言出されも爲ないから今は何事なく歸つて來たが是からその福さんの所へ行て此始末を咄して聞せやすそうすると若旦那が大願成就といふ心もちになつて氣から出た病ひはたちまち治りやす其時になつて取はからへば相談が調ふに違ひないがお柳さんを夫まで隱して置ては法がかけるから何でもはやく若松の方へ談じつけて仕まはなければなるまいテ　七「さればサ實親の正作さんが難義をするので粂吉さんも弱つて居るから何卒その所をはやく治めて遣り度ものだ　米「イヤ〳〵それには能相談がありやすマア〳〵此一條は兎も角も私にまかせて置なせへ何れお前の世話信切の甲斐もある樣にはからひて上やせう　七「然うだと誠にありがたい子私も今更面倒だといつて捨られはせず粂女は如彼柔弱な氣質だから柳女の事を案じて泣いてばかり居るのを見ると可憐そふでならない　米「コウ〳〵餘り可憐そふがつちやァ悪からふぜ何樣もお前は婦人に孝行で困るヨノウ　七「ナアニ然じやァないはナ

親が氣質が能ばかりで懶惰だから粂吉もお柳も他人を便りにして賴むのを否とも言はれないはナ　米「イヤ其言解はくらい〳〵他の事を可憐そふだの不便だのといふのは多く女の身の上に付ていふのだゼ若い婦人か美麗娘は些ばかり難義しても可憐そふがる人が多分あるけれども六十か七十になる老女さんの難義する事が多分あつても可憐そふだといふ人は些ばかりもない樣だからいけないゼ　七「チヤ〳〵大そふに此身を悪くいふノウ　米「ナニサお前の事に限ていふのではないはナ只人情が然うだといふ事ヨ　七「それは何樣も昔から然うだアナ虚談にも七小町の旨趣を察被成　米「なる程盛衰の事を思ふと世の中の哀を知るのが第一だ子へ誰しも自分の勢ひの能節には他を賤め自分ばかり尊大とまつて慈悲も情もない人は零落た時に他人が餘計に憎がる子　七「まかし男と違つて女といふものは何樣しても德なものだゼ　米「ナアニそれはマア顔容が美麗と行狀が悪くつても西へ行東へ巣を替て五度も七度も身を立直す事が出來るけれども花が散つて見なせヘチヤ〳〵あれが何屋のお職を勤た女だとへ然うじやァあるまいと見る人が顔をまかめる程否な老婦人になつて見なせへ婦人が得だか損だか知れないはナ夫故小町の歌に

　俤の變らで年のつもれかしたとへ命に限りあるとも

米「誰でも知つた歌ではあるが心に留る氣がないから何年も若盛りの通りだと思ふのいはかないす　七「アレサ其樣心學の樣な事をいふと聞ものが鬱情て否がるはナ　米「チツト合點今つから

流行におくれちやアならねへ〳〵、〳〵、〳〵アハ、〳〵、〳〵

第二十二回

やゑ「アノちよいとお時どんとき「ハイ御用でございますかへやゑ「ナニヲ用といふ程の事ではないがヲお柳さんは何樣したエとき「ハイ只今お庭の畑へ菜を摘にお出でございます今日はモウお三どんが居りませぬから代りをするといつて何樣によくお働きでございませう寔に甲斐々々しいお娘でございますはやゑ「ヲヤ〳〵然かゝ可憐そふに餘り用をしてお貰ひでないヨ道理で先刻から私の側にお出でないと思つたはとき「ナニサ私がお止被成と申すのに今まで働きなれたから從容しては居られないとお言でございますものヲやゑ「美麗お在だから衣裝にも風俗にも不構でも好意に見えるヲヘとき「ホンニ然でございますす貴嬢の首髮を下してお在のと柳女子の衣類の麁服のと同じ事でございますは何でもマア貴嬢のお髮を島田に結て上申てお柳さんに貴嬢の以前着用お振袖を着せて着度ございますはやゑ「ヲホ、、、、私は髮を不結とも能からお柳さんのお化粧をして私の振袖がまだ解ずにあるから彼服を着せて御覽な私が着たよりかもお柳さんの着た方が能似合ふだらふと思ふヨとき「イヽエ然ではございませんはヲ貴嬢と競べては兎てもお柳さんが上に立事は出來ませんがヲ不躾ながらお柳さんのお身分ぐらゐでお柳さんの樣な人品の宜

娘は珍らしいじやアございませんか夫故私がお振袖を着せて看度と申しましたのでございますトいふ所へ飯焚男甚助が　甚「ヘイお風呂が涌ましてございますとき「ヲヤ然かへ今にお這入被成ヨ　甚「ハイそれじやア水も澤山に汲込で置ましたから能程にしてお遣ひなさいまし私は先刻被仰付の買物に出て參じますとき「アイヨ左樣被成ナ私が承知だから案じずと行てお在な　甚「ハイ〳〵ト言乍ら出行ばやゑ「それじやア私は風呂へ這入ふかヲへとき「イヽヘマアお髮を揃へて上ますからその後時でお風呂へお這入被成ましやゑ「ヲヤ〳〵毛が屆くだらふかヲへとき「まだ些むづかしうございませうけれども一日も早く島田髷に結て上度ございますものヲやゑ「ヲホ、、、、然うして居る所へ母人さんでもお出被成たらば何樣せうヲエとき「イヽエナアニ母御さんが被爲入たとて嬉しがりこそ被成ませう外に何と被仰ますものかそして去頃御本店へ參つた時私が貴嬢の事を委しく母御さんにお咄し申上て置ましたからやゑ「ヲヤ實正にかへ否だねへ何故お前はマア其樣な事を母人さんに然う言つてお呉だはづかしいヲヘとき「なんのマアかまひますものか御本店ではお母堂さまばかりではございませんお店の若衆でも出入の職人衆でも貴嬢が然うして被爲入のを餘り惜しい事た千人の中に一人とあるまひといふ美麗御容貌で在ながら尼になつてお仕舞被成なんぞとは悔しい樣だ第一親御さまへ御不孝だ何卒お氣をお取直し被遊して世に出る樣になされば能いと衆人が言くらして居りますものヲ何を恥かしいと思し召す事がござ

いますものかトそれよりお時は簑かけがもじを何時に調へ置て取出しお八重の髪を島田髷に結ひ上たる妹と春の縁にしを今日ぞ初元結命ながが掛諸白髪と野暮な姿にあらずして新に剃し中ぞりの色さへ青き新藁を綾に組つゝ根に結び解て逢瀬の橋わたしもなさでは置じとお時が丹誠ときゝ「サア合鏡を被遊して髷の格好を御覽じまし自慢をいたす樣だが餘程よく出來ましたから」ト言はれてお八重は莞爾と向ふ鏡の影清き花の笑顔を此年頃深山の谷の霧時雨晴ぬ心に埋れ木となりて久しき我姿に春を迎し思ひにて照し合せる黒髪の艶潤しき毛すじまで揃ふて出來たる嬉しさは何にたとへん娘氣の昨日を昔と忘るゝまであどなく見ゆるも可愛ゆらしゃゑ「お時やお前の丹誠で誠にモウとき「お美麗おなん被成ましたらふヂヲホ、、、　其樣にお可愛らしいお娘御さんにおなり被遊お姿をマア塞の河原へ遣り申樣な事をすゝめたお寺の坊さんが憎らしふございますはやゑ「アレサ其樣な事をお言ひでないヨ一旦お寺のお弟子になつて法躰またものが還俗すると佛さまの罰が當るといふのにお寺さまの事を悪く言つては猶悪いヨとき「イヽヱ神さまでも佛さまでも親御さまに叶ひますものか世の中にお主樣を麁畧にまたり親御を麁末にして佛さまを大事にする人が幾人もございますが了簡違ひではありませぬか親類縁者の困窮するを合力は爲なひでお寺の普請金を餘計に出して講親だとか世話人だとかと立られるのを嬉しがるのは名聞を好むので後生にも功德にもなりはいたしませぬ殊に貴嬢は母御樣の御秘藏で何卒末永く御繁昌を被成樣に御幼少時から神々さまへ御願がけを被遊して御疱瘡の節なんぞは笹湯の日まで母御さんは鹽物斷を被成て萬年橋の柾木の稲荷さまへ日參を被成ました其節は貴嬢が御年七才で私が十七才の時でございましたから能お覺でございませうヂヘト言はれてお八重は眼に涙心の中に倩と過越方を思ひ出れば今やお時の詞には百增倍の親の恩成長ならせて老て行其身の便りと爲す賴みに苦勞苦辛の朝夕に育られたる惠みをも心付ねば發明風俗で後生願ひの操のと尼になりぬる不孝の罪諺に言證文の出し後れとやらで有けれど此身を堪忍して貰ふた上は今までの悟りがましひ行ひを改若やぐ娘の風を粧るも親の氣休めと思案ながらに風呂へ行くお時はお八重が浴室の方へ行後脊かげを見送りながら溜息を吐居たりける

夫佛法の敎には一子出家すれば九族天に生ずといへども我神國の掟には思ひもよらず人の子としては成長の後養育の恩報じに父母を介抱して養なはずはあるべからず昔唐土の老萊子は其身年老て猶兩親あり或時鏡に向ひて我姿の老衰したるを見て思ふやう　如此おとろへし此身を看給ふ兩親の心は奈何ならん我子さへも老人となりぬるに產たる親の此身の躰はいかばかり老さらばひて見苦しかるらん命の程も覺束なしとさぞ悲しくや在すらんと心付て髮髻を黑く染紅白粉を彩色つゝいと初弱衣類を着し踊戯れ見せしかば兩親は嬉し氣に我子また若やぎたりとて嬉び樂みしとなん誰か傳ふ是則二十四孝の一人なる老萊子が

略傳也此一條を看ても兒女童男たち其身をおとなしく榮へ暮して親御達の心を安んじ孝行の一事とし給へかし

さてもお八重は湯に入りて一間に在て化粧する折からお柳は野菜をこしらへ勝手元を片付居たるをお時が代りて湯を遣はせ是をもすゝめて化粧させ衣類を出して手傳ながらとき「サアお柳さん此お振袖を着て御覽被成ヨリう」「チヤ〳〵何樣いたしまして　私が其樣なマアお振袖を着られますものかヲホヽヽやゑ」「アレサお柳さん其樣な事を言はないで着てお察ヨ急度お似合だから私は其代り其樣な花美なのを着るヨト加茂川染の中形を着て娘風の大形の帶をやの字に結びやゑ」「サア〳〵はやく夫をお着ヨトお時と二人にて遠慮するお柳の衣類を脫せ無理に振袖を着かへさせて帶を結び前と後から風俗を取繕ひとき「眞に能お似合でございますヲヱやゑ」「ホンニマアヽ〳〵可憐らしくお成りの事は私が前年着た節よりハはるかに勝て能ヨリう」「アレマアあんな事を被仰ますヨ何樣して　私の樣なものが貴孃の御着用樣にうつりますものかとき「イヽヱ〳〵お八重さまもお柳さんも誠にモウ〳〵何とも角ともたとへ樣のない程お似合被成てお美麗でございますはマアそのお形容で今日は終日お遊び被成ましヨドレお晝の御膳を上ませうヲヘ今たしか甚助どんも歸りました樣だから御肴を取に遣りませうヲ今日はお八重さま貴孃の御誕生日でございますヨ何の事はないお生れかはり遊ばしたも同じ事てございますヲヘヲホヽヽ

辰巳清談

梅之春卷之十一

終

辰巳清談

梅之春卷之十二

第二十三回

淨るり「お内儀さんへ言解も夏のなかばの涼船合縁の橋間て逢初てト語を此方に聞く二人互にホット溜息を吐て涙の露ふくむ粂吉は七三郎に向ひくめ「七さん今更にモウ言出てもいけない事たが子此事が玉八さんに知れたらば何樣せう子へ　七「ナアニ知れるものかナ萬一玉八が氣どつてやかましく言つたらばその時は何樣でも落着て仕舞はアナ何かまふものかくめ「ヲヤマア其樣無法をお言ひでないヨお前はんは男の氣性で左樣お言ひでも私がお玉さんへ濟ないヨ小菊半兵衞の淨瑠璃の文句を聞度毎にお玉さんへ言解がないと思ふと胸へギックリと當る樣でありますは妹の事を身に引請て信切にしてお呉のお前樣が種々お言のを義理立ばかり言つた日には恩知らずな奴だとお前樣が腹をお立の時は困るからと言つたらお前はんの氣に障りも仕ませうがお柳の事があるたけに猶更如斯事になつては濟ないと心を心で叱言て居ながら玉八さんの氣をお惱のお前樣に艶しく言はれて見れは女の悲しさに前後の義理を知りつゝ斯うなつて嬉しいながらもお玉さんがお前よりは餘計にお柳の事を苦勞にしてお呉れの中で私がマア大事のお前樣と

不義をしたかとお玉さんに思はれるのが面目なくつて死ふかとも思ひますはト愚痴なくり言泣かこつ恨み言葉を七三郎も聞てさすがに氣の毒なれば　七「然ういはれては何分此身が面目ない事たけれどもお柳女の事の相談に付てその美麗お前と幾度も顔を合して見た日にやア何樣も男の悲しさで無理を言出してお前を迷惑させる氣にもなるだらうじやアないか此身が無理に斯した情合にしたのは重々悪かつたけれども此身に限つた事てはないお前の婀娜に生れ付たのが悪いから發つた事だアナ誰人でも只置くものかくめ「アレサ何だ子へ私が此樣なに苦勞をして理由をいふのに些もお前樣は取上ないで其樣な程の宜事を言つて女を嬉しがらせて置ば濟と思つてお在じやア悔しいねへ何樣でこれがお玉さんに知れずには居ないから言出されて面目を失ふよりか私の方からお玉さんに言出して慢つて置ふとおもひますは　七「エナニコウ〳〵大變な事を言出したゼ玉八に其樣な事を言つていけるものか夫で無つてさへ氣むづかしくつてならない女だから眞平御免だくめ「イヽエ何樣しても知れない樣にはならないからはやく知られる方が氣が安堵て宜ふございますは　七「フムウ夫じやア否でならないが妹を世話にして貰つたから詮方なしに返事をしたが些もはやく離別て仕まひ度に付て何の事もないのに即時言出してお玉と喧嘩をさせるつもりか夫程否ならば何樣も詮方がないから覺悟を仕樣はナくめ「ヲヤお前樣もマア其樣な氣の短い事を言つて腹をお立だヨ何程妹がお前樣の世話になるからといつても私の心にお

前樣を極々否だと思つた日には玉八さんといふお内儀さんの在るのを言立に何樣でも遲れていふ事を不聞に仕舞ますはテ元はといへば私の心にも玉八さんが羨しいと思ふ最中へお前樣が可憐がつてお呉の樣に言出してお聞せだから後悔をする種だと知ながらお玉さんへ義理の悪い事を仕出來のだからお前樣の樣に輕々しく覺悟も思ひ限りも出來ますものか一旦斯なつた上は十分に逢れずとも捨られまひ愛相を盡されまひと取越苦勞をする心から大事をとつて玉八さんにちつとも早く言ひ出して其代りには何樣な事でも玉八さんの事ならば此身を惜しまず仕樣といふのでありますはテ夫を察し心もなくあらはれて面倒になつたらば私をば只突出して仕舞ば濟と薄情でお在じやァ私一人が可憐そふではありませんかト戀の欲でも玉八をば麁畧に言はずさればとて男を思ふ信切は義理の中にて和合はなれともなき戀慕の情言葉すくなに愛敬もこぼる庭の草の露西に入る日のくれなゐに照らして赤き粂吉の顔は殊更麗はしけれ折から來たる澁九郎出し抜に門口を押明家内をねめまわしながら　澁「ハイ此間はト言はれて二人は驚ろきつゝ

七「ヘイお出被成まし　澁「エヽトキニ七三郎さん此間中から種々と正作さんの方を掛合ましたが何でもマァお前さんが一旦途中から連出して來なすつて夫限お柳の行衞が知れないで見ればお粂と七さんの方で何樣かしたのに違ひないからお前の方へ掛合て呉ろと言なさるから再度此方へ參りましたがお氣の毒だけれどもお粂さんは斯して七さんのお内義さんに成て居る樣子な

りお柳の姉の事て見れば是非ともお前方の掛りだテ實の親の正作さんの差圖で來やしたからお柳をわたしなさるとも亦夫相應に養子親の方へ育てられた程の挨拶をするとも了簡を付てお呉被成近所で七さんの噂を聞きやァ玉八さんといふのが本妻で粂吉さんは妾だとか情女だとかいふはなしだァ和歌町で指を折つて人先へかぞへられる美麗のを二女も三女も樂しんで居るくらゐではお柳の方の養育金を辨へて出すくらゐは何でもございやすめへお粂さんも然だァ世間で情人だと知つて居られる七さんの難義にもなる事なり妹の身の上の事だから一働き爲ずばなりやすめへト四隣へ聞ゆる樣にわめきちらして居る所へ歸りかゝりし玉八が家内の樣子を窺ふとも知らねどさすが粂吉は他に聞かるゝ事を怖れくめ「ヲヤ〳〵お前は妹の事を若松から被頼ておいで出なら其掛合をするのは聞へたが何だへ私と七さんと情通があるなんぞと他聞の悪い事を言てお呉でない　澁「アハヽヽヽ其樣に隱しなさんな此間中お柳の一件で久しく此土地に隱れて居て何も角も聞て居らァ去日も七さんの事て珍川のお客を不首尾じやァないか然も其客に七さんの名を拾はれたじやァねへかそれは何も此方の搆つた事てはないが潔白らしく强情をいへばまだ證據があらァ志かし其樣な事は兎も角もお柳の返答は何樣するのだト詈る折から裏口の障子を明て入來る米太夫づか〳〵と澁九郎の側へ行　米「モシ〳〵先刻から門口で聞て居たがお前は何處から頼まれて若松の掛合に來なさつたのだテ　澁「ヘンお前は何だ今時分横合から口を出して

ばか〳〵しい　米「ナニばか〳〵しいと是其方は何にも知らずにお柳の掛合をするなんぞと僞謀を言に來やァがつたのだナ。コレ早く歸らないと只は許さないぞ。ふてへ奴だ　澁「ナニ〳〵何が大膽のだそして僞事たァ何の事た合點爲ぬへぞ　米「アハヽヽヽコレ其樣に騷きなさんな鬼若松の老女は舊ひ惡事があらはれて四五日以前にお代官さまへ引出されてモウ頓てお仕置になるそふだ其うへお柳の身の上は委しく戀が窪の大庄屋さまへ屆けてお調も濟で實親の正作さんに引渡して被下て若松の家は崩して明地になつて仕まひやした即時に三味線草が生るのだ。アハハヽヽ

ト言はれて惡者澁九郎も南無三最早其事があらはれたるかと驚きながら猶負惜みの言解を言ひちらして居る其所へ表の方に人音し格子戸明て入お玉其脊後からぞろ〳〵と立入來る二三人が澁九郎を引捕へ物も不言に連行けり

玉八「アヽ引私きやァ何樣に惚りしたらふくめ「ヲヤ私も寔にこわかつたは　玉「何樣したのだらうヲヘ　米「ナァニ彼奴は澁九郎といつて是まで種々の惡事があるそふだから夫故今の樣に連て行れたのだ　玉「ヲヤ〳〵然かへ能氣味だヲヘ私きやァ先刻表まで歸つて來たら何だか家内でごたごた言聲がするから彳聞をして居たら米太夫さんが來てお呉で靜になりそふだから最う宜と思つて格子を明て這入と脊後から彼人達が續て這入つたから膽を潰て胸がまだドキ〳〵言ますはト言はれて再度驚く粂吉七三郎も胸トツキリ彼澁九郎が高聲に言たる事を玉八が定めて聞てあるならんと思へば心を惱しけれどまづ知らぬ顔に紛らして　七「お玉はやかつたノウ　玉「アヽ船へ行のが止になつたから能鹽梅に早く歸られたは粂さん出番の衆は止になつたのかへくめ「アヽ明日になりましたは夫に先刻ちよいと賣花屋へ出て夫から亦お柳の事てチョットこゝへ寄ましたは　玉「然かへ。米さん毎度大きにお世話さまで　七「ホンニ米太夫さんが來て呉なさらないと澁九郎にまたごたつかれる所であつた　玉「能所へ來てお呉であつたッけヲヘそして鬼若松の事は實正の事でありますかへ　米「實正サ私は嘉兆さんに若旦那の咄しをまて兎も角もお柳さんの身の上を正作さんの方へ返させ樣と思つたから嘉兆さんに金を借て鬼若松へ養育金を遣る氣で戀が窪へ行て見ると先刻言つた通り鬼若松は潰れて仕まつてお柳さんは實親の正作といふ者が引取つたつもりの證文を庄屋樣へ出して何も角も濟だといふ事を委しく聞たから直に尋ねて行て正作さんに逢て聞たら實はお柳は玉八さんといふ唄女衆の方か姉のお粂の方に居ませうが私に引取たつもりに仕てまへと言はッまやるから然う爲ましたがまだ七三郎さんの所へ知らせる間がないから然う言て遣りませぬがお柳は何樣しましたか苦勞にはなりますが此樣に年か積て意氣地がなくなりましたから何も角も思ふ樣に出來ませぬと涙を落して言被成からお柳さんの居所も委しく言聞せて夫から福さんの方の一件も相談したら嬉しがつて何卒お粂と御相談を

被成てよろしく御頼み申ますと言被成からかならずお案じ被成ますなと請合て來やした　七「イヤそれはマア私が役までも不殘落着てお吳被成たのだヲ何ともお禮の言樣もない事たくめ「寔にモウ私きやァ夢ではないかと思ふほど嬉しふございますは　玉「アヽヲヘモウ〳〵七さんも私もお前樣に被頼甲斐がないといけないと思つたが米さんのお影で寔に安堵する樣になつたヲヘト互に悅び語合ける

第二十四回

再却説龜戸の草庵にはお時が戯れの樣にはからひて漸々お八重に心を改めさせ母親へ孝行をなさすべき手段を勸しが是も宿世の緣なるか河越道中のはなしが世を惜しむ種となり無常を思ひし菩提の道を引返したる娘氣にうつれば變る人心今日は延たる髮の毛に簑をかけたる島田髷お柳も同じく化粧して前文にもまるせし二人の姿少し婀娜過て賤しくはあるまひかと被察お柳は振袖を着せられて人品能自然と野暮ならずまた生得は美麗けれども餘り温順すぎて野暮らしくはあるまひかと思ふ所のお八重をば當世樣の洒落たる乙女の風にこしらへて留袖の好意なる衣裳を着せて髮も浮行の結かたなれば下情な樣で自然と人品賤しからぬ二人並べて看る時はいづれを上と見立べき正にお八重を櫻の花とたとへては猶梅が香の匂ひを添たりといはんお柳を梅

とたとへては朝櫻の露をふくみし風情を添たりといふべしお時は看惚て莞爾笑ひとき「モウ〳〵御兩人さまながら何樣なにお美麗でございませうそして何樣かお顏が似てお在被成て御姉妹の樣でございますはりゥ「ヲヤ〳〵お時さんがマア艶言にも其樣な事を被仰ては否でございますヨ何樣して私がお八重さまのお身足へも追付ますものか勿躰ないやゑ「アレサお柳さん其樣な事をお言ひでないヨ私こそ野暮らしくツてお前さんの婀娜で可愛らしい所には何樣しても叶ひませんから行ませんヨりゥ「アレマア貴孃までが其樣な事を被仰て私をおいじめ被成ますヨやゑ「イヽヱ然ではございません實事でございますき「ヲホヽヽヽヽ兩方で其樣に卑下をなすつて互に賞ッ競をしてお在被成ても行ません何でも御兩人大闘でございますヨそのお美麗しいお顏で在ながら樣とは餘り惜しい御了簡ではございませんか何程冠つてお在被成のと何方がお似合被成か御覽じまし今に鏡をお目にかけますからヲヱお柳さんト笑ひながらお八重に御納戸茶の縮緬の御高祖頭巾を冠らせればお八重はそのまゝに冠り居てゥゑ「ヲホヽヽヽヽお柳さん私にやァ坊さんの方が似合ますヲヘりゥ「イヽヱ然うではございませぬヨモウ〳〵幾年までも島田髷で被爲入ましヨトいふ折から垣根の外にて次郎「それ御覽じろヲ若旦那達へでございますめへヲソレ河越の道でお逢ひ被成たのでございませうトいふ聲たしかに

聞えねど家内を覗く人のある樣子をはやくも察して椽側の障子をしめるその所へ柴戸を押明て入來る壯年這入口へ來て腰を屈め次郎「ハイチト御免被成ましとき「ハイ誰人でございますト出迎へば次郎「エヽー私は往來の者でございますが若旦那が此お庭の外で急に病氣が發つて難義いたしますから何卒此御椽側の端を少しの間御貸被成て下さいます樣にお願ひ申ますとき「チヤチヤ然で御座ますか途中の御病氣ではさぞお困り被成いましお湯も湧て在ますからお藥でも上るならば直に上ますヨトやさしき言葉に彼男は大きに悅び次郎「それは有がたうございます左樣ならば少しのあひだ何卒お願ひ申ますト木戸の外へ駈出し程なく此家へ伴ひ入る其病人は如何なる者ぞ是則此庵のお八重が心に慕ひとがれたる新川の嘉兆の倅にて隱居所に病ひを保養して居たる福之助なりければ障子の内より透見をしてありけるがお八重は惘りしやとチヤト言ひつゝ駈出でんとせしが遠慮してお時にひそかに呵けばとき「エイ然うでございますかヘト走出とき「サア〳〵些も御遠慮は入ませんマア此間へお出なさいましヤレ〳〵さぞ御難義でございませうまかし御持病ならば直に治りなさいませうマア少しお氣をお休め被成まし何ぞお藥のお持合がございますかヘト　いろ〳〵まんせつにせわをすれば福之助はさしたろこともなきゆゑにきのどくになり福「イヽエ病氣あがりでございますから少し逆上て惡い樣なばかり最早大きに快氣そふでございますからお構ひ被下ますなトいふ所へお八重は奥の方より立出恥かしそふに福之助の側へ來

りやとさぞ途中でお困りなさいませうこゝに梅の雪と申ます腦のひらくお藥がありますからお上り被成ませんかト差出す所へお柳は茶碗へ白湯を汲來る福之助は即時出來合の虛病ゆゑ起上り福「これは存知がけない御介抱になりましてト言ながらお八重の顏を見上　福「貴孃はたしか先達て松山の箭弓稻荷さまの途中で　やとホンニ貴樣は難波田のお寺でお目にかゝつてから次郎「その時お相宿でお慰に落咄しをいたした次郎吉でやとチヤ〳〵ホンニ然で有たつけチヘ寔に不思議な事て又お目にかゝりますチヘ夫じやァ猶更の事お心置なくお休みなさいましト言ながら福之助の顏を從容見つめ何か思ひあり氣にてやとマアお大事に被成ましヨ即時にまたお心よくお治り被成ましたらばゆるりとお目にかゝりますからト奥に入れば福之助は飛立樣におもへども病のゆゑに保養を賴みて此庵へ入ながら直さま心よしとは言難く暫時苦痛の躰にもてなして休ける

これはいかにといふに米太夫の咄しを聞て福之助はお八重お柳を片時もはやく見まほしさに次郎吉といふ心の知れし男を連て此庵の樣子を看に來りしが次郎吉が俄に思ひ付たる勸めに依て虛病を發し側近く寄はかり事をなせしなり

斯る事とは露ほども知らず入來る米太夫七三郎も粂吉も玉八もろともお柳に逢んと相談をなし此程お柳を世話になりたる返禮の心にて種々の土產物などを持參し先お時を呼出し先達てより

長く厄介になりしお柳の事を衆男女一同に禮を演ければお時も相應に會釋してさき「マア誰人もお上り被成ましサア〳〵此間へトいふ時しも福之助と俱に來りし次郎吉は兼て米太夫と心易ければ勝手の脇から立出笑ひながら次郎「イヤ米さん此間は　米「ヲヤ〳〵次郎さんか珍らしい所で逢たノウ全躰今日か明日若旦那の所へお見舞に行ふと思つて居たのだ何樣だへ續いてお全快かヲト言へば次郎吉は米太夫を小手招ぎするゆゑ側近くすゝみ寄れば次郎吉は米太夫の耳に口何やら呟くを米太夫は聞ながら　米「イヤハヤそれは呆れた若旦那だノウ。ドレ〳〵夫ならばお目にかゝりやせうと米太夫はまた〳〵お時に内談すればお時も兼々お八重の戀人なりし福之助の事なる由を告るゆゑ米太夫はいよ〳〵驚き福之助の方にてのみ慕ひし女と思ひの外お八重の方にても深く心を惱し在ける難波田の寺參り箭弓稻荷へ參詣の途中の事全前世の約束にて神と佛と引合せゆゑ斯る戀の路の發りしものなるべしと感心し元來座持の上手者なれば互に耻かしからざる樣に其席を取持て頓てお八重お柳福之助次郎吉お時を片側に居ならべ七三郎玉八糸吉を片かはに置て何れもうち解て語合樣に面白可笑とりはからふ米太夫の働は筆にもつくせぬ骨打にて此席にては第一の大役ならんか斯て七三郎と米太夫が何時の間にか談合し誂へ遣りたる料理の數々龜戸の茶屋より持來ればこれよりいとゞ賑はしく目出度酒盛とはなりにける

此後お柳は福之助の本妻となりお八重は福之助と契りを結び深き中となり母親も承知なれ

ど親類に彼是評判を爲らるゝ事を耻殊に一旦啓次郎といふものに夫婦の緣を結び其人へ貞操を立て尼となりしものが今更福之助の本妻となるは福之助に恥を與ゆるに等しく不躾なる所爲なりとて無理にお柳を本妻としけるがお柳はお八重を姉と敬ひ睦しく語合一年の中に一月か二月の間の外とはなれて住居し事なく大方はお八重と同じ所に住しとぞ

○亦七三郎は戀が窪の實家へ歸參し玉八を晴て女房とし玉八は糸吉を嫉妬ぜず始終睦しく姉妹のごとくまじはるなど只一席には說盡し難く何れも目出度祥のみ多かりしとぞ

猶此外に杉坂の座敷にて嘉兆が酒宴の躰その席の唄女の事なんど說終らざる條下もあり且正直正作が身の治り箭弓稻荷と三圍の稻荷の御利益靈驗等此草紙に說盡さゞる事は近き日の中に拾遺として發行すべしこゝには妻を摘んで早く卷を治るのみ

辰巳清談　梅之春卷之十二　終

蔦蔓戀之花菱序

此册子は蔦齋喜石といへる人の。赤繩奇談を綴りたる文にして實は浮く談話にあらねど。今繪入となして世に云所の人情本めかしたるは。平亭ぬしの作意にして最をかしくぞ思はれける。序開に書畫會のありさまをまるし。文人墨客の滑稽談話を載て切落しに受ざる話も。忽和ぐ筆の尖。奇々妙々と賛ながら。其いりわりを誌せる者は

深川靈巖寺の邊に住る

柳玉菴主人

蔦蔓戀之花菱

第一回

江戸前之醉客　平亭銀雞述

年々歳々花相似たり歳々年々人同からず。何れの御時にや有けん江戸本所北割下水邊に。畑石伊十郎といへる武士の浪人ありしが。此人生質得て風流を好。月に臨ては詩を賦し。花に愛ては歌を詠じ。茶事は千家を主とし。花は遠州を宗として樂けるが。其中に分て大和繪を好みて常にこれを畫けるに。其筆力妙を得たる事。大昔の光信宗丹にも劣らじとて。人々これを賞翫せり。號を蔦齋と唱へ。又喜石と呼り。幼童の頃より玉を欺く生なりしが。成長するに隨ひ。漢國の美子和。吾朝の業平も。斯やと思ふ斗の美男子なりければ。向ふの娘隣の若後家も。春心發動の思ひなきにしもあらねど。喜石は元來色慾の道に疎く。當年早二十歳の上を二ツ三ツ四ツ越けれども。未遊里に通ひたるを見た者もなければ。近所の人々も其精實なるを賞そやして。若き人々の手本としてこれを評判しけるこそ尊とけれ。頃は彌生の中つ頃。淺草邊の友人何某なる者。此度兩國万八樓に於て書畫會を催ほさるゝにつき。兼て喜石も賴れ居たりし事なれば。當日の張出しなど認め。晝前より家を出万八樓上に至りけるに。幸なるかな此日は天

氣快晴て十一分の春色たとへんに物なく。橋の上の往來は人の山をなし。船中の騷ぎは俗物ながら又興あり。此日の會主は頗る高名の先生なりければ未午の時にも至らざれども。雷名の先生方席上に滿座せり。其荒增を志るさば。下谷連にては服部隨庵。大沼枕山。樋口逸齋。長山樗園。目賀多芥庵。長谷川雪堤。鈴木鵞湖。大内桐齋。小杉東岳。堀池柳外。山崎暢逸。中根半嶺。關根孔年。木下方外。萩原秋巖。山梨東嶂。服部波山。宇佐美梅窩。また淺草本所兩國連には。正木龍塘。釋廣石。同佛奴。中村桂年。青木錦村。細川林齋。文池雷山。大西椿平。青木北海。天野政德。池田孤村。春田九皐。中川憲齋。柳田正齋。井本仁山。中西柳三。高橋石齋。田崎梅溪。小野不克。清雲龍齋。江口忠房。加々爪醉樵。平井東堂。大久保峨山。月岡雪僊。同藍雪。佐竹永海。花村抱山。兵藤林齋。原田蝶眠。文池暘卿。野崎眞一。蘆澤不朽。江川英賀。同英山。佐藤蕉蘆。菅野鶴堂。栗原翔山。等なり又日本橋の前後八丁堀木挽町。靈巖島。築地。金杉。白銀。麻布。邊の大人達には。都甲權鍾。能連慶義。福岡半谷。瀧山霞崖。三木貞齋。武市格齋。戀川春町。正木越後。荒川養愚。根本遇洲。上野華山。友常竹外。沖冠翠。小川述堂。英一靖。喜多武一。廣瀨潛齋。伴一愚。青木龍峰。梅澤白齋。井上文雄。同清可女。荒木寛齋。また玉が池。石町。江戸橋近邊よりは。分部雪齋。横山潛夫。中浦雪岸。森本雲峰。松本董齋。同董仙。石川雪明。小林文周。村松其翠。高橋孤道。中村雪濤。倉山源泉。水田

林桂。野口雲塘。阿部櫟齋。小林圃光。など皆々揮毫に暇なく。賴人あれば賴るゝ人あり。酒を飲あれば飲ぬあり。騷ぐ人あり騷がぬ人あり。そがするうちに。午過にもなりければ追々人の山をなしけるは是盛會のまるしにぞ有ける。跡より來る先生がたには。吉澤雪庵。荒井羽民。岡田鶴川。森龍皐。時田石蘭。岡島林齋。鈴木玉泉。栗山石賓。鏑木雲洞。一木蘆洲。岩井芹江。小島南峩。工藤敬齋。雨花庵鶯一。志保井紫董。市川其融。芝林光。原德齋。小島雪崎。頸城鷗村。野村文紹。海沼文方。中川武榮。高野林松。佐藤玄覽。荏原無何齋。齋藤雞眠。清水元齋。土肥柳齋。岳亭梁左。永井盤谷。遠山文岱。小栗寂庵。高橋素山。大竹小石。猪瀨尙賢。中川山々。水田林桂。吉田櫻園。吉岡不老。福島孤龍。村井樂所。中田義道。川合石舟。高橋月灣。大内東玉。高橋玉嶺。吉田南陽。同南海。山田林雨。黑田方中。佐藤山齋。中島雪鴻。春木南華。同南溪。齋藤光風。成滿蘭邨。神田林旭。島田南山。松島抱眠。荏原蘆村。和田晴峰。小倉香雨。堀田佛庵。大八木閑齋。加藤林龍。相川羊眠。岩本蛙麿。皆川林鶯。松村恒通。西村南嶽。橋本雪溪。藤田南容。高木參石。花井梅翁。白木柏軒。市川東壑。柴田松山。鈴木行眞。青木青龜。都甲風溪。藤吉霞岳。畑鐵雞。保坂守子。山崎文機。平戸星洲。清泉鯉淵。狂訓爲永。藤村柳城。中山善齋。中村金水。假名垣魯文。鶴亭集賀。一光齋芳盛。曲淵廣景。加藤景川。岡島眞龍。瀧口宗儒。天方歷山。大島小紅女。奥村鶴皐。高島千載。大島堯田。

西行幾之女。天野平岸。中澤雪城。小松原翠湖。立川松壽。茅野雪庵。春木南溟。等の人々整〻として出席したり。其外書林には菊屋幸三郎。吉田屋文二郎。また上總屋大助。朝倉金之助。なども見えたり。弘文堂以ての外急敷く弘文堂さいへる近頃書肆會へ出る世話人なり　喜石「オイ弘文さん爰へ肴を一ッ。モウ此ぬかは御免だぜ。さしみかつゆ物にして〳〵」白齋「ちげへねへ。座附にぬたや煮肴はをかしくねへ。兎角近ごろはつゆものを出しやせんよ梅溪「さやうさ悪いくせが付ました。肴札二枚やれば大ひらを出した物だが弘化の末あたりからそろ〳〵止になりました。イヤ弘文のはたらきでさし身汁といへば摘入に極たものだが。それも今では止になりました。イヤ弘文のはたらきでさし身が來やした。サア喜石さん是で一ッ上やせう喜石「マヅ一ッお重なさいまし白齋「コレお酌うつかりだノ。どふしたものだ色氣と見えるナしやく人おふく「オヤイヤナ若白齋先生その碁卷を一ッとつてくださいナ暢逸「オヤおまへは兩刀をつかふナ文周「宮本武藏の妾に行ばいゝおふく「オヤなぜ〳〵隨庵「是はしたり。其譯をおめへきらねへではをかしく〳〵宮本武藏といふ人は兩方の手で二本の刀をつかつた人ヨ。それだからおめへが酒を飲だり餅を喰たりするを暢逸先生が兩刀つかひと云たのヨおふく「オヤ暢逸先生いやでありますヨ。そんな事をおつしやつては松山「そんならおめへ飲だり食たりきねへがいゝおふく「オヤ〳〵松山先生まで。そんな事をおつしやつて私をおいじめなさるヨ。いやだねへ半谷「いやでもおうでも飲だり食たりするからきかたがねへ「お

のが罪おのれを責る紙帳の屁」だ　梅窩「コレハ妙でございます。イヤ川柳の穿には實に心に迫る句があります。古い句だが「柳橋どらとたいこを積で出し「八剱を逃れて偏の無をくひ「よいきめりなどゝ時雨も初手いいひ　慶義「イヤどうも妙でございます「夕霧は外科にかゝらぬ斗ゑ「眞直な針で天下を引かける龍峰「イヤ其句はモシ「眞直な針で片身の鯛を針り」の方が利て居ますぞ〳〵慶義「片身の鯛とは妙だ。何でも眞似ての巧は致やうで「其當座ひるも簞笥の鐶がなり」といふ古句をとつて「娶の智惠簞笥の鐶へ綿をまき」はいゝじやア有ませんか恪齋「綿を卷は妙でございます。イヤ去暮私共の方で。五文字付が流行でございました。近所の人が「なさけなり」といふ踏へ「猫にして置たは母のなさけゑ」とつけまして大勝を取ました龍峰「なるほど猫にしておいたは妙でございます。先年も「なさけなり」といふ踏へ「なさけなき師の教訓も情なり」と付て是も大勝でございました雷山「モシ「少しづゝ」といふ冠へチ「少しづゝ霧を出て來る瀨多の橋」といふが有ますが少しづゝがよく利ました。また「あちこちに」といふ冠へ銀雞先生が「紫蔨殘る首陽山」と付られたは大手柄でございました樸齋「さやう〳〵。小簑庵が「薇は昨日食盡したり」と付て大笑がありましたつけ林齋「なるほど「あちこちにぜんまい殘る首陽山。わらびはきのふ食つくしたり」はどうも穿でございます　雪齋「ぜんたい銀雞さんは古事どりがお箱でございます。先達て「引立る」といふ踏へ「手を添て

勅使李白をひつたてる」是も大ヤンヤでございます。イヤ風來の長枕　褥合戰を再刻されましたが其仕舞へ文人方の陰陽和合の詩歌連俳のよりあひ書がありますが。其中に「松茸に手出しをしたで逃た妻」といふ鼠溪大人の名句が見えましたが。是は廻文の句でございますが。誰もそこへ氣が付ぬやうすでございます。實に古今絶妙おそれ入ました孤村「さやう〳〵廻文の句が有ましたつけ　文照「イヤ此間坂本邊に地口の點をする人が有ますが。其人の撰の句を見ましたが。どうも面白のがございます。喜石さんが万歳の繪をかきました其上に「皷才藏がうつて腹筋となる」はいゝじやァございませんか雪岸「ヘゝなる程「雀海中に入て蛤となる」でございますナ　蛙鹿「「馬乘三人徒士八人」もいゝじやァ有ませんか　潛齋「「桃栗三年柿八年」だ子　扇面「イヤ桃栗三年では。暢逸先生の地口にいゝのが有ます「居殘り殘念客八人實は工面が成兼る」サ　皆々「是は妙だ扇面「まだ有ます「秋野の黄菊夜の露「悪い釜をも入用で磨く」などもいゝじやァありませんか潛齋「いづれも妙だ子。モシ古い句だが「とうまるはらんだ又うんだ「のうまくさまんだばさらんだ」サ「小袖櫃をぶつ付たら錠前直そ」はどうだ子皆々「こいつァ分らねへ　養愚「なるほど妙でございます　皆々「養愚先生解したと見える何だ子〳〵養愚「「一ッ星見付たら長者になろぞ」皆々「違ねへ「さうだ〳〵　桐齋「「割たら香爐の直が下ッた」はどうでございます　東堂「「あつたら男に尾が下ッた」是は奇々妙々　桐齋「「旦那祭に出た物好」樂左

「半太羽織に義太股引」か子。モシ「質に博多を取まいか」はどうであります南山「こいつは分らねへ。何だらうトいふ所へ弘文堂きたり　弘文「是は妙だ。いゝ地口でございます　波山「公は解したか　弘文「へイ「質に博多をとるまいか」「一に俵を踏まへて」皆々「違ねへ〳〵。質の事はくはしいと見えて早い〳〵。まづ褒賞に一ッ飲だ〳〵弘文「有がたうございますトいひつゝ五六杯お房「ヲヤ〳〵弘文さんお前さんの鼻の先に墨がついてゐますヨ。をかしいねへ。ふいて上ませうト言ひながら紙をもむ扇面亭わらひて扇面「紙を揉事は上手だノ。毎晩もみ付て居るからお房「ヲヤ〳〵扇面さんいやで有ますよ。私は紙をもむのは是が始てゞありますが文「もむのは始てゞもふくのは度々だらう孔年「どうかさうらしく見えます。イヤまた地口に落ましたが「きのふ堀にて酢鱆で飲だ」と云は何の事でございませう芥庵「夫は「相撲取にて白藤源太」サ「田樂はからしの味噌にして」「五徳が能てかき餅で「茄子は能物遣ひ物「火口が雨に能志めり「代脉は療治の初手にして」など云地口は烏渡聞ては分りませんが。能考へて見ると。面白うございますナ冠翠「「五七の雨に四日でり」でございませう　東壑「「五七の雨に四日でり」でございませうト諸先生がた。みな〳〵地口のはなしに。一ばいなる催しつゝ。盃のかずかさなれば。なほさらにさいつおさへつ。おのれ〳〵が得手のはなしに。各興をぞもよほしける。此折しもいとうつくしき十四五の娘。扇子四五本持て。なにゐかいてもらひたきやうすにて。あちこちのそき居たりしが喜石がげいしやの繪をかい　娘「あなた私にもその繪をねがひます　ト云ながらそこへすわるてゐるたみて　喜石「やはり藝者をかきますかト云つゝ娘のかほを見るに。そのうつくしき事たとへんに物なし。又娘も此時始て喜石が顔を見るに。世にもまれなる美男なりければ。互に面色あからめて。人目をはづる戀衣。是ぞ宿世の因緣とは後にぞ思ひ志られける　林靜

喜石先生大分御出精だヲ。まづ一ッお上りなさいまし。自分好のたま子燒を申つけました。こいつァ烟の出る内が山だ喜石「有がたうございます。一ッいたゞきませうトいひながら箸をとまひ林靜のそばへすはり杯をうけるお房「玉子燒を上ませうトいひながら箸にてはさみヲヤ〳〵此たまご燒は。あんまり大きすぎますヲ羊眠「大は小を兼ると云から。大きい方がいゝじやねへか。お前御亭主を持た時大き過ても腹は立つめへお房「ヲヤ夫とは違ますヨト酌女にからかひ居る所へ。樓園。南海。竹外。董仙。竹外「今別席でごた〳〵が有なご入り來りければ。いよ〳〵興そまさりけるて。銀雞先生が中へはいつて。手打になりましたがあれはあの人の言のがもつともでございます南華「どうしたのでございます竹外「イヱサ弘文堂の人名錄から起つた事でございます。其人の言には。まづ第一凡例の書かたがわりい。其わけは

一各家名號ノ順次ハ盡ク聞見ノ早晩ニ隨テ記ス敢テ甲乙ヲナスニ非ス

一諸家ノ名字別號等万一誤リ有ハ告玉ハルベシ速ニ改正スベシ

一諸家若シ居ヲ遷シ或ハ改號等ハ告玉ハルベシ毎年四月改正スベシ但シ其期ヲ待ス不時ニ改正ヲ請ハ刊費銀壹匁五分ヲ投スベシ即時ニ改正スベシ

是等の書方甚もつて其意を得ず。緩怠至極なる躰裁と云べし。琴臺や樓園の言なればかくの如く書ても論なし。弘文堂は文人にもあらぬ只の町人にありながら。天下雷名たる諸先生方の姓名を志るせる凡例には餘りおほふうなる書方なりとて。彼人がおこりましたが。是は至極もつ

ともでございます。弘文堂の身分で諸先生方へ對し「各家名號ノ順次ハ盡ク聞見ノ早晩ニ隨テ記ス敢テ甲乙ヲナスニ非ス」とは大いに失禮なる書方でございます芹江「さやうさ。弘文が。甲乙をなすに非ず。でも有ますめへ。生利「近頃書畫會へ出る村學究なり生利はなまぎゝト訓ス全く弘文は集た斗でそんな譯はまら川夜舟でございませうが。全躰校合者が行屆かぬと見えて。あの中には大分鎗を入る所がございます。方菟抱義は波之部へ入べきを。保之部へ入れ。光祇宏齋は久之部へ入べきを古之部へ入れ。越山園岱は惠之部へ入べきを江之部へ入れ鶯谷櫻眠は安之部へ入べきを遠之部へ入れ。島洲陶村は多之部へ入べきを登之部へ幽谷囿光由義などは伊之部へ入べきを由之部へ入れ。鷗客乙雄は於之部へ入べきを是も遠之部へ入れ。菖谷松風は志之部へ入べきを世之部へ入しなどは杜撰の至りといふべし。其外吉といふ字を吉と書きたるもあり是等は古人も深く論じたる事にて。吉の字上の士を土に書ときは音吉にて訓ワザハヒなり。吉の訓はサイハヒなり意大いに違りされば渡邊幸菟が對話記の五卷目。雨森芳洲が三餘雜記の二卷目にも精く此事を論じておかれましたは。諸先生方御存の通りでございます。まだ言たい事は。關口逸堂。昌谷鑫齋。等の宿所を鍛治橋御門内と有ますが此鍛治の字は鍛冶と書たいものでございます董齋「大きにさやうでございますが。まづ〳〵そんな事は言ぬがようございます。まづ一ッ召上りまし。理屈はなしより。やはり地口か狂句の話の方が。稱讃が有てようございます樓園「イヤ狂句と申

せば暢逸先生の狂句にいゝのが有ますよ〔月影の水に螢の火は消され〕〔飛梅は君に心をつくしの地〕〔兼てなきみとは山吹から覺え〕〔西の海へさらり源氏の厄落し〕〔石川の流れ白波絶ぬなり〕〔虎馴て七賢人は吼ぬなり〕〔月よりも蚊がちく竹裡館はさし〕抔は妙でございますナ董仙「實に妙でございます華山「〔蚊がちく〳〵裡館〕とは奇々妙々だ」ト大ぜい集りしゆ〳〵さま〳〵のはなしにて。一盃一盃又一盃。さいつさゝれつ興に入るこそにぎはしけれ。此折から喜石は下の小座敷にて。たのまれし扇子かき居たりしモシ「先生私も一枚願ひたに。そのそばへ年ごろ十八九なるうつくしきげいしやていの婦人きたり。きれをいだしうございますが。先刻から少しのお間もなく。おかきなさる事ゆゑ。願ひ兼て居りましたが。どうぞ此ふくさへ雀踊をおかきなすつて下さいまし喜石「承知致ました。先刻から筆を置まもなくかきつゞけでございますから。少しお待下さい。ちよつと一盃やつてからかきませう婦人「御尤でございます幸ひ肴札がございますから。何ぞお肴をトいひながら立ツてゆく。うしろすがたを見るえず。だれかつれきたりし婦人　婦人「誠にひどいおさかなでございます。これでもわたくしが氣をきかなるかと喜石おもひ居る所へになか〳〵およさいなきものゝ。素人とは見せた積りでございますよ。チホヽ。サアお酌を致しませう喜石「是は恐れ入ます。お肴をいたゞいた上にお酌まで願ひましては法外でございます。オトヽヽこぼれます〳〵婦人「かまぼこかへイはさみておさかな喜石「是は有がたうトさかなをとり盃をすまし　一ツ上ませう。御酒はいかゞでございますか。けふの會主は酒客のせへか。酒は餘程吟味されたと見えまして。なか〳〵よい酒でございます婦人「さやうでございまする。私も少々はたべますが深くはたべません。此間も樗園先生のお會へ參

りました所が。梅溪先生や慶義先生につかまりまして。大さにたべ過ましたから。今日はちと用心致ませう喜石「ソノ樗園先生の會とおつゝやるは二月廿日の中村屋の會でございますか婦人「さやうでございます。中村屋の展觀會でございます喜石「アノ日には私も參りましたがどうしてお目にかゝりましなんだらう。尤私は下の座敷でかいて居ましたから。それでお見かけ申さぬと見えました婦人「オヤ〳〵先生も入ツゝやいましたか。私も一向お見かけ申ましなんだトこなから盃を喜石「まづ一ツお重ねなさいましトのみてふたゝび喜石へさす喜石「何だか私ばかり飲やうだ。こんどはわたくしがおさかなを申つけませう。トこなから女中をよびてさしみをいひつけるるほど先生のおつゝやる通り御酒はよほどよい御酒でございます。ふトん喜石「ふたゝびさしみをいひつける婦人「なろのふくさに心づき　オヤ〳〵私はかんじんの帛を願置ながら夫を忘て。御酒ばかり飲で居ました。先生お醉なさいません内に。どうぞ一寸願ひます喜石「ホンニ私もわすれました。すぐにかきませう。すゞめ踊がお好とは何ぞ譯が有ますか婦人「さやうでございます。そのふくさへすやうでございますかトこなから醉筆にて。喜石とゝろして　誠にふできでございます御めん下さいましいめをぐりをかき。喜石とゝろしたるを見てなにか婦人「是は有がたうございますトこなからふくさをいたゞき喜石とゝろしたるを見てなにかびつくりまたるやうすにて喜石のかほをつく〳〵ながめて　もしあなたは正月廿日下谷御成道石川樣の御門前梅窩先生の御發會へお出なさいました事はございませんか。トいはれて喜石　喜石「なるほど正月廿日梅窩先生の發會へ出ましたが。夫をどうして御存でござい

ます嬢入「どうして知てるとはお情ない。夫ではあなたはあの夜の事はおわすれなさいましたかわたくしはあのばんお酌に出ました鈴でございます。ト云つゝ喜石の顔をぢつと見て。喜石「なに〳〵あの晩のお鈴さんはお前さんで有ッたか。是れはしたり。さうとはまらずうかつの挨拶かならず恨んでくんなさんなよ。トはなしの所へどやゝ〳〵さ。なまゝひ大ぜい入りきたれば。折こそあしゝとからかみびつしやり

ぽろりとこぼすうらみの泪

第一回

安元治承の昔歌をうたひ舞をまひて輿を進る女を白拍子と稱してもはら世に行はる六波羅に名だゝる佛も堀川に勇をふるひし靜も。所謂今の藝者にして古への舞姫なり夫より遙下て寶永正德の頃には踊子とこそ言たりしを今はその名だにきえうせて浪花にては藝子といひ。おほ江戸にては藝者とよべり。倩この者の姿を見るに金屋の内に粧ひを閉雞障の下に媚を深うするやんごとなき手弱女とは其行ひ別にして玳瑁のまのぎは頭にかゞやきて朝鮮三枚を眼下に見下し。唐繻子の帶は腰を廻りて西陳桐生を心に笑へり。藍島の辨慶俗眼をおどろかし蹴出しの大幅流行におくれず。髮は油の艶あるをきらひて下むら。菊井に。鼻をあかせ顔はまひたけのべた塗をおそれて。パッチリ白ぼんにいとまをやれり。紫檀の棹花りんの胴。玉簫金管のちりからにには船館の塵も動くなるべく。十らい三なの下手拳にも。時酒の勝をゆづり。積に障る聲色

にも。出ましたやうだの捨ぜりふ。豐後。義太夫河東節。新内説經流行唄。あるひは一上り三下り。謠まじりのどゝいつや。節もわからぬのた卷の呻出すも相應に。調子を合する胸の苦さ。四十四の骨々もと。言たいやうなその身の上。夫ありても兄とよび。おのが娘を妹といふも。浮世をわたる計略。されば こそ青人草の青きより。山猿の赤きまで。多くは此罠にかゝるなるべし。さはあれ花に醉月を詠る折々はいふもさらなり。此者の風韻をからざれば。其興いと少し。寄合。賴母子。中なほり。新宅。爐開。舟遊さん。俳諧。落語。あるひは書畫會。是皆引請の一つにして。國家を治る大儒先生も。都々平丈我の村學究も。かれが酌をうけざれば。其席更にをさまらざるもいとをかし。猶まだまゆ〳〵のうがちもあんめれど。かゝる人の住家のまを り戸。明て去んも口さがなき業なれは只その緒のみをまるしつ。さてかの喜石と酒くみかはせしお鈴といへる女は。もと是武家のうまれなりしが。先年大地震の節。兩親を失ひ。夫より叔父の所へ引とられ。まゆ〳〵さま〳〵の艱難を歷て。世を送けるうち。生質三絃に妙を得たるのみならず。豐後。義太夫。河東節。長唄。新内に至るまで。やらずのがさぬ美音なりければ人みなかんしんのあまり。をちこちよりたのみ度よし。云ひ入ける故。叔父も止事を得ず。然るべき方へばかり遣はしけるが元より江戸の事なれば忽評判となり。晝夜の座敷寸暇もなく。かの町藝者同樣の身分となりしこそ是非なけれ。然れどもこのお鈴。さすがは武家のうま

れゆゑ。いろ〳〵たはれたる事云よる人。いとおほけれども。品能あしらふのみにて。只の一度もみだりなる事あらざれば。彌〳〵その名たかく。世にも稀なる女なりとて。贔負するもの日にましおほかりけるが。万延二年正月廿日下谷邊の發會に招かれ。酌にいでたりしが。此時はじめて喜石が美男なるを見初め心中に思ひけるは。是迄餘多の座敷へまねかれしが。いまだかゝる美男を見ず。如何なる方の御子息なるかと。深く心に赤繩をつなぎかけても繋がれぬ。人目の關を憚りて。そしらぬ顔にて居たりけり。是は過し正月廿日の事なり。是より第一回につゞく。扨も喜石はお鈴の顔をながめつゝ「どうか見た樣なお方とはおもひましたが。おすゞさんとは夢にもおらず。殊にわたくしが居た所は床の間を後にして。闇い所で有ましたから。お前さんのお顔もよくはわからねど。美しい女中おゆだと。見とれて居たのが戀のかけはし。渡り兼たるその所へ。香西先生が盃を下すつた故。これ幸とお酌を賴み。二ッ三ッ四ッ話はおたれど。人目の關にへだてられ。云たい事もなか〳〵に。言ず語ず其場を立。樣先へ出て矢立をだし。かいて上たる腰折を。定めて見ておくれだらうテお鈴「なにかはぞんじませねど。お赤飯をつゝんでくれろと鼻紙を。お出しなすつたそれゆゑに。紙をうけとり開いて見れば。内には何か有明の月の光もおよばぬあかるさ。御客樣の手前もあり。胸はどき〳〵氣はわく〳〵。とり落しては一大事と。内ぶところへおつかとおまひ。宿へかへつて開て見れば。私ふぜい

にかくまでお心。かけさせられし嬉しさは。何にたとへんから衣。きつゝ馴にしかひありて。身に餘りたる御うたをば。いたゞいたるは氏神の。おひきあはせにありけるかと。おもひ廻せば廻すほど。言語や筆には盡されませぬ。其お歌は今も。なほ肌身はなさず守に入れ。後の證據と持て居ます喜石「さてはさうで有ましたか。さういふお前の心とは露おらず初めて御目にかゝつた女中へ。馴々敷も歌を詠み。おしつけがましき仕こなしは。餘りの奴と定めてあとで。笑れたらんと思ひましたが。恥もかまはぬ戀慕の意地づく。かならず腹を立てくんなさんなョお鈴「オヤ勿躰ない。何の遺恨ではらがたちませう。わたくしとても蟷螂が。おのれを恨む及ばぬ戀。かなはぬ事とは思ながら。せめてはいづくのお方にて。お名をば何とおッおやるやら。夫をば是非に聞たしと。心に思へど問人も。なく〳〵おたふ戀路の闇。三十一文字のお心に。偽なくは末々まで。お情かけて下さいまし喜石「何がさて斯なるからは夫婦も同然たとひ枕はかはさずとも。心と心が逢ときは。出雲の神のお媒切ても切れぬ戀衣。不思議といはふかけふ爰で。回りあひしは宿緣の。つきぬ所でありませうお鈴「ホンニさやうでございます。あの晩にあなたのおかきなすつた雀踊を。梅窩先生が下さいましたゆゑ。帛へ包屏風の脇に置ましたが。お弟子樣の尻ふり踊の騷の時。紛失して見えませぬ故。誠に殘念には存じましたが。致方もなく。宿へ歸りましても。只々その扇子の事のみおもひ。たしか喜石とお名が有たとは思ま

したが。アノ騒ぎの中で見ました事故。おかとは覺ませんがせめて繪をおかきなさるお方にねがひ。雀踊を書てお貰申し。夫を君と思ひ。ふたゝびお目にかゝるまでのたのしみと。扇をねがひました所が。お名を見れば喜石と有ますゆゑ。實に胸がどき〳〵致ました。あの晩とても闇すみにお出なすつたことなれば。おかとお顔はわからねども。すいたお方と思しが。迷のたねと成ました。喜石「私とても其通。さても美しい女中だとは思ながらアノ大ぜいのお客の中で。お前の顔ばかり見ても居られず。見ぬふりをしてゐる心の中。さつしてくんなせへ。トたがひに心をうちとけて話してゐる折から。おづなをつれてきたりし客の聲で。おすゞは心のこれども。ぜひなく其ばを出ゆきけり。あとに喜石はものおもひ。いとゞなごりのたしまれてたちゆくおすゞがうしろかげ。なかめて居しが。心ハテふしぎな事もあるものだ。アノ女にけふこの席で逢ふとは。夢にもおらなんの内におもふやう。だト四ツのむ折しも白齋大醉にて「喜石さんこゝに居たか。コウどうしたのだ。二階中さがしたが見えぬへから。先へかへんなすつたかと思ひ。草履番に聞ば。まだおかへりはねへといふ故。給仕の女中にきけば其おかたは下の別席でございますと言やすから。すぐに爰へ來申したが。其美いおろ物は。どこへゆきやした喜石「そりやアなに何か間違だらう。あんまり二階で責られたからちと休息おやうと思て下へ來ましたら。こゝでも亦五六枚かゝせられました白齋「そんなに勤ずともいゝゑやアねへか。時に墨堤が眞盛ださうだが。けふは天氣はよし今から夜ざくらと出かけやうじやアねへか喜石「ソリヤア妙でございま

す。そんなら飯を一杯食の。すぐに出陣と志ませう白齋「書畫會の飯が喰る物かナ。東橋の伊豆熊で。鰻で茶づけとおやせうトいひつゝ二人此の塲を立い○花は盛に月は隈なきをのみ見るものかは。とは吉田の法師が穿なれども。盛の花は猶更に。ながめいやます春げしき。向ふより來る二人づれ。土手をぶら〳〵都鳥。いざと問ん何事と。一人が問ば一人が答歌よみ連夏清「時に此花の盛はどうで有馬の高火の見。天狗さまでもほめずばなるめへ「櫻咲遠山鳥のおだり尾の長々し日もあかぬ色かな」どうもいへやせん。イヤ銀雞先生の「月雪はいかに有らん隅田川。けふは櫻に醉心地せり」はよく詠れやした興好「銀雞先生から聞やしたが。山崎暢逸といふ人の詩の句に「今日不尋明日落。春來眞箇爲花忙。」とは妙で有やすチ夏清「妙々實に此通り花の爲に忙いテ興好「さやうサ銀雞先生の「春の日のながくも愛る糸櫻。くるゝもをしき花の一枝」で實に春のながい日も花の爲に暮るも惜きサ。コノくるゝも惜きが利て居やすチ「棹さゝばうつれる花の散うかと。岸の小船の綱も解れす」是は一の關の千万喜の歌で有やすが。よく詠れやした「梯子もて登れど匂ひ高ければ。折かねぞする花の一枝「親も子も櫻愛れば餘所目には皆花守と見ゆる一村」是は里人の歌で。餘り面白くもねへが。大評判の歌サ夏清「イヤ其花守で思出しやしたが。賴政の歌に「花さかば告んといひし山守の。來る音すなり馬に鞍おけ」この歌をある歌よみ連でいろ〳〵評をして何ぼ賴政でも山守の來る音だか外のものゝ來る音だ

か知さうもないものだ是は使は來たかと直した方がよからうとて「使は來たり馬に鞍おけ」と直して是は妙案だとて。其連中て賞美したといふ事だが何と大わらひじやァ有やせんか。頼政や西行は常の人と違ひ。花の頃は寢ても起ても只花の事のみを思てゐる故。山守に約束した日よりしては。けふは山守が來るかあすは山守が來るかと日々其便を待てゐる心には山守の來る音はきつと知たと見えやす。是を手短にいはゝ夫の歸る足音を女房か知り主人の足音を小僧が知りソレ旦那殿の音足かするぞ。氣をつけろなどいふ事。今日まゝ有事でぜへやす是常に心に留て居る故。自然ときれやすいはんや頼政ほどの人が。山守の來る足音ぐらゐが知れぬといふ事か有やせうか。考過て却て名歌をだいなしにする事。まゝ有りやす。そして頼政家集には「花さかば告やうといひし」と有て「告ん」とは有やせん是も何人か「つぎやう」といひてはをかしい「つげん」の方こそよけれ。抔と添削したので有やせう興好「さやうサ。そんな事で有やせう。イヤ頼政の歌について。をかしい話が有やす。小石川邊に居る松屋の社中で。何とか云人の歌に「けふもまた馬に鞍おけ墨田川。飛鳥の山も花盛なり」はどうで有やす。頼政だから馬に鞍おけが利やしたが。馬も持ぬ人が。馬に鞍おけでも有やすめへ夏清「ハ、、笑ふに堪たりだ。そして其歌は墨田川へ行たのだか。飛鳥山へ行たのだか一向わかりやせん。イヤまだ論が有やす。鎌倉右大臣の御歌にア上の句は忘やしたが「雨止たまへ八大龍王」といふ下の句を。八大

龍王と詠では歌語にならず。是は「八大龍王」と詠ねばならぬ。などといふ歌人が有やすが。是も今の御説と同じ事で。實朝公の腹を知ぬ人が。そんな愚昧な説を言出すには困りやす「武士のやなみつくらふ射講の上に。霰たばしるなすの篠原」かういふするどい歌をおよみなさる豪傑が。八大龍王くらゐの歌は何で有やせう。そして八大龍王をわだつみのかみと訓じた。證とする處がなければをかしく有やせん。下總にわだつみ村といふ所が有やすが。夫は海神と書やす。八大龍王と書てわだつみの神とよむとは何に有やすか。不學の拙者などにはとんと分りやせん。トはなしながら二人行すぐる。そのあとよりお侍「コレ待給へそのやうにいそがずともよだ。たゞ〳〵來た花見けんぶつ。ゆる〳〵と見てゆかうではないか侍△「今に日が暮はさうぶら〳〵としても居られまひ。けふは身共番を頼合て來たから。餘り遲刻しては中位だ侍□「御身よりは私か猶よ。昨日は若殿樣の御弓のお稽古。けふは奥樣の御佛參皆番を操かへて來たのだ。イヽハ又同役の出る時。恩かへしをしてやらうハナ侍○「さやう〳〵。今から走出した所が。とても明るい中にはかへられないテ。イヽハ五ツをうつたら御門へまた二百よ侍△「イヤ當月もモウ六百ほどとられましたぜ。まかしいくら取れても。吉藏や又右衞門のやうに早く開けてくゝればいゝが。アノ軍兵衞やらうの番の時はいくら敲ても急には開ず。いつまでも待せておく忌々しい野郎だ。あいつはどうかして御門番を除てやりたいものだトるつひにひくれとなりければ。花見の人もみ

なかへりけろ。此日いたつて快晴なれば人のいでし事すだのつゝみに寸地もなく農家の子どもら。よめなつくしをつとにしてひさぐあればするめのつけやきいものでんがく。すしある見せにはかならずそへるにごり酒。一ばいひつかけゆく人あれば。だんごをくひ〳〵鬼ごつこ。かけ出しさわぐもいと興あり。喜石。白齋。の二人は此ひと〳〵のあとになり　喜石「モシさきになり。花をめでつゝぶらつく内早日も西へ入相の夕ぐれすぎし夜ざくらは。またひとしほのながめなり　喜石「モシ白齋さん此さくらはどうで有ます。ゑつの滿開云ぶんなし畫見るよりも夜櫻は。風韻がたつぷり强氣で有ます。何とやたらにぶらついたせへか。すこし草臥が出ました。向ふの鼓簾張で。一寸休ませう。白齋「さやうさ。私も草臥たやうだト　云ひながらモシ姉さん酒があるか　茶屋の女「ハイでございますがにごり酒でございます喜石「濁酒もよからう白齋「けふは花見だから白馬もよからう。肴はなんだ。こぶ卷に鯡か。といつァをさまらねへ　喜石「鮓が有やすぜ是にしやせう。ト云ひながら。さら白齋「カウ喜石さんとんだ事だ。先刻鰻を喰たじやァねへか。鮓は大禁物だ。よすんとするをとめて　喜石「ホンニさうだつけ。イヤあの鰻も高へじやァねへか白齋「どうして。高くなしサ。べし〳〵喜石「ホンニさうだつけ。イヤあの鰻も高へじやァねへか白齋「どうして。高くなしサ。伊豆熊だからァノ位に賣たが。外じやァなか〳〵あんなには賣やせんぜ。ト話をしてゐる折から。土手で何か大さわぎ。よく〳〵聞ば女の泣ごゑきこゑけるゆゑ。喜石も白齋も。さてはけんくわで有けるか。いざ行見んとて。茶屋の勘定そこ〳〵にはらひ。二人ながら尻ひつからげて。人聲を目あてに一さんにかけつけ見れば。老人一人老女一人娘一人右三人を。悪者らしき男三人ほどにて中にとりこめ。老女の持たる包物をうばはんとするを。老人これをさゝへて。うばはせじと。かの悪者の手にすがる所を。又一人のわる者うしろ

より。老人のたぶさをとつて引たほさんとするを。娘なきながらそのわる者のそでに取付。大ごゑあげてあれよ〳〵。だれぞ助けてくださいまし。下さいましとなきさけぶところへ二人かけつけ此有さまを見るよりも。喜石白齋。怒氣心頭より起り。かの老女の包ものをうばはんとする悪者を喜石とびかゝつて胸ぐらとらへければ白齋はうしろに居たりし悪もの〻。襟髪つかんで引たほし。足下にふまへて動かさず。喜石はかの悪者を垣根に押つけ

喜石「おのれらふとゞきゑごくの奴かな

明かなる所には王法あつて是れを糺し。闇き所には神明あつて是を照せり。たとひ米穀高料にて喰つゞきができ兼るとも。賊をなして天道これを赦さんや。已來を急度慎め。ト　云ひつゝ。これをつきはなせば白齋もおなじく。いんぐわをふくめてけとばせば。悪ものおほいにおそれし躰にて命から〳〵にげてゆく。老人「ヤア〳〵姥どの娘が見えぬぞ。むすめが居ぬぞ。ト大さ老女「ナニむすめが見えませんと。それは大變娘　ヤ引ィ〳〵何方にをるどこにをるのだ。わぎ

トなきながら二人して。氣ちがひの如くになりて搜しけるゆゑ。喜石も白齋もびつくりし。なるほど今こゝに居たむすめが見えない。さては奴等がゑわざならんと。すかして見れば遙向ふの細道に。赤き物のちら〳〵と。おぼろ月夜にうつれるは正しく娘の帶の端。かどわかされしは不便の至り。とても事に救ふてやらんと。跡追かくる二人の實義。忽ち其場にはせつき見れば。こはいかに。白髮なる老翁土手の上に立たまひて。ヤア〳〵二人のものかならず驚く事

なかれ。惡者ども娘をかゝへて。此所を通りけるを見れば。其娘の兩親は日頃我を信ずる者なれば。其まゝ捨置がたく。我神通力をもつて。惡者どもをおひぢりぞけ。娘を取かへし。けんぞくどもにいひつけ。兩親へ引渡したれば。今頃は親子安心して歸り道におもむきたるべし。汝二人も正直なる生質にて。我を信ずる事やゝ久しければ。今隱德の力をたすけ遣すなり。喜石事四五年の内にはかならずあのむすめに廻りあふ事有るべし。是宿緣のなす所にして人間わざにはできざる事なり。今汝二人が吉凶をかんがふるに。凶事さらになくして吉事多し。さかれども身を惰弱に持ときは。吉變じて凶に至事速なれば。能々此所をわきまへすこしも怠るとなかるべし。かくいふ我は此所の鎭守たる。三圍稻荷大明神なり。と御告あるかとおもへば御姿は消てあともなく。其あたりに狐火炎々ともえあがりければ。二人は奇異のおもひをなし。そこ〳〵に其塲を立さり。直さま三圍の社へまうで。神前に拜禮し。夜ふけて我家へ歸りけり

蔦蔓戀之花菱　終

花街壽々女叙

男女の婚樂は。互ひに臭骸を抱が如しと。見識張。學者達も亦（原書二字不明）宍むらを包て。筋骨を（原書五字不明）憎やうに。見るうへに楚山の眉黛色あざやかに。蜀紅の衣。匂ひなつかしく薫なしたればこそ。色も香も有べしと悟きつたる智識徒も。必ず惑里に住悲しさに。良ともすれば狐の媚に化され。煩惱の犬に吼るゝなど。是非もなき次第なりき。況凡俗においてをや。戀と情の天が下愛着の。絆に縛れて。是が爲に憂も難面も。能堪忍ぶ事。今更いふもくだなりき。予先つ歳。花街鑑と。題せる小册を著せしが。唯一片の玉菊が。全傳を擧て。全部の趣意。半表半裏たれば。書林何某その餘興の。あらん事を頻に責て。其續編と。なさんとを望ぬ。素より好な。色慾情に再び初編の。足ざるを補ひ。此花街壽々女

を。編といへども。尙雪のうへに。霜を加へて。折襪線の。才をも恥ざる。破家押の强は見ゆるし。給ひねかしと。云爾

文政九丙戌年正月發兌

鼻山人誌

全部三卷目錄

○上の卷は風評話　歌書よりは軍書に悲しよしのやま

○中の卷は身上話　白露や無分別なるおきどころ

○下の卷は浮世話　きられたる夢は實かのみのあと

以上

廓鑑餘興

花街壽々女上卷

江戸鼻山人著

○風評ばなし

倩色心の法門に入て極樂世界の躰想を觀ずるに聲聞緣覺菩薩佛界の四聖も眼前に來迎ましまして光明赫奕と國土を照し晝夜迦陵頻伽の聲玲瓏として心耳をすます金殿樓閣本間の床のうちまでも常に紫雲靉靆て歌舞音樂の持賞衆生滅法界の五道十惡をゑらみ給はす攝手不捨の金言にもし手練僞りあらば正覺の位をとらじと誓ひまします彌陀如來も此お淨土に至らずんばなどか拜する事を得べけんやされば此土開闢初しより以來極樂詣りの同行櫛の齒を挽がごとく素見地廻りの羅阿漢間夫と地色の尊者達未至と不意氣の舍利弗まで黃金の膚を見せて功德莊嚴のありがたきを知る爰において天人阿修羅等作禮而却と佛說の阿彌陁經にも說れけりされば人間の盛衰榮枯は過去宿緣の然らしむる所なりと言ねば迷悟の果しがつかず身のうへの喜怒哀樂も皆前の世の約束事と道理を付ねば諦めがつかず兎角浮世は儘ならぬ色と酒との二河白道迷ふも戀の穴賢悟らぬうちこそ花なるべし泥水の流れも淸くすみ町にその名も高き萬壽屋の娼妓玉菊が雛妓たりし玉章も今は〆〆の位をふんで名も菊の井とあら玉の春を壽くほうらいも客の便りをま

つの內幸樣御仕舞菊の井と札の懸りし深い中互ひに遠慮も內證の通りは能ぞ見えにけるされば玉ぎくが禿たりし小てふも今は菊の井が雛妓と成て頗る氣てんもきく里と呼るゝ身とはなりにけりまづ初春の壽きもめでたく濟で幇間持藝者も騷ぎ草臥茶屋諸ともに引取し跡は坐敷に眞ねこの內幕ばかりより集り顰火鉢を取卷て小鍋立の榮耀喰より客の風評の種々さま〳〵能事に付ケ惡い事に付ケても又出る玉菊が噂唱し菊の井「モシイ幸さんへ主ァおもひもつきなんすめへが玉菊の三年が來イすヨ　幸「ホンニそうだつけのアゝおもひ出しても涙のたねだ併玉菊さんもはかない事トはいひながら死に花の咲た娼妓サの紀文さんがアノ通り金に費しての追善供養水道尻の井戸普請も廓中の人の爲と掘拔の大仕掛も矢張玉菊さんへの菩提の爲盆中の燈籠も末世末代此さとの有ん限りは名の殘る善言功德の年忌吊ひ黃泉の下でまんざら怨しい人ともおもはつまやるめへぜ　菊「ほんにそうでおざりいす外の人の千遍万べんの回向より紀文さんの日から一遍のお念佛が何よりおいらんの身では嬉しい事ちやァおざりイすめへ　きく里「娼妓がこれは今のさしていふことばなりアノ時の名を出して讀つしやるト誰でも哭ねへものアおざりいせんよ　幸「そうだろう〳〵去者は日々に疎しとその時程にやァおもはねへけれどホンニ瀧さんと一緒に駈付て來て見た時ァ愁れにも又凄冷たヨ　菊「エゝもふ〳〵およしなんしおもひ出しイすと體がいつそ震へて來イす　幸「こいつァ大きくじりだ其方から云出して置て止るもよく出來たきく「アノぬしの所へ

お上々なんす夕はいつちさきへお書なんしたト見えて慥か硯箱の引だしに入れておざりイしたツけれ　菊「夫ゆゑ何もかも濟んだ跡で見出して主の所へ届けて上げへした　幸「それだから作者も心付ず前編に書おとして置たも大志くじりだ紀念とおもへば其夕か枕紙にもならねへ譯で今もつてかうして持て居やすトはな紙ぶくろのあひだから　菊「さつて見　死なふとおもひ詰たうへから能此やうに書て置しッたのふ万事に氣のつかつまやる丈結句おもひ過しがたんと有てあんな取迫た事にも成イしたおいらんの心根がいつそト目にもつなみだたみす紙ておしのごひ　能便りの折からとは申ながら鳥渡御左右うかがひたゝ〜まづとやト讀い　幸「チットそれぎりでもふ後は讀ずに置事だ又涙をこぼして癪が痛へといはれるも氣のどくだヨト取にか　菊「アレサお待なんしトわきの方をす　我身事兼てくもりなき心のうちは瀧さまも能御ぞんじのうへながら斯るうき勤めの悲しさには兎角に御疑ひ勝にて此度の御腹立も定めて延壽さまの事よりと心付き候まゝおんまへさまでくわしく申あげいろ〳〵お執成も下され候へども瀧さま御聞入れもなく松田屋の様子もうけ給はり志んに〳〵かなしくトだん〳〵聲がひきくなり幸「コレサもふ止に志ねへかナ菊「アレサもふ些とお讀せなんし幸「そんならまア某が讀で聞せやうから此方へ出しやトむりやりにひきさつて　玉章さまの事も只〳〵御まへさまのみを便りと朝夕御うはさ申くらし扨〳〵御浦山敷中と我身につまされたゝ〜くれ〳〵も御見捨なふ鶴亀の御契りをいのりたゝ〜小てふ事もくわしく玉章さまへ憑みたゝ〜我身なから

ん後はさぞ〳〵いぢらしき事と不便にぞんじたゝ〜ア、もふ是限にして置やせう段々讀と愁れツぽい事ばかりで何ンぶんおそれるトそのまゝ紙入のなかへ入れながら　ところ〳〵讀でせへきく里さんなざア目に一ぱい涙がたまつたぜきく「嘘をおつきなんし哭は致しイせんトいひ乍ら菊の井の顔を見る菊の井も玉菊が書しふみさおもへばそゞろになみだぐめば　幸「こいつァ大笑だ菊の井さんも矢張哭て居るの併無理でもねへ今死なふといふ場になつておめへの身のうへやきく里さんの事まで眞身の兄弟を見るやうに此やうに人にまで憑で置といふはホンニ難有心意氣だ　菊「そこの所を察して見いすト志んに涙がこぼれへすきく「幸さんお笑なんすなへわつちやァいつそ悲しくなりましたトたがひにその時の事をおもひい　玉の井「これも玉ぎくが志んぞだしてなみだにくれしなりから　玉の井「これも玉ぎくが志んぞうなりしが今はざしき持となつてすこし氣めへを見せたがるおいらんなまえひとモシイ幸さんへお怨みでありますヨヲトいひながらトなつてしやうトのあけ立もはなはだ手あらくズットはいりだらくに火ばちのわきへ　幸「チットそのいひ草は。此方でいふのだ幾度呼に上げても。アノお志げりたつぷりで一すはる向御沙汰なしもホンニ。お馴染甲斐のねへ關憧サね　玉「チャよしておくんなんしよそんな罪をするやうな客人は。一人もおざりイせんヨヲトむれた〜菊の井さんいつもの萬金丹が。おざりイすなら。一粒おくんなんしいつそ。刹なくつてなりイせんョ　菊「些とお控へなんし。又あした持越て。お煩らひなんすだらう　幸「ハテどうも色男のさかづきじやァ。後で苦しむまでも呑ずにやァ居られねへ。わつちが醉の覺る。能藥を上げやせうト紙入レのあいだから玉「そりやァ菊の井さんの事ておざりイすトいひながら丸藥をまへばてぼきく「チャ能匂が。いつそ致しいすョ玉「さういつても

幸さんは實が有ッしやるから。どふも可愛ョねヽ　幸「くすりのお禮に合せ鏡の。蜆汁も澤山だヲ　玉「あれさ眞の事ておざりいス。菊の井さんの恍惚さしッたも。むりはおざりイせん　幸「なァニ菊の井さんはほれもきねへけれど。此方で恍惚てむせうに。くるもんだから。どふも仕形があるめへぞやァねへか　玉「チャ可愛想な事をおつせへす。てへ〳〵ほれて居なんす事ちやァ。おざりイせん　幸「それでもモシわつちが心に。恍惚られたトおもふやうなとァ。一ッもござイやせんトきくの井が菊「玉の井さんお搆ひなんすな。幸さんの無理にやァ。きんに困りイす玉「エヽ負てお出なんすなホンニ客人ほど疑ぐりッぽいものァおざりいせんョ　幸「コイッァ大きくじりだ女郎衆ほど。又嘘をつくものァねへ。夫だからうつかりト附會と。とんだめに逢やす　玉「チャ幸さんも。とんだ人が悪くおなんなんしたョ。今ぞやァ客人の方が無如才なつて。結句女郎衆が欺されへす。夫だからめつたに客人のいふ事も。あてにやァなりいせん　幸「それで丁ど五歩〳〵だ客人も。女郎衆のいふ事を疑り。女郎衆も客人のいふ事を。うたぐつて見るトいつまでも。果しが付ず。そこで氣根くらべの。辛抱强へ奴がいつでも。落をとる譯だ　玉「それじやァぬしも。その氣で落を。おとんなんしたのだヲ。可愛がつてお上げなんし。きんに恍惚きつて。居さつしやるから菊の井さんあんまりぬしが。心よしだからヲ幸さんが。我儘ばかりおいひなんす。おも入レ喰付てでも。お上げなんし　幸「そいつァごめんだ。黒暗で病犬にでも出會

やァきめへし。喰付れて溜るものか　菊玉さく「ヲホヽヽヽ　トたまの井は一ばいきげんにまぜいくくもないそは〳〵きながら出て行かやうなるおいらんはとりとめたきやくトんもたくさんなくうはきらしくみゆれども事なきやべりまはして又のちにめへりいせうトさうかけながしのいろ事もできず見かけとはちがひてさんだきせうものなればやり手もとりあつかひのきにくきしきく「玉の井さんのお出なんしたので。アノさつきの事を。忘れ切ッておりいした一寸。憑んで參へりィせうねへ　菊「そふしておくんなんし。子どもの云傳じやァ。どふも悪ふおざりいすきく「そんなら鳥渡。行て參へりイすから。まァ些とおやすみなんし。幸さんもいつそお醉なんしたトいひながらたんすの深い引出しよりこま下駄を出しろう下へ出るこれはなトみの客の所へ金のむしんの文なちや屋からさゞけてもらうやくそくして口上の添ふ事あればわざ〳〵きんぞうに持せてやりこれをたのむ事なり又ちや屋にてもかむろの使ひともちがへばなをざりならす直に菊「晝間ッから呑續けで。お出なんすから。些お休みなんしさきへさゞけてそのへんトをきく事きまりなり菊「晝間ッから呑續けで。お出なんすから。些お休みなんして又後に。おあんなんし　幸「なんだか酒が理に落て。醉ねへ〳〵トおもつて强氣に呑やした。もふそつちこつち。燈の付く刻限だらう。些とまァ寢轉びやせう　トうは着を脱いで床へ入るきくの井もおなトくうちかけを脱ぎて幸がうは着の小そでもろさもゆかうへかけてべうぶをまくらもとへ引まはしたばこぼんの火入レの上へ手をかざして見て火の正月初氣あるゆきさこへ入りうつむけになりたばこをすひ付て幸にやるこれお定まりの手つづきなり幸たばこをのみながら正月初〳〵しくこんな事を。いふでもねへが。去年の暮から内が大揉で。何所も彼所も。ふ首尾だけ。出にくい所を無理遣りに出かけて來のも今と成て。仕舞ッ放シの顔を出サねへのも。餘りきがねへやうに。見縊られるがくやしさに。跡はともなれ山ざくらト。大膽不敵出かけては來たやうなものゝ。能〳〵おもへばみんな某が。誤りだとても瀧さんのやうな。花〳〵しい遊びはできねへ身ぶんで。押を强く是まで來たのも。まつたく親仁の光りを。笠に着たお蔭ばつか

り。去年の夏。目出度なられて夫からの騷動。お袋が分ッた中の悲しさにやァ。夜盗でもするやうに。一家親類を觸あるき。耳にたこの入る程。勘當の云草も聞倦て。どうでも氣の濟やうに。致が能ト。高を縊ッて何にも親に。楯を突氣もねへけれど。お袋達でも又身上の能といふ人でもなしあんまり口奇麗な事も。いはれねへ譯を知ッては居れど。まさか親の讒そうもいわれず。アノ手代の算六めが。折々眞實らしいコハ異見も。なんの此奴が。お袋とぐるに成て。つくづく考へて見れば皆な此方の了簡違だトすこしふさぐ　菊「しん内節の尾上じやァおざりいせんが。繁々逢ばお宿の首尾。あしきは胸にしりながら。ホンニ惡縁でおざりいス。ぬしのおやどの。不首尾な事も。跡ではいつそ苦勞になり。どふ致しいせうト案じらるゝ程。もふ〳〵今度から。無理止は致しいスめへト。そのときにやァおもひィすが。又お目に懸りいスと。どふもわかれがつらくつてなりィせん。矢口の道行ぢやァ。おざりいせんが。夜の明ぬ國へでも。行たくなりィす段〳〵ぬしの身迫りも。しみ〴〵苦勞になりもし万々一。是ぎりで逢れねへやうにでも。成イしたら。どふ致しいせうトおもふト。心細く成て胸が一ぱいになりいすトおなじく幸「なんのまァそんな氣の弱い事をいはずに。緣と時節のすへをまつがいゝ。たゞさへ苦界のつらい身のうへ。煩ッちやァ。倘更みじめを見るのだ。たとへ内がどふならふとも。是までさへ我慢を仕遂て。今ト成見捨る了簡は。些ともねへけれども。何ニを云ふにもむかしの身ならどのやうにもト。伊太八のいひぐさぢやァねへが。此身と成ては定めて。手めへも愛想が盡やうし。自然と遠遮る氣にも。なるはしれてある。段々の身迫り。少しもはやく。ちや屋の拂ひを片付て。そのうへでの一トしあんととつくに了簡は。究ておいても。かんじんの心が迷ッて得心せず。恥の上ハ塗と承知して。來るのが。今ぢやァ面目ないト氣のどくのやま〳〵かほにあらはれければ　菊「もつてへねへ。ぬし達ても。是までお出なんすうち。人なみはづれて。奇麗に金をも。お遣ひなんしたものを。些とぐらゐの滯りは。有うちでおざりいす。たとへ金のなる木を持た。大盡でせへ廓の金にやァ。迫るならいゝト申シィすものを。何ニもそのやうに。苦勞になさりいス。譯もおざりいィめへ。是れが又きのふや今日。馴染でお出なんす客人ぢやァあるめへし。内證達てもそのくれへな事ァ。勘辨も仕うちでおざりいス。よしんばまた此うへぬしが。どのやうな身のうへに。おなんなんしたとつて。愛想の盡るやうな。心がおざりいスくらゐなら。こんなに氣をもんで苦勞は致しいせん。その時ァ命の續くだけ。貢いでおあげ申ィす　幸「茶やも紀文さんの。手並を恐れて矢張此方も。一ッ畑けだらうトおもつて。けちらしい事もいはず。いつ來て見ても。請がいひから段〳〵鰻登りと成て。勘定もしたら大方百兩の餘も。借りが有だらうけれど。些とも催促をされねへだけ。結句肩身が窄まつて。氣のどくな事だが。おのづから氣にくゝなる

も。金といふ守り本尊さまに。見放された悲しさ。心に見捨る氣はなけれど。來れば來る程ま
ア互ひの身迫り。勘辨に勘辨も仕扨いて。居る内證の手まへも面目なければ。内の騷動をさい
はひに當分のうち。居敷ッて居て。家財は分散出入屋敷の株式も。人手に渡せば二百兩ヤ三百
兩の金は手に入る心の目論見。些と高麗屋めへた仕うちなれども。ハテ潰れる時節が來りやア
百万兩の身代でも。仕方がねへ眼前。紀文さんなぞが。能手本だそれから見りやア。此方ア的
りめへト。諦めて一チばん法を。書て見るつもりだまアそふおもつて。隨ぶん煩はねへやうに
して。居るがいゝ　菊「そんな氣におなんなんすも。皆なわつち。故とおもひいすト。いつそ
死んで仕廻たく。なりいす　幸「前編に玉菊さんの。愁れッぽい自害を筆に止めて書たものを。
手めへまでも未練らしく。今更作者も殺しはしめへ。金の才角が出來しでへに。身請もこつそ
りト内證へ懸合て。儘になる身として見たサ。その時手めへのおふくろも引取て。親子三人む
つましく　菊「暮すやうにも。成イしたらどんなに。嬉しうおざりいせう　幸「春はむかしになり
けらしト。今の苦界を噂にして　菊「些ともはやく。青梅の布子が着て見たうおざりいス。あの
嘘さんにまでも。ぬしがいつそやさしくして。おくんなんすを來る度に。咄しては。うれし哭に
ないて行イすはな。是といふも畢竟親の爲に。つらい刹ない恥かしい。うき苦界をするゆゑに
神佛の御方便で此やうな。結構過た。お客さまもあるかトおもへば。なか〳〵一ト通りの。お

方ともおもはれず。親子の爲にはうぶすなさまの。御化身と毎朝毎暮蔭ながら。手を。合せて
拜む度々。どふぞ末長くお守り。なされて下さるやうに。心のうちでお願ひ申も。みんな吾子
の身の可愛サ。必らず麁略に。おもやると其方の罰になるぞよト。くよ〳〵いふて往なんした
嘘さんにまでも。ぬしがいつそやさしくして。おくんなんすを來る度に。咄しては。うれし哭に
ないて行イすはな。是といふも畢竟親の爲に。つらい刹ない恥かしい。うき苦界をするゆゑに
ひ込だ客人は。幸さんばかりでありいすヨと安堵させて遣りィした　幸「そりやァ能ッた
の。年寄といふものァ。些とやさしくして遣るト。ころ〳〵して嬉しがるものサト　ホッチ！〳〵はなすうちいつ
しか夜ぶんのていさかはり見せすがゝき家〳〵のりうぎに彈つれておもては素見ちまはりの有像むぞうかうしさきにあだめか
すわるトやれまのふりきいたふう通もふ通もおしなべて皆いろ男の氣ざりなるべし爰にまんドゆ屋の。のふれんをくゞりて土
るひとりの客あり。さしは五十ぐらね。でつふりとふとりて。にがみばしつた顔色形は。ゆふきもめんに。ちゝぶ絹の。うら
を付た小そで。またぎばくすんだ。さうざんのかはりとま。ごうはもめんで。そでばかり紺ちりめんを付たしゆばん。小やな
きの帶。小もんりうもんに。くろうらのはをり。白たびのばつちまりはしより「なりかつこうさいひ　若いもの　喜六「こ
としごろさいひどこへ出しても。あさくさへんの番頭かぶを見えるふうぞく金のありそふに見ゆれば
れは入らッまやりましトさきに立て　あがりぎはお客だヨ　秀「大せいのこゑにてアイ〳〵〳〵「やり手べやのとなり八疊の間へ
ら吉「大ぶん今晩はお寒うござります　客「そうサね雪でも降ねへけりやァ。ようござりやす　吉「へゝ
トいひながら片わきにありし火ばちを客のへゝゝお馴染でござりますかト兩手をついていふ　客「なァニ雛妓衆でも。
まへになをすかむろちやをもつてきたる　吉「へゝゝさやうでへゝゝござり
出してくんなせへ今夜はホンノ一盃こつそりト呑に來たのだ　吉「へゝゝかしこまりました　ト金をとつていたゞき立て行ほどなくお定まりの
ますかトたつを　客「カウ〳〵トよ「かみ入れのあひだかこれでグット能酒と。臺を一チめへ取てくんな
せへそして蒲燒が一分だ　吉「へイゝゝかしこまりました　てうしすゞりぶた。そのほか出しものも出れば

きくとぢ「トいふ十五六のしんぞう吉六　吉「さやうなら一寸お盃　トきまりの手つゞきあつてこゞなくあつらへの。うすくりの禿いかゞのすがたにて火はちの片はら　およそ初會の一人客はど。つまらぬものはなし。況や雛にめいわくそうなかんしよくにてすはつてゐる　妓買にては。尙更咄し相手もなく。手持不沙汰なれども。少し譯あつて爰に來りし客ゆゑ。ざしきの淋しきにも。一向かまはずひとりで酒を客「今出たゝんそう衆は。何ンといふ名だ禿「菊綴さんといひなんす　客「手めへはいくつだ　禿「十ウであります　客「おつ付ケ能娼妓になるだらう。今般來るとき膝の折る人形でも。持て來て遣らう。サア一ツ酌でくりやトはなしもなき子どもをあひ手にぐびり〳〵呑でゐる所へよう〳〵きく一ツ呑ねへかとぢ「わつちァきらひであります　客「そんなら何ンぞ喰がいゝト。いとぢきたれば つた所が。これも初會の遠慮があらうし。ハテ困たものだトいつたばかりなんのはなしもなし。きくとぢ合せて。ちいさなこゑにてはなしをしてゐるも。こつちのみゝへはきゝとれずまばし有て五ツの鐘ボヲン〳〵〳〵〳〵拍子木チヨン〳〵〳〵〳〵鐵棒の音ヂリン〳〵〳〵〳〵ゑ使ひ虎屋よろしう叶屋よろしう「あんまァはァ五街の春色まさに繁花をたゝかはす

花街壽々女上卷 終

廓鑑餘興

花街壽々女中卷

○身の上ばなし

儘ならざるを以て。苦界といひ。いやな機嫌をも伺がゆゑに。勉めとはいふなるべし。されば疳志やくの青ッ切りも。うきを忍ぶ媒だちトなり。いとし可愛の虚からも。實を盡す悪縁には。かへッてその情合こそ深かるべし。爰に萬壽屋の菊の井は。幸介が　はゝめは幸の介といひしが今は一厚き情けに絆されて。深くも迷ふ身の因果。一チ日逢ねば百年も。遠去りたるおもひにて。ふけんのある上となり幸介といふみの便りも櫛のはを。ひく悪縁に幸介も。のぼり詰たる山口の。茶屋に拂ひも滯れば。その氣の毒サ。面目なサに。自然と足も近からぬ。身の迫りより菊の井も。逢ぬつらさを。かこちては種〳〵遣曲のさんだん工面。手の屆く丈け。仕盡して。正月の仕舞札も。名まへばかりの表向互ひにつまらぬ身のうへの。はなしも結句樂しみと翌日の苦勞はまら露の。無分別なる心より内の不首尾も酒に忘れて　幸「いま日が暮たとおもつたら。もふ五ッだのァ、晝間ッから。酒浸しでなんだか。腹にたわいがねへやうだ　菊「おまんまをチ。おあんなんし。飯をこしらへてあげへすから　幸「いかさま一ぺへ。サラ〳〵とやりたく成た　菊「飯のできるまで寐てお出なん

しヨ　ト獨り起きて衣桁にかけしうちかけをはをり小用に行ながらきく里をよび飯なのまたくないひ付ケ又禿まがきをよびて火ばちへ火をつがせ偖よびの出しものなどざしきへはこびかれこれするうちはや火ばちにかゝりしひろしまのやくわんもチン〳〵とうなり出す十ぶん幸もおきてふとんの上にすはつてゐる折から　きくさち「黒ぬりのおかごめんなんしト幸さんへわつちの客人が是を。ぬしにお上ケ申てくれろトいつて。おはいりモシイ幸さんにいだす幸「おめへの客人とは誰だとち「アノ子初會に出へしたお客ゆゑ。何ンとおつせへすか知りィせんから。聞ィまたら名は言ずとも。幸さんが知ッて居さつまやるトおいひなんした幸「ハテな奇妙な事も有ものだ。併おめへ寐ぼけて。門違へでもまたのゑやァねへか。此方に一向心的りがねへヨ。今茶づらうトおもつて居る所へ。蒲焼とはあんまり佳味過て。夢のやうにおもはれます。手を付けたうへで　人間違でもあるト。おめへ獨りが迷惑するぜとち「些とも。違惑ゑやァおざりいせん。その客人がおつせへスにやァ。菊の井さんの所へ。幸さんといふ客人が晝間ッから來て。居さつまやるだらうト。お聞なんすから。アイ來てお出なんす。ぬしァ知ッてお出なんすかト。申ィまたら知ッて居る段か。夫ゆゑ蒲焼も上げるつもりで。取寄たのだどふぞ。おいらんのざしきへ持て行て。ぬしに上げてくれろト。お頼みなんしたそして。ざしきのやうす次第で。一寸お目に懸りに行たいから。都合の能ゑぶん。こつそりト知らせに。來てくれろトおいひなんしたヨ

幸「ハテなどんな風俗のおとこだへとち「いつそ肥ッて居なんすヨ　幸「若い人かとち「いゝエよつぽど。としよりでおざりいス　幸「ハテなトまばしかんがへてすこし心におもひあたれどもさあらぬふりにて。どうも解らねへけれどその

やうに。此方の名まで。いつてよこしたものなら。まんざら門違へでもあるめへ。なんにしろこりやァ。喰事だろうストふたゐわきへ　こいつァうまさうだ　菊「丁ど飯も出來ィした菊ざとさんおまんまを盛て。お上げなんしきく「アイトにしきでのちやづけぢやわんへめサァおあんなんしトいだす

幸「こいつァありがてへトとつてかばやきを一トくしめしのしをよそひにばなをかけてうへにのせサラ〳〵トくひながらサァ〳〵皆なも喰事だ。殘して置た所が。はじまらねへまたがすこしつめたくなつた。菊ざとさん。その大平の蓋へ酒を酌でくんなアイトついで　幸「ヨシ〳〵そこで。此かばやきを串ごと。かう兩面から。酒を付けて火どるやつだこれで矢張燒立と喰る。チット菊綴さん。ソレ火箸を二本渡しなせへ。そふサ〳〵サァ〳〵。遠慮なしにみんなが燒ぐひトするがいゝトまばし口に土用が入れば外にはなしなし　菊の井「菊とぢさん。そこの銚子を火ばちの脇へ。おかけなんしなとち「アイトてうしのよこつばらを火の方へよせてかけるかばやきで茶づつたうへで又酒を呑ァ。戯場の打出から女郎買ト。出かけたやうなものだ。サァ年役からはじめて廻しやせう。カウ菊ざとさん籬にも。呼でかばやきを喰せなせへ。未だ強勢にあるぜトこれより又酒となるきくさち初くわいの客のさいはひと。こゝにて飯をくひ酒をのみ。きく里もたまぎくにめゐはづしてかばやきはもちろんずべて出しものゝ。おほ皿どんぶりまでも。殘る所なく喰盡してきくの井幸介もホロえひきつのポチンとち「おまんまをたんとたべへしたら。いつそ氣が重くなつて。立がいやになりいしかねたヨきく「ヲヤばからしい。客人じやァおざりいせんかへ。はやくお出なんしとち「まかたがおざ

りいせん。めへりいせうトたちながら幸さんおいらんおやすみなんしトろう下へ出そふにして又立もどり モシイあの先き客人の。おつせへした事ァ。どう申シイせうねへ 幸「お目に掛りてへといふ事なら。まさか寢られもさめへ。蒲燒を貰ッたふ運だ。待て居るからそふいつてくんなさち「そんならさう申シイすヨト出て行く 菊「きく里さんも。おやすみなんしまがきもモウ能から。行て寢や トきくより兩人もろともざしきにとりちらしたるものをかたづけて そんならおやすみなんしトいつて立出る跡は二人りのさし向ひ 菊「ぬしの心安いお方なら。お出なんしたときにこゝが淋しくつちやァ。わるふおざりいせう。今のうちなら都合も出來イせうから。なんぞさう申テ來イせう 幸「なァに隨ぶんよしサ。菊綴さんの咄しのやうすで大概その人も。わかつて居やすトすこしふさぐおきく「もしお逢なんして悪イお方なら。酒にいつそお醉もひ入あれば なんして。モウ寢てお仕舞なんしたト。ことはつてめへりいせうかへ 幸「そんなに又。心遣へをする程な。人でもねへ某が推量にやァ。てつきりアノ。算六めが來おつテ内の荒すまを爰で打明。耻を欠せるつもりだらうが。さふ愚鈍見縊られて。たまるものかまァ手めへは知らぬふりで。なんといふか聞て居るがいゝトいふ所へきくとちがあん内にて。ごめん下さりませとおやうじを明けてはいる男は幸介が推量に違はず。ばん頭の算六兩手をついて おいらんには。はじめてお目に懸ります私し儀はかねて若旦那より。お聞およばれもござりましたか。番頭の算六めでござりますトいんぎんにいへば 菊「よくお出なんしたトいつたさん「偖若旦那あなたの。お跡を追かけて。わざ〳〵今晩來りしも。是まで私しがいろ〳〵ト。御異見

申せしもお聞入れなく。段々の御不行狀。大旦那の御病死より。御一家方はじめ彼是と。御相談のござりました事は。私しがまうさいでも。皆あなたが御存じ。アゝどふぞ當ぶんの内。御ごんぼうもなされたら。お袋さまのお心も直り。又能御思案も付きませうト。およばずながら老功の。おちゑも貸てあげましたれど。それも一向糠に針。お利なさらぬ身の御不埒。自然と悪事は千里を走り天知る地知る我知ると。鎌倉の御伯父さまの。お耳にまでも。這入しと見えまして。わざ〳〵江戸へ御出府御一家方に。くわしいお咄しをお聞なされ。以の外の御腹立。親の死に目にも逢おらぬ。碌でなしの根情で。とても行末は心もとない。親に代りてこの伯父が勘當じや。此身代を潰しては。先祖に對して申譯なし。吾乙娘に聟とつて。家名を永く相續させん。此おもむきを少しもはやく。幸介へ告知らせよト。それは〳〵嚴しい仰せ付られ。口上ばかりで申しなば。定めて御疑ひもあらん。ト存じ御伯父さまより。手切れの一札則ち。持參仕れりト幸介がまへに出せば。これはとおどろくきくの井が。心のうちのかなしさ。せつな 幸「コレ算六どんいかさ。幸介もやゝまばしもくれんさしてぬたりしが。なにおもひけんひざ立なをし に某が。獣子だトいつてあんまり。狂言のすじが書過る。貴さまもかねて知るとほり。今のお袋といふは。元めしつかひの下女親仁がもの好で。後妻に直したればこそ。おふくろさまとも崇めて置。その大恩をもかへりみず。何にか夜盗でもするやうに。一家親類を觸あるき。目の敵にして。勘當〳〵も聞倦た内の騒動。貴さまもかねて。合點

のゆかぬ事ばかり。夫ゆゑおのゞト内に居るのも。面白からずつひ不了簡な。氣にも成たは。手まへ勝手かゝらねども。まんざら無理でも。あるめへゑやァねへか。何にも伯父御の心に叶はぬトいふて。後付けに勘當を。される覺はねへ。此一札は持て歸ッて。もとのさやへ收める工面を。ゑてくだせへトきいてさん「これはいかにも。迷惑せんばん。檜山の火は。檜より出て。檜を枯すトか申ます。みんなおまへの求めた罪。心に怨みをおつゝやりませ。私しは伯父さまのお使ひ。おぼしめしにも叶はずば。只今より御歸りなされ。伯父さまに御對面あつて。此一札は兎も角も。お渡し申すは使ひの役目ト互ひに爭そふ善惡邪正幸介は主の威光に我まんのいぢ又さん六はばかさう役家の石ずへトやゞ答へ身の放蕩を恥しめれば幸介今はこらへかねて幸「ヤァ主に向ッて雜言過ごん不屈き至極トはら立髻つかんで捻伏れば（さん六下よりはねかさん「主とはいはさぬ。親方の身代を潰に來た天魔外道サァなんとでもゑて見やれトふはみを幸「ヲヽかうするはトのべのきせるを手にむづとりすがりきく「そりやあんまりな短氣の仕方。まァ見せれば〳〵待てくださんせ。こんな悲しい事になりいしたも。皆なわたしが獨りの罪。腹が立なら此お方より。わつちを先へお敲きなんしトさん六が身をさん「ァヽモシ〳〵かならずお搆ひ下さるな。打れても擲かれても。大事ない男の身のうへ。おまへに些とでも。怪我があつては。此家の。主人へ言譯なし。私しとても見えの塲所で此やうな荒すまを。いふ氣はなけれど。あまり若旦那の。强情過た挨拶に幸「何にがなんトぬかすのだゞさん「イヽヘサ此一札さへ請取て下されば。何ンにも申す事はござりません菊「それ程にぬしも。お困んなんす此書付け。わたしが手から幸さんへ。お渡し申して上へせうさん「ヘヽヽさやうなされて下されば。何ンの申ぶんはござりませんそんなら此方へ。お出しなんしトさん六が手よりかの幸「さァその一札を此方へ取ては。書付けをうけとれば某が身の破滅となる。コレ菊の井その儘はやく。返して仕舞へトあせるほどさん六はおちつき目も濟しうへは。おいらんおいとま申ますト立んとする幸「イヤならぬ工みに謀みし此一札持て歸れトなげ出し又も爭そふその折か「ヤァ〳〵幸介。その身の不埒は詫もせで。却て算六が心を疑ひ。彼是ど鬪爭て。勘當せし手切の一札請取事ならぬトあらば。伯父が直に手渡せんト立出るは幸介が親の兄。かまくらの花水橋に。七福神とよばれたる。その座がしらの。大こく屋ふく太夫なれば。さすがりきみし幸介も。あなにしほの手もちなく。對面するさへめんぼくなき身のまやはせにはぢ入て。かへすことばもなかりける。菊の井も今更に。藻に住むしのわれからト。只管かこつ涙川。流れの身にも汲わけて。忍び哭入る友千鳥。愁れに座こそゑらけけりふく「アヽこれは〳〵。不慮所へ顏を出して。女郎衆の手まへも氣の毒ながら。果しの付ぬざしきの鬪爭。てつきりかういふ事も有うかと。思ふたゆゑ年寄の皺延し。命のせんたくト氣恥かしくも獸子らしい。孫のやうな皺妓買て。遊ぶ氣はマァ微塵もなけれど。貴さまに逢て是までの。身の不行狀。多くの金を遣はれた。禮も一ト通りいひたしト。おもひ詰て來て見たれど。夫も勘當した手切れの一札。四の五のなしに請取ば。いつそ逢ずに歸りませう。トはいふものゝアノ算六が。きつい骨折。逢ずにいんでは此胸がト。伊ざへもんのいひ

ぐさ見るやうに。隣りざしきに酒呑で。やうすを聞ば。わしが使ひの算六を。打敵だそのうへにおのれが僻める根情から。手まへ勝手の不理屈ばつかり。後ろ付けの勘當受る。覺えはねへなどゝ。聞て居られぬ。不屈き至極そりやいふまでもない。おのれが心に覺えもあらん。コレ善も悪きも皆。十目の視所じや。人の目がねに外れた奴。太切な身上を潰されては。先祖へ對し弟へ對し。年取た此伯父が。黄泉の下でいひわけなければ。是非におよばぬ仕様事ない。一刻も早く勘當して。跡式は兼て其方の。女ばうト約束した。アノおふくめに婿とつて。家名を長く相續させる。斯申渡すうへからは。最早縁なき他人の事。何所へなりとも氣儘に行て。それから先は。おもひおもふた傾城を。女ぼうに仕様とも。それには構ぬ心まかせ。ふ便ながらも求めた罪。翌日から宿なしの。愁れな身のうへ。些とは肝にもこたへよト目にもつ泪おしのごひアヽ此やうな事。いふて聞せる所もあらうに。色と情けの見への場所。數多の御客女郎衆の。聞るゝ手まへも氣のどくなれど。是も矢張おのれから。仕出した罪なりや是非もない。サア〳〵算六どの。支度がよくば歸りませう。夜の更る程道も。案じられますテさん「へヘヽさやうでござります。おかしお駕は大もんに待せて置ましたれば。何ンにもお氣遣ひはござりませぬふく「それはさうでもござらうが。サヽすこしも早くさん「へヽヽさア入らせられませト兩人立。きくの井はまたいうのやうすをきくほどむねにいづばいの泪は迫るうきおもひ。今更何にほどわびるともかへらぬ事トはおもへどもこよひにせまる身のかなしさに　蘭「ふく太夫がそ御勘當の身となせしも。元はトいへでにすがり

ば吾身より起りしゆゑと今更にいふて返らぬ事なれども傾城の身の恥かしき勉め心も脇となりまん實まよひし悪縁にわすれかねたる身の因果きのふ會たるお情けもけふの心のそのうれしさけふよりは又あすか川深きおもひにそめてゆく時雨の紅葉色增して濃なる縁もこよひ限りふつつりおもひ切りまする二せの誓も諦めて此うへは譬こがれて死ぬまでもお呼申さぬ吾儕が心底。すこしは不便とおぼしめされ。何卒お慈悲お情けに。幸さんの御勘當。御免なされて。下さりませさすれば。幸さんもおのずから。お宿に心のおち付くは。知れてありますこれ是申トけいせばやめにしてぢがれあらはす五音のふく「アヽ傾城に實なしとは嘘偽りそもじのやうな眞實な。女子があてふしわびることばにふく太夫もるゆゑ身の破滅とはなりけり。是も矢張縁づくなれば。アヽ是非もない。ともにうきめを。見やさんせトはいふものゝ。まア始めて逢て。氣まじめに詫る。言語を聞分ぬ强情な爺じやト。腹も立ふがよく〳〵な。事トおもふて。堪忍さんせ。幸介は其方の客でも。有うけれど。最はや他人の拘り合なし。その心根の可愛サに。お客のあるを得心して。直に其方を見立て直し。初會馴染の床花も。恍惚た意き地ト懐中より紙入れとり出し金入の内みて　サアこれが今宵。馴染の印トきくの井が手にわたし盃事は此頃に。寛ッと來て心のうちをも咄しませう。アヽいろ〳〵な事で隙が入り。大きに手間がとれました卜立ながら幸介にむかひ　コレ手切れの一札得と見て。我身のうへを後悔せよ　下へ立出れば。きくの井はゆめにゆめ見るこゝちして。　さやせんかくやと心ならずも。まさしく幸介がおぢの事なればせめて見せまでも。　おくらんさあさにつきそへたちいづる　さん「アヽお氣の毒な事でござり

ますトいひつゝ立て。ふく太夫ともろと座敷に獨り幸介は。夢か現かうつせみの。もぬけしごとく髣髴もにまんドゆ屋の内を立出ぬと。おもひ寄ざる所にて。伯父に對面なすのみならず。アノ算六めが悪謀と推量せしも齟齬伯父の口から勘當と聞て驚く身の後悔「ア、儘よ今となつて。未練らしい事をいふたとて。一家親類も。口を添てくれもせまい。なま中に詫言せんよりは。菊の井が心底も。今一度聞たうへで。又能思案もあるべきぞトかくごをきはめ。手切れの一札見るもけつくおもひのたねと。それなりけりに差置て。あるはからひをおもひさつしてうれし涙だ悲しき泪と菊「モシ幸さん不慮事に。なりィしてさぞ當惑もなさりいせうが今伯父さんから下さんした此金も。まつたくぬしの身の上を。思ひなんしての。うへの事でおざりいせう。手切れの一札をも。篤と見てと。おいひなんしたことばの端。どうやら氣にもかゝりいす。まア何シと書ておざりいしたへ。お聞せなんし　幸「見るも結句。おもひの種だから。此儘開てもまだ見ねヘヨ　菊「今ト成ちやアもふまかたもおざりいせん。お案じなんすな此金でぬしの身の片付くやうに。どふともまア致しいせうはなト手切れの一札とり上げて。うは包みの紙を幸「押ひらきみれば二通の書付け幸にわたせばひらき何に〳〵

其方儀身持不行跡にて父病死の折柄抔も内に不居合且喪中の愁傷をも不顧彌々放蕩の始末諸親類の心底にも相背候間唯今勘當致し候處實正也此上渠等身分に付如何樣成引合有之候ともに

一家一門において取上げ不申候爲後日仍如件

トよみをハアこれも我から仕出せし罪。今更何に程後悔するとも。詮なき事トぐる〳〵卷てかたへにさし置今一つうをとり上げてひらき見るよりマア〳〵こりや是まさしく。其方の賣れた年季證文　菊「ヱ、なんといはまやんすびつくりして

ト顔さしよせて見るよりもうれし泪にむせびながらアノ伯父さんのいはまやんした。樣子あり氣なおことばも。まつたく是ゆゑ此證文ゆゑチヱイ冥加にあまる。お慈悲お情け　幸「さすれば。勘當の身ながらも。其方を連て。廓を立のき夫婦トなれとのお差圖か。ハ、アあり難き伯父の情け。又そのうへに兩人が身の落付きの助にもト恤み給はる五十兩。かた〳〵もつておろそかならず。斯とまらねばアノ算六めを。腹立紛れ打擲せしも。我生涯のあやまり。悪く推して仇敵のやうにおもふたも。今更おもへば面目ないかういふ事ト知ッたなら。何にしにあのやうな愛想盡し。悪口雜言いふべきぞ。まらぬ心の氣の毒せんばん。堪忍してくれ算六どの。伯父さま御免下さりませト蔭ながらもきくの井ももろともにひれふしまろび。ヱ、うれしうござんすトよろこび泪にむ兩手を合せおもはずまらずこへたかくせかへり兩人　暫し彷彿と。あんまり能過たはからひに。只あきれたるばかりなり。

作者鼻山人いふ。此の一回の物がたり止々の詰りを菊の井が夢となして。もつとも病中幸介が事のみおもひ煩ひ。二階座敷も手遠なれば。内證の隣り下座敷に移り。雛妓菊里が看病を受て。いろ〳〵愁れなるいひぐさを。誌さんトおもひしが。その趣向はなはだ古めかしく。先哲の小冊に似寄ば。夢とせずして菊の井が。苦界をのがれし目出度。物語とする事まかなり。

廓鑑餘興

花街壽々女中卷 終

廓鑑餘興

花街壽々女下卷

○浮世ばなし

箕山の巣許。首陽の夷齊。名利を避て雲水を樂しむ。金馬門の隱宅に。爰も類する茶人の住ゐ。表は建仁寺垣に萩を交て晒し竹の押縁。赤松丸太の。竹の子面を見せた。門の柱。黑部板と杉の皮を。化粧に見せて。茅葺の。むつくりと小棟に。鳥おどしを付けた屋根。杢よしの黑部と。姫子松を綾すぎに。矧付けた腰舞良の枝折戸。上は胡麻竹の。吹寄格子正面に虫喰の額をかけ。白字に念佛庵と誌せしは。天民和尙の筆跡なるべく。根府川の飛石傳ひ。三尺の踏ぬきは。見影石の縮緬敲き。黑緣に繁骨の障子。チョイと明れば三疊敷。五歩緣の疊。引ずり小手の砂壁。楠板の天井。一間二まいの襖は。銀泥にてむさし野の唐紙。樂燒の引手。是を開れば八疊の座敷。もつとも南向に。まはり椽側。紅かりんの床板。黑柿の落し懸。南天の柱。壹間の袋戸棚を見せて。如輪杢の鏡板。三福對の掛ものは。探幽が墨書に。爲村卿の書れし。秋の夕暮の歌。千德のうすばたに。葉蘭を活その次の間は。長四疊石爐に。唐木色付けの緣を見せ鐵土瓶をかけ壹間の所中敷居を入れて下が繁舞良の二枚戸眞中に錠前の付たヤツ上の半唐紙は文晁放一鴨

齋米芽等の先生達の書畫の張交その次に二尺の佛壇を補理これより勝手へ續く住み向なり食焚の三介を咄し相手として爐の際に蜀山人の書れし假名世說の本を見て居るは此家の主人紀國屋文右衞門が慣の果今は剃髮して。佛念坊といふ只管玉菊が。追善の爲とて。六字の名號書寫のあひだには、四方の瀧水に耳をすまし。獨吟の樂しみに。軒端近く音信。都鳥を友となし。浮世を詫て暮しける三介「モシ旦那さま。いつもの刻限になりましたが一杯めし上りますか佛念「ウヽけふは曇てゐるせへか。一しほ淋しいやうだ。なんぞ佳味ものをあんじて。こしらへさつせへな　三「うめへものといつた所が。例の通り豆婦一式精進ものじやァ。どふもあんじも。ございません　佛「笹の雪なら隨ぶん能の。些ばかり燗をまてくだせへ　三「かしこまりましたト勝手もたびしと三介口とりものをこしらへ。中平へ入レて八寸ンへ　サァ〳〵めしあがりませ　佛「これは奇妙〳〵サのせ。酒は眞中のかんでふしへ入れたまゝにてもちいだし　ァこんたモ爰へきて。一杯呑だり　三「あり難ふございます。丁ど腹の空た所へやるはホンニ命でござります　佛「下戸の人にやァ咄されねへが。惡くねへやつサの　三「そりやァハァ。いふまでも。ございませんト勝手の火の元よく消て口なめず　佛「平のふたをとつてかけた所があり難へ　三「笹の雪は當時流行で。ございますがあまり上品過て私しなざァ矢張藏前の。祇園がよろしうございますテ　佛「玉川やきのちサァ〳〵一ッ酌で下さい。むかしの婦より今のいろ氣なしも。中〳〵氣が張ねへでとんだ能、ヨト三介を相手に呑かける。三介も酒には目もなき男なれば。能旦那にあり付しとよろこびまい日酒をのむなたのし

しみにまめ〳〵しくつかへける　三「御緣といふものァ。おつなものでおめへさまが。此所へ。御引移りの時より私しもさんじまして此やうに毎日〳〵御酒を戴てかり。あんまり樂過たあり難さに。私しもへ、、、お念佛を。はじめました　佛「ハヽァそりやァ。奇ぞくな事だ。某もかねて貴さまにも咄す通り。こんなはかねへ暮しをする。身のうへでもなかつたが。風とまた張合から急に世事の。附會がいやになり。親から讓られた。大まへの金も貯て。居る氣がなければ骨を折て遣ひなくし。今じやァ見るかげもねへ此姿が。結句うき世を放れて。氣敢じだヨ　三「イヤまう何ニもかも。聞、およんで承知致しておりまする。死んで花實の咲たトいふはァノ玉菊の身のうへ。懺悔ばなしも佛の爲周り巡りて私しまで。おまへさまの御恩に。成まするトいふは。よく〳〵深い緣がな。ございませう。一躰私しはもと。谷中邊に居りまするとき。アノお玉めを。萬壽屋の内へ。沈めにかけたは。此三介それから。女ばうにも死に別れ。賣た金も。チイ〳〵ハイ〳〵となつて。今じやァ昔のてび編笠。ホンニ面目次第もございませんトおにの目に佛「ハテそりやァ始じめて聞て。膽が潰れるわへ。某もその時分もなみだぐむお玉ぼうが。身をあんじ。谷中の方へ引取れて。行たトいふ風評を聞て。毎日〳〵尋ねて見たれど。知れかねたが渠が不運だ　三「それからきァおまへさまの。入らッしやる事もうけ給はり。又玉菊が死んだ跡までも追善供養のとひ吊らひ。冥加に餘るお情けに。嘸や黃泉の下からもよ

ろこびまして成佛しませう。これをおもへば罪の深いは。私し獨り此うへは玉菊になりかはりて。何卒あなたに百歩一も。此御恩おくりをまたいものトおもひ付イたもむかしつくりし罪滅亡。それゆゑ押て此方らから。お願ひ申せし食焚奉公。おまへさまのお姿を見るに付けても。未來の程が思ひ遣られて。吾身のうへが面目なく。急にお念佛を申す氣に。なりましたのも此所へまゐりし。御えんのお蔭。これも誰ゆゑ矢張。アノ玉菊が死んだゆゑト。おもへば不便でござりますトなみだぼろ〳〵　佛「アヽ是も奇縁のみち引所か。おもへば和泉式部が歌にうまれ來て仇にはかなき世をまれと。歎へて飯る子は智識なりト。よめるとほり。吾々が爲に玉菊は。後世をみちびく善智識トさもに泪を　三「一躰アノ蓮見屋の玉藏夫婦も。腹からの町人と申のでも。ざりませず。譯あつて浪人の身となり。よん所なく忍ぶが岡へ。水茶屋の見せを出せし。折から幸ひと貰ひうけた。あのお玉が身のうへ。跡て樣子を能〳〵聞ば。實の親は古主なる御領分の百性の子。それゆゑとりわけ不便がり實の子のごとくにおもひて。育しかひもなく斗り玉藏夫婦が病死の後は。外に身よりの者もなく。仕方なしにまづ引取て見た所が。年頃といひ。標致はよし此奴生物知りに。ならぬうち。金と轉ぶが上分別と。持病の惡しんが胸にうかび。むごひめ見せたその罰で。今以て此やうに伶俜て。おりまするト身のざんげに去た人のうはさ咄しに。折角佳く呑だ酒をまづくした。サア〳〵爰を片付て貰をふ。そしてモ

ウ夜食の支度でも宜らうぜ　三「いかさまけふは。曇ておりますで。一向刻限がまれません。些とくらゐ早いは儘にして。お夜食と致しませうドリヤト立て酒の道具を片付ケ勝手へ出てちやがまの下をたき付る折から表のはいり口男のこゑにてチトお頼み申ます。ハイ御免下さりませ　佛「コリヤ三介。關の戸に誰やら。案内があるぞ　三「ヘヽかしこまりました何にあんないとはト立出てハイ〳〵〳〵トロ上たき〳〵佛念がいまにきたりてモシ〳〵旦那さまホンニ關の戸でござります。うつくしい小町姫を。連たをとこがおまへさまにお目に懸りたいト。おつまやる事ゆゑどなたさまで。ござりますト。うけ給はりましたら幸介さまトおつまやりました　佛「ハテ珍らしい人の女をつれてトは。どふやら譯も。ありそふな事だ直に此方へ。お通し申セ　三「かしこまりましたヘヽヽお客さまには。直に彼方へ。おとほりなされまし　幸「まからば御免下されトきくの非引蓮　佛「コレは幸さんお珍らしい　幸「まづその後は一別以來私しも。一寸お庵室へお尋ね申す所なれども。例のとほりの不性もの。何ニやかやに取紛ぎれて。つひ御無沙汰になりました　佛「コレハ〳〵些とも御如才には存じませぬ。いつも〳〵ごさかんの御やうすで。お目出たふござります。ときにお女中さんの。おつれがあるそふだ子。さア〳〵御遠慮なしに。此方へお這入なされましトさしきの方をチヤ玉章さんじやァねへか　菊「アイ瀧さん。お久しうござんす。ぬしァいつそのやうに。坊さんに。をなんなんしたへ　佛「イヤもふとつくの事サ。此やうな姿で。おめへ方にお目に懸るは。面目なけれどもこれもむかしの罪ほろぼしサ　菊「おいらん

の爲にかへ。おもひ切ッた事をなさりいしたねへトきのどくそふにいふ　佛「それはさうト幸さん玉章さんをトいひしがホイこれはまたり今じやァ菊の井さんだッけのマヅ引つれて。わざ〳〵此庵室へ。御來駕の有しは定めて込入ッたお咄しもござりやせう。併わつちが爰に。かうして居る事ァ廓のものも大概知ッて居れば。もしや梅川の。爲かや今はトいふ身じやァ。心遣へな事も。ありやすから些ともはやく。安堵のため。やうすを咄して聞せなせへ　幸「モシ憚りながら。その御心配はすこしもなしサ。落人の日影もの。追手の懸るやうな始末合なら。お尋ね申もまァ。御遠慮トいふ所なれど。そも〳〵より去程に。わつちが身のうへも。御存じの事なれば。又付にけりめでたし目出たしトいふ。能耳をもお聞せ申度。それゆゑ。夫婦づれの道行も。どふやら人里放れし梅若づかト。いふやうな事かト。おぼしめしたもむりではなし。竹馬の友の餘所ながら。鳥渡いとまごひといふ點も。よくあるやつなれば。お案じ下さる。御眞切仇おろそかにやァ。おもひません　佛「何にも俊寛の。おやすじやァねへが。安堵したトは能おもふてもごらうじませだ。菊の井さんも今じやァ急度した娼妓様。幸さんの事も段〳〵の不行狀から。今では愷か勘當の身のうへトカ風の便りや。人の噂さでうけ給はれば。アヽ夫も更〳〵むりではない。玉章さんの初めから。アノ眞實な仕うちでは幸さんも末始終零落なるはとつくに知れし御事ト旦暮おもつて居た所へ。おもひがけなきお二人連どふやら。新内の明ケがらす的切りといつァ

花街のうちをト察したも菊の井さんなんと無理でも。あるめへじやァねへか　菊「ホンニ主の風評も。お聞なんしたうへじやァ。さうおもひなんスもむりではおつせん　幸「わつちも去年。親仁が死去てから。そりやァ内が騷動サ。お袋は御存じの（以下原稿半枚脱丁）文身請のありしに疑ひなしト夫から急に思ひ立ッ。身拵へさへそこ〳〵に。降て湧たやうな事なれば。内中のものへも云譯して。心ばかりのおき宮筥。内證のいとまごひも。遣ひ果した身のうへに。とても曠ては。つれても出れず。茶屋モさすが。馴染だけ事。穩便にはからひて。ぬれた鼠のこそ〳〵ト。くるはを出ても未だ夢かト。たがひに。おもふ夢心おち付く。先の的なければ御無沙汰をもかへり見ず。お便り申て來た譯サ　佛「ハヽァさういふ。譯であるならば一トしほ。お目出たい。菊の井さんの身のうへ。幸さんも喩勘當うけたればとて。女ばうにまですりやァ男の名聞　幸「まァ苦勞をした。かひが有うトいふものサね　佛「大きにさうサ。アヽ何んにしてもめでたい〳〵コレ三介　三「ハイ〳〵なんでござります　佛「其方もそこから。聞たであらうが。おめでたいお兩人の身のうへ。はやく御酒でも上るがいゝ　三「ハイ〳〵私しも、さやう存じましたから。とりあへず有合のおさかなで。御酒をへヽ只今出します。所でございます　佛「チヽそれは能ッた。サァ〳〵はやく〳〵持て來るがいゝ　三「ヘヽヽかしこまりました酒となりまたばし

浮世の醉覺を。補なふ腹も笹の雪。つもりかねたる。さかづきのめぐるゑにしと。菊の井

も始めて。甦りたる心地しつ。ありし昔の噂して戀にはうき身を。寢すならひト。泥水の流れの身をも汲分て。ぢがねばなしに佛念も。三介がふしぎの。緣に引されて爰に仕へる物語なし夫に付け。是に付けても又。玉菊が事の胸にうかべば。呑酒さへも理におちて。

さすが凡夫の悲しさは。只幸介が身をうらやみ。獨りうき世をかこちけり

菊「おいらんの爲とて。瀧さんの是まで人に。功德をなさりいした事ァ。誰志らぬものァ。おざりいせん。おいらんの身にとつちやァ。大叮うれしくもありイせうが。死んでおしまひなんしちやァホンニ泪のたねで。おざりいすヨ　佛「さうサね。今さらいふも愚痴ながら。玉菊もあんまり。氣の短へ仕かたで。在たつけのう　菊「さうおいひなんすけれど。あの時又。おいらんの身に成ちやァ。おもひ迫た事にもなりイすのサ。ぬしが松田屋の。半部さんの所へお出なんしたのが。生涯の誤りで。おざりいした　佛「それも延壽が事から。起ッた譯で疑ぐるめへもんでもねへ　菊「ゑんじゆさんの事も。さうでおざりいす。心にもねへ事をあるやうに言て。お呼なんしたも。皆ナぬしをおもひなんしての。事でおざりいす。それを千万志つてお出なんして。腹をお立チなんしたのは。どふも瀧さんにもお似合なんせんのサ　佛「ハテそれも一ト通りの事なら。何ニしにあんな。手荒な。しうちをするものかね。彫ものを燒れたり地がねのやうな咄しを聞ちやァ。よもや嘘じやァ有めへト。十ぶん欺された心で。腹の立チやうが違ひやス　菊「そ

れがむりでおざりいすヨ。志んに恍惚てよび申すうへからにやァ。一圖におもつて居イすけれど。苦界の。身の悲しさには。馴染で來る客人も。おざりいすのサ。それも只一ト通りなら此方から。ぶあしらいで。手を切る事もありイすが。爲にでも成客人じやァ。何にかの都合に悪ふおざりいすから。つい取止て置氣にもなりイす。それ達ても眞に。ほれた客人トは。譯が違ひィすたとへ。彫ものを消ふが又別に彫ふが。そりやァホンノ。義理詰の手事と。いふもんでおざりいす。又馴染でお出なんす。うへじやァ。志んに恍惚たトほれねへのは。大概しうちでも。知れさうなもんで。おざりいすねへ　幸「どふしてそれが志れるものか。十ぶんほれられた氣で。居ると矢張それが嘘で。頓だ目に會ものヲ。めつたに心がゆるされるものか。女ばうにしたうへで。なけりやァ。女郎の誠ばつかりァ。しれやせん　菊「それが何にもかも。お疑ひなんす心からの。事でおざりいす。譬いやしい倡妓でも。人間でおざりいすものヲ色情の道ばかりは。素人もおんなし事で。おざりイす。只おか目から見るト。むせうに客人を。相手にするゆゑ。色男をより取にして。氣儘に色事を。するやうに。見えィすがそういふ譯じやァ。おざりいせんヨ。志んに。恍惚たトおもふ客人は。おつなもので。まづ持チものや何にやかゞ。いつそ意氣で一寸。おいひなんス事までも。口眞似をする氣になり。そしてその客人のうはさより外にやァ。致しイせんから。直にそれと朋輩衆にまで。さとられへすのサ。只一チ圖にどふ

ぞ呼とけて。見てへトおもふ心から。いろ〳〵な咒ひや願がけを致しィす。それも人に知られるト。笑れ草のたねで。おざりいすから。隱して鹽斷をまたり。病氣のつもりで斷食をまたり。獨りでいつそ氣を揉イすのサ。それをお出なんした時。云ふでもなく。又此事を咄そふか。あの事を云うかト。おもつた事も。お目に懸りイまたうれしさに。遂云殘して跡で。いつそ後悔し一チ日。鬱氣でおりイすのサ。又どふかいふ張合で。邪見な事などいはるゝ程。結句おもひが增て。一ト通りの客人とは。もの事が皆な裏腹にめへりイす。こんな事ァ客人の方じやァ。一向に氣もお付キなんせず。コレ手めへが口でばかり。恍惚たトいつても。安堵まねへから。そんならかうして見ろあァまて見ろト。無理難題をいひ懸られても。やつぱりそれが嬉しく。惑迷氣になりイして。慾も德も。おもいひせずおのずト外の客人が。不勤めになりいすから。そこで內證でも彼是と。遣り手衆までも。やかましく申イす譯ざんす　幸「それも。かうなつたうへで聞ば。どうやら最もらしいが。あつちの畑じやァ。どうも不安心だ　佛「菊の井さんのめへだが。およそ女郎買ほど。氣骨の折た。心遣へなものはねへにヨ。幸さんも苦勞人で。まァ遊びの方ぞやァ。五歩でも通りをくはねへお方だが。おつりきなもので。まァ十人が十人ながら。恍惚られた積で行はあたりめへ。そのうちにいろ〳〵。氣を引て見たり。いよ〳〵實の心かト。十ぶん試した。その上にも引手數多の客の中に。もしや不慮と。おもふゆゑ手の屆くたけはせんさくして。此方のいふなり次第に。なるをまァほれられたト。するより外に　目的といふものァ。少しもなしサ　幸「まァそんなものサね髮を切たり。人の目に懸らぬ所へ。彫ものをするやうな事ァ。ほんの義理詰の手ごとて。ねつからうれしくねへやつサ　菊「それでもまんに。ほれたとほれねへは。やうすでも知れへすはな　佛「そりやァまァさうでもありやせうバ。意氣地を磨く所ゆゑ客人の仕うちに據ちやァ。大きに心の動く事もありやす。兎角便りのうす い。行末の案じらるゝ身のう、へゆゑ。此方から眞實に。能世話をして遣りやァ。おのづから義理詰となつて。ほれたふりがいつか。實情にほれるやうになるは。人情のあたりめへだけれど。それまで買とげるのが。いたつて堅イ事サねトたがひに心のそこいなくむかしばなしに　はや春の日の永きも。入相の鐘なりけりや。おのが身の暮るをまらで。猶迷ふじんト。是より菊の井幸介は。佛念が庵室近き邊りへ。あらたに住居を補理。爰に引移りて。夫婦最むつましく暮しけるうち。又伯父のはからひにて繼母に。番頭の算六を付けて。幸介が住居に隱居させ。幸介夫婦は。本宅に至りて家名相續致すべしとの。差圖に隨ひ。測ずも。元の富貴に立皈れば。菊の井もその大恩に恥入て。おのれは召仕はれの。妾トなり兼て幸介と。いひ名付けありし。伯父の末娘を。呼むかへておもてむき。女ばうの弘めをなし家內いさゝかも。蝸牛の角の隔なく。いづれも。日出度月日を送りけるとぞ。此一回の奇偶物語を。何人か淨瑠璃に。あやつりて世に。お菊幸

介と。浮名の立チしは。是非なし
恥かしやつひ萬才に高笑ひ

まんじゅ屋うち　菊の井

廓鑑餘興　花街壽々女下卷　終

春色三題噺序

俳諧は守武宗鑑に起れど。蕉翁東武に杖を止めしより薪樵賤。汐扱む蜑も。いづれか俳を學ばざらん。爾れば俳話の三題てふも。可樂が往古に興るといへども。鱗堂のぬし再度此道を發し。春の屋ぬし一連を立られしより。雅となく俗となく。志らざるを恥とし。聞ざるを遺憾とす。此の人々の則にとて。春色三題噺と號。前に初集をものされしが。僥倖にして時にかなひ。次編を乞こと屢なれば。連衆に告て

稿を集め。予に校合を命ぜられしかど。書房が需急なる者から夫彼。かい改ん暇だになく。唯开が儘に梓となせば。必麁漏をとがめ給ふな

慶應元初夏稿

同二寅春發行

粹興兩連一個

弄月亭有人識

春色三題噺上之卷

東都　春迺家幾久輯

弄月亭有人校合

河竹其水作

花火　後家　峠茶屋

男「いかに通り一扁の駕だと云て餘りふて〳〵やつだ　女「最うよい加減になさいましョあんな者にかまッたとて仕方が有ません　男「夫達て峠迄と云ッて乘たのに先拂に錢を取て酒に醉て歩行ぬから下て呉ろと無法な云かたせめて問屋場まで連て往ッて拂た駕賃でも取かへさうと思ッたが何をいふにも先を急ぐから虫を殺し云たいことも云ずに來たがこんないま〳〵しい事はない女「あんな駕に乘よりもいッそ歩行方が氣が晴て宜でさりますヨ　男「平地なら宜けれど是から段々石高道首尾能峠が越ればいゝが　女「ナニ越ないと時は脊負て行わけにも行ずいッそ跡へかへッて泊らうか　女「跡へかへッて追手にでもつかまるとつまらないはヲ　男「夫もさうだな併五ッ迄には越やうから草臥たらうが急いで呉ねヘト手に手をとりて行男は年の頃廿七八越後紬の替り縞の小袖に茶幡多の帶御納戸眞岡の半合羽に小短き脇差を差紺の脚半に麻裏草履菅笠を肩にかけ新潟あたりの商人の息子と見えたり女は廿二三

と見ゆれど六か七なる中年増御召縮緬の藍縞の小袖に白縮緬のゆまき紺博多の男帶をくる〳〵と卷さつまの紺がすりの單物を上ッぱりにして白地の手拭を冠りかの八百八後家と名を呼新潟の仇ものかぬて此男と深き中にて終には互の身のつまりとなり信州善光寺に女のまるべが有て是を便ッて新潟から二人連で欠落なし椎谷柏崎の下海道より信州善光寺へ志し明神峠へかゝりしなり　女「モシ宗次さん大そう寒いおやァ有ませんか　男「モウ九月も末だのに里と違ッて山道ゆゑ夜に入ッては寒いはづだ　女「夫に暮て間もないのに何故今夜は闇のだヲ　男「たとへにもいふ廿日宵暗四ッからでなくては月が出ない　女「なんだか氣味のわるい所だが爰は何といふ所で有ますネ　男「爰は越後と信濃の境明神峠といふ所だがモウ半道か一里足らず峠さへうち越ば野尻といふ宿があるからそこへ往つて今夜は泊らう　女「そんなら爰が咄しに聞た明神峠でござりますかへ　男「此間飛脚がきられた處だ　女「ヱヽト女はびつくりなし只さへ怖旅の空人里放し山中ゆゑ心細さに木の根に爪づき轉ぶとウンとさし込む癪　女「アイタヽヽヽ　男「アヽあぶない怪我でもまやァまないか　女「イヽヱ怪我は仕ませぬがこわい〳〵で持病の癪がアイタヽヽ　男「癪がおこッたそいつは困ッたとだがひどく差込か　女「きつくも差込みませんが胸先できや〳〵いたします　男「ドレ己がチッと押て遣うマアこの上へ乘がいゝト笠とひとつに肩へかけし桐油を取て大地へ敷此上へ居らせて宗次は胸を押ながら　男「どうだお花此等が能い、か　女「アイ

モウ少ト下を押てお呉なさいまし　男「だいぶ水落が張てゐるなトさも親切に介抱なす宗次の顔を星あかりに見つめて志く〳〵泣出せば　男「コレ何を泣のだ　女「考へて見るとお前樣にお氣の毒でなりませんから　男「ナニ氣の毒とは何が氣の毒だ　女「何がと云て吾儕ゆゑ新潟の古町では加賀やといつては指折の荒物屋の息子さんこれが一の丁か二の丁の女郎衆でもあるとか高がわづかのつとめにて船頭衆や旅人衆へ枕をかわす八百八後家見るかげもない吾儕をつれ產れ古郷を跡になし夜道もいとはず此のやうに餘計なくらうをなさんすのがお氣の毒でなりませんもの　男「つまらねへことを云たものだ己も七ッの時からして江戸の店に奉公なし首尾能勤めて新潟へかへッて來たも去年の春人胞は越後へ埋たれども水道の水が體へまみそうだのんしが耳へ障り女房も多く進められたが江戸のものをば女房に持たくおもふ處へ友達と一ッぱい呑だ崩れからふつといつた其晩に素性を聞ば江戸生れ以前は名におふ吉原の玉屋のうちて二ッ星身の不仕合に越後まで下ッて來たゆゑ誰が附たか星下といふ心にておぬしがことを花火後家一晩揚たが縁となり毎晩〳〵揚詰に終には世間へ不義理が出來古郷に居るのも居られぬゆゑおぬしの伯母が善光寺にあると聞て夫を便りにどんなまがない暮しをまても二人居るのを樂しみに連て逃は逃たれど氣の毒なのはおぬしより己が方が氣の毒だ　女「それ程迄に吾儕をばおまへは思ッてお呉かへ　男「思はねへでどうするものか親兄弟を捨て來たのだ　女「まみ〳〵嬉しうござりますヨト惚た

男の信切に癪の痛さも打忘れすがり付て泣をりしもかすかに聞ゆる麓の鐘　男「ヲヽあの鐘はモウ五ッだこりやァ思ひの外遅くなつた少しよくば歩行て呉ンねへ　女「アイちつと快やうでございますト胸をおさへて立上れば宗次は桐油を笠へ結びお花が手を取木の根を除木の間をもるゝ星明りにたどり〳〵てやう〳〵に一二丁も來りしが又もや癪のさし込みに歩行かねるを介抱なし　男「また差込か　女「アイどうも差込でなりませんが此等に休む所は有ませんかネ　男「峠へ懸ッては休む所はない一軒家の茶屋までくるしからうが歩行て呉ねへ　女「その峠の茶屋迄はまだ餘程有ますかへ　男「ナニわづか二三丁だ　女「夫じやァどうかして歩行て行ませう　男「ナニ己にまつかりつかまつて來ねへトお花を小脇に抱ゆるやうに手を取ながら宗次郎はかすかに見ゆる峠茶屋の灯影を目當に門へ來て　男「ヤレ〳〵嬉しや茶屋迄來た　女「お湯を一ッ貰ッてお呉んなさい　男「ヲイ〳〵と言ながら椽ばなへ腰を懸　男「モシ御無心でございますがぬるくして湯を一ッぱいお呉なせへ亭主「コリヤァお客さまでござり升かだいぶ遅くお出なさいましたなトいふは立塲の亭主にて年の頃三十四五色の淺黒い男手織木綿の布子に夜具島の袖なし半天古き手拭を冠り居爐裏で火を焚てゐるを見て　男「暗には闇し足よわ連で大きにおそくなりました　亭「今水をさしましてチトおぬるうございますト盆の上へ茶をのせて出しながら　亭「これはお女中さまでございますか　男「峠へ懸ッて癪におこられてやう〳〵爰まで歩行て來ました　亭「夫は無御難

義でございましたらう　男「イヤモウ困りきりましたサァお花これを呑な　女「アイ有がたうございます　亭「イヤモウ平地は僅に山道も名代にわるい明神峠男と違ッてお女中さまでは駕でなくては越れませぬ　男「其駕も雇ッて來ましたがわるい奴に出ッくわし途中から歸へしました　亭「さやうでございましたか一躰お前さま方はどこへお出なさいますのでございます　男「信州の善光寺へお參りに行ますのサ　亭「そんなら松が崎か關山へお泊りなされば宜かつたに是から峠をお越なさるには四ッ半になりませう　男「跡へ泊れば宜かつたが何分追手の懸るのでト言を聞て亭主はうなづき　亭「成ほど若イ女中を連ての夜旅深くお聞申さずとも大概ゑれたお二人さまモシ後から尋ねてござッたら此方へお出のないやうに宜樣に云ませうから更ぬ内にちつとも疾く峠をお越なさいませ　男「何分お頼み申ますお花どうだちつとは宜か　女「どうも胸へさし込で歩行さうもございません　男「そいつは困ッたものだァ　亭「なんぞお藥のお持合せはございませんか　男「何にも是といふ藥もないが慥紙入の中に熊の膽があつた筈だお花先刻の風呂敷包みは　女「イヽヱ吾儕は知りませんヨ　男「ナニ知らない夫じやァ駕へ附た儘忘れて來たか知らん　女「ヱ夫ならアノ包を　男「藥斗りなら宜けれど路用の金を入れて置た　亭「夫りやァトンだ　男「後の立塲に呑でいたが未あすこに居ればよいが　亭「モシどんな駕屋でございました　男「四十ばかりで色の黑い小びんにはげのある男と三十四五で眼の大きい額に疵のある男サ　亭「夫りやァわるい

かごにのんなすつた兀松に疵虎といふ酒の上のわるい駕舁だ　男「名がきれたれば尙幸ひ一ッ走り往て來やう　女「お前是から行なさんすのか　男「路用もあれば此儘に打捨ては置れない些のうちだ待てゐてくれ　女「夫だといつて吾儕一人で　男「そりやァ心細からうが御亭主も爰に居ればあんまり切なくば押てゞも貰うがいゝモシ御亭主何率歸ッて來る迄おたのみ申ます　亭「ハイハイ畏りました自己がおせ話いたしませう　男「夫じやァお花一寸往て來るヨ　女「はやく歸ッて來てお呉なさいヨ　男「ナニ取かへしさへすりやァ直に歸つて來るト云ながら身支度なして出かくるを　亭「アヽモシお客樣一寸お待なされましトかたへに懸たる鐵砲を取り火繩へ居ろりの火をうつし　亭「此頃は熊が出て往來の者にかゝりますから鐵砲を持てゞざらッしやいまし是を半分進ませうと手繩を半分引切ッて火を移してさし出せば　男「夫りやァ御深切に忝ないが自己は鐵砲の打やうを存ぜねば持て往ても却ッて邪魔モシ熊に出逢たらいちもくさんに逃げまする亭「鐵砲が邪魔ならば火繩斗りでも持て往ッしやれ　男「夫じやァ用心に持て往ませうか　亭「左樣なされませ夫でも用心になります　男「何ぶん跡をたのみますぜ　亭「ハイきつかりお預り申シました　男「ドレ一走り往て來やうト火繩の火影をきるべになし足早に行旅人を見送り　亭「アヽモシお客さま舍木から左りの方は根ッ子だらけて道がわりいから右へ寄てゞざらッしやい後は案事さつしやるなきッかり預りましたイヤ早い足だな火繩の火あしは小半町ト言つゝ旅人へ筒先

むけねらひ定めて火ぶたを切りヅドンと打たる强藥地ひゝきなせし筒音に癪に苦しむ件の女起あがつて門を伺ひ　女「傳三さん手答へがあつたかへト言ば亭主は莞爾と笑み冠りし手拭取捨れば月代延し草束ね袖なし半天をぬぎながら　亭「火繩を目當にドッさりと覘ひはずざず打留たお熊路用は手前持て來たらうなト火繩を消て内へ這入ればお熊も上に引ばりし浴衣をぬいてぐるゝゝと卷たる帶の間より小風呂敷の包を出し　女「そこに如才があるものか帶の結びと思はせて腰のはきよりへ留て置たヨ　傳「四五日後に手紙が來たから今日か〳〵と一昨日から手前の來るのを待てゐたくま「はやく野郎を連出して來やうと法をかいたれど肝心のれこがないから其算段をさせるまで二三日來るのが遲くなつたヨ　傳「さうして路用は何程ある　女「思つたよりは少ないが二歩金で五十兩あるヨト紙入より取出せば　傳「六七十兩と思ッたが御時節柄で安かつたな女「傳三さん酒はあるかへ　傳「酒は一升買て置た　女「きびれ藥は御兎だヨ　傳「おきやァがれトびんぼう德利を火燭にかけ筒茶碗で呑ながら　傳「今も咄しの玉子酒きびれ藥ですでの事ころりと往生する所漸命は助かつたが毒氣が殘つて體がわるく湯治がてらに草津から鬼佛の善光寺後生半分旅かせぎやらずの傳次にすゝめられごまの灰の寐所にせう事なしの峨茶屋　女「此方もともにくすぶッて半年あまり居たけれどわづか四文や八文の茶代を取ちやァ湯水も呑ずどうでよごれた體ゆゑ八百八後家と姿をかへうぶな息子をだまし込み路用を當に連出して爰で殺した

其數も春から丁度七人目　亭「阿漕が浦じやァねへけれど度重なれば天の網退れぬ事も知りながら止られぬのが世のたとへ　女「國に盜賊家にまた鼠花火の花火後家盛りみぢかき身の上は薄花火の果は野に　傳「螢と俱に消て行そのきやうぜうも木の空か大黒花火の板附に首を並べる眉間尺　傳「めぐる因果は矢よりもはやい鐵砲花火の夫ッきり　女「誰も手向の水玉や　傳「線香花火の立人もなし　女「果報ねへ事と此やうに　傳「愚痴をいふのもこより花火の二人もよりが兩人「もどつたナアト行末越方物語折しも烈敷夜嵐に梢の音のドロ〳〵と小闇隅にあらはれし以前の男が語用の金取らんとなすに心づき　傳「ヤ我やァ先刻の旅人だナ　女「金がほしさに迷ッつ來たか男「ヱ、此金おのれに渡そうか　傳「ヱ、仇念深い野郎だナアト持たる德利投付れば姿は消て一箇の陰火ゑん〳〵ともへあがり車軸を流す俄雨　傳「間抜亡者め消やァがつたか　女「ヲヤ大そう降て來たじやァないかトいふ折門から駈込む旅人やつしの形に脚半草鞋笠の軍をふるひながら旅人「ァ、ひどい降でぐつすりになつた　傳「おめへは旅人かへヱ、びつくりした旅人「ハイ越後へ行旅人サ　女「わつちやァ又亡者かと思つた　旅「ヤさういふ聲はト居爐裏にもへ立焚火のあかりに三人顏を見合せて　傳「わりやァいつぞや甲州で流れもはやき早川を筏で逃た旅人か　旅「扨こそお熊に傳三郎　傳「死ッだと斗思ッたが　女「そんならこなたは死ずに居たか　旅「玉子酒の御馳走にあやうい命も毒消の御封と祖師の利益で助かり兄が越後に居るゆゑに夫を便ッて旅から旅

敵が爰に居やうとは知らず信濃の須坂から夜道をかけし明神越思はぬ雨に駈こんだ賴む小影の峠茶屋爰で斗らず出合たはうぬ等が運の月の輪のお熊傳三二人とも命は貰ッた覺悟しろ　傳「こいつはたまらぬト居爐裏の罐子うち返せばぱつと立たる灰神樂焚火は消てくらがりに是幸ひと逃行をやらじとさゝゆるだんまり模樣まばし互にいどみしが雨のぬかりに踏辷り二人は谷間へ落いつたり　旅「南無三二人は遙の谷へト岩へ片足踏かけて谷底きつと見こんだり爰が咄しの峠にて則二人が落でござります連中「株で落のない咄しかゑめりきつた花火を見るやうにいつでも中途で立消だそして趣向と題と別々で不取合な咄しだ作者「不取合な所が後家でござります

千手觀音　遣り手　酢の物

假名垣魯文　作

ある端女郎いつでも物まへにさし支へ內證へそう〳〵は借金も出來かね移り替に困じ果遣手になげいて相談すればやり手「ホンニ〳〵お前のやうに不働きの手のない女郎衆は珍らしいヨ。チト千手觀音さまでも信心して新手を出して客人を呼んで見なトなぶり半分異見され流石に恥てや是よりはむせうに客を勤めるうちいつしか懷妊して兎角酢の物ばかりを好むゆゑ扨はト遣り手が心付「おまへはどうも只ならぬ樣子だが定めし月が留ッたらうヲ女郎「アイどうも面目ないソざます　やりて「そして客人は誰方だか覺えが有う子女郎「イヽヱどうもト云たばかりうぢ〳〵と

して居るゆゑやりて「さッぱり覺えがないのかエ。コリヤア無理はない根が手のないお前だから
お腹のやゝ迄女郎「なんざますやり手「てゝなしと見えた

七草遊女梅　春の屋幾久作

或遊女「小松さんこの梅のぞきトいふ手拭はどこから來ました小松「アノ柳美さんがお呉なんした
「意氣な手拭ざます卿色のやうざんす　小松「草色と云なんすりやア。アノ今日は七日だから七草
粥を喰るもんだと柳美さんがお云なんしたから薺をとつて貰ッてお粥を煮インしたがちつと喰
てお見なんし「そりやア宜ざいませうまかし此お粥は吾儕より二ッすくないヲ小松「ナゼ「ハテ
吾儕らは七艸粥より二ッ多イ苦界の身でざんすはヲ小松「夫ならぬしと吾儕と二人あはすると十
八粥で有ンすにヨ引

入歯屋夢地獄　雪松園みさほ作

御天氣早尾といふ藥賣あり或日うつゝに青赤の二鬼冥府の迎ひなりとて來り速に引立飛がごと
く連行けり漸々にして城廓のごときものありて諸々の悪鬼鐵の棒などをたづさへ正面は定めて
閻魔なるべし早尾階下にちゞまりて命を聽くに閻王虎のほゆるごとき聲にて僞醫三寸の舌を以

て多くの人を誑すその罪舌獄に行ふべしといふ早尾法血して歎願していはく小人世に在とき人
の爲に齒の患ひを除き又入齒して老人も若き婦人に思はるゝなど皆人の爲なり願くは大王明鑑
なし給へと地に伏して願ひければ大王莞爾と笑ひ汝よく入齒をいたすや朕近頃はなしの流行ゆ
ゑか更に齒なしとなつたり汝速に朕が總入齒の細工せよとのことゆゑ早尾恐る〳〵王に近よ
り口中をうかゞひけるに黒髭モヂヤ〳〵として口中見えぬゆゑに指先にてかき廻しければグチ
ヤ〳〵として其臭氣いはんかたなし大王曰く汝よく齒磨の香あり朕が口中をなめろとの御意否
めば憂目に逢んと思ひベロリ〳〵と舐ければ忽ちその妻目を覺し馬鹿〳〵しい何をなさいます

梅見錦繪　小判鱗堂伴兄作

繪草紙屋の主人龜井戸へ梅見にゆき彼豐國老人の處へ立寄梅屋敷の生寫しを三枚つゞきに畫て
貰ひたしと注文いたしますと早速に請合ますゆゑ代は何ほどゝ聞ましたら外の品なら一枚十匁
三枚つゞきで貳百疋が通例でござりますが梅屋敷の景色では小判一枚いたゞかねばなりませぬ
「夫は又あんまり高料ではないか「イヱ梅やしきの事でございますから畫料倍でござります

春色三題噺上之巻　終

春色三題噺中之巻

獅子のお富　作

辻君　冬籠　色がある

さる町人の隱居でございますが本所邊の抱地所に隱居してをりますが寒を厭ひまして北窓は皆ふさぎ鴨居かくしの屏風を建廻して風の入ぬやうにいたし南うけにいたし十分に冬籠の手當をいたし炬燵に首ッ切這入て暖な暮しでございます次の間から女中「八百屋さんに何か御用がある」と被仰ましたが丁度只今參りました　隱「夫じやァ庭のひらきを明て爰の椽側へ來て貰ひたいチッと聞度事があるから女中「八百屋さんお庭の方へ廻ッてお呉な御隱居さんが何かお聞なされ度ことが有とサ。アノ子少しお耳が遠いから其つもりでお咄しをなさいまし　八百屋「ハイ〳〵　隱「サァこちらへ八百屋さん別の事でもないがお前の知ッて居なさるお吉といふ女中のことサ。あれは先年幼少時分に四五年も置いて遣ッた小女で有たが中絶して久しぶりでいづぞや藥湯の門で逢たが見わすれて仕舞て先から名乘て御近所にをりますの何のと言た其時所を聞て置たからいつぞやお前に聞たらばあの長屋なぞはお前の得意場ださうだ所で二三日以前人を頼んでよこして久敷煩らッて必と難澁いたして居ります此樣な義を申上られた譯ではござりませぬがどうか少

々拜借いたし度と言てよこしたがどんなざまでいるか實難澁といふ譯なら高は聞ないが少々の事なら合力してやり度あれが親仁といふものは悪い者であつたお前に樣子を聞たら知れやうと思ッて待てゐた八百屋「被仰通り親のわるいので辻君といふと人聞が宜が夜鷹でござりますは子久しく病氣でゐるので此節は首の廻らぬ程苦しいさうでござります　隱「えりの廻りに腫物でできましたか八百屋「此間も覗いて見りやァ辻番の炭團で目刺鰯をやいて居やした　隱「さうサ辻番の横丁で鹽物屋の裏だといふとだ八百屋「屋根なんぞも風から此方へ崩れて筈を揚たり莚を引ぱッたり膏藥だらけで凌イで居る樣子サ顏も天窓も其通りサ夫に鼻の落かゝッたのはやう〳〵直ッたが口もとがくされてこんな穴が明て居ます　隱「さうかへ口元に穴が明て居てはあぶねへ足でも突ッ込むと大怪我をする八百屋「夫には突込ンだあしが有のでござります　隱「能何ともなかつたの八百屋「夫は近所のやしきの部屋の者だといふとだが草履や草鞋をせい〳〵云て作ッたのを皆なあの女に運ンだといふ噂サ　隱「そんなに草鞋やざうりをはく程あの女に足はねへ筈だ八百屋「隱居さんはわからねへからいけねへ若しあしといふのは色があるといふとでござります隱「ハヽァ足といふのは色の事かエ自己は大きに履ちがへた

隱居　引眉毛　力持

三ッ柏狐遊　作

ある酒店の車力大力にて力持の番附にはいつも大關か關脇三とは下らぬ男山鯨を好みいつとなく眉毛が薄くなり店にて否がられるゆゑ姉の所へ參り毎朝引眉毛をして貰ひますが四五日急がしく姉のかたへ參らぬ故姉が案事文をよこせしが文字がわかりかね隣の隱居に讀で貰ひ　隱「一筆示しそうろうあまり御遠く〳〵敷いかゞと存じ今日人さし上申候車力せゝらわらひ「ナニ大そうらしい自己ア七十貫目の石さへさし上た

月あかり　其日暮　金箱　功阿彌作

堂前邊に親子三人にて少々の手仕事をいたしその日〳〵を暮す者ありしが以前は何某といふ鎗一筋の主若氣の至りに女ゆゑ墨染衣の姿となりしが故あつて再度俗に立戻りしが女の思ひとやらで斯貧しく暮しける此娘器量十人並に勝れ縫針は勿論女一ト通りの事人に勝れ夜に入ると壁の破れより月あかりにて本をよみ孝女とか賢女とかにて色〳〵云寄者もあれど一向取あはず近邊の若イ者二三人「アヽいふ金箱を持ながら不自由するのも心がらだ以前は鎗一筋の主だといふから何か望が有のだらう娘のことを金箱といふと腹を立てヨ「あすこの鴨居に懸てある鎗の身は正宗だとヨ捨賣にしても百兩にはなるのを其儘置くらゐだから娘のことを金箱といへば腹を立笘ヨト三人の咄しを女房湯より戻りがけに聞付正宗を百兩に賣ば娘が出世の爲にも成うと早々

宅へ戻り幸ひ亭主も留守鎗をはづし鞘をぬき見れば正宗にはあらで鯨身なりふしぎに思ひなめて見れど鯨身に相違なく扨はいつの間にか鯨身と取替りしとならんと思ふうち女房俄に腹が痛み娘もいろ〳〵介抱すれどもます〳〵痛みその内亭主も戻り近所の醫者に見せれば醫「是は何か物當りと見えます女房「何も頂きはいたしませぬ醫「聊の物でも當るものがござる何かお心當りはござらぬか女房亭主のまへ言にくゝ小聲にて「先程鎗のくじら身をなめました醫「ハヽアさやうなら一森の茶をせんじてあがれ

賢人　土瓶　川　醉旦訪作

富家の子息律義の人にて家業第一に稼ぎ日々帳合算用の外何にてもせず遊里は勿論芝居花見などせしと一度もなし親心の習ひにて若勞症とかいふ病ひ出てはわるし折々は仲の丁の梅見品川泊りの大師參りもするがいゝト異見しければ倅聞て「親仁さまもけがらはしきことを仰せらるゝものかなと前なる川にて耳を洗ひ居りければ隣の息子來り何をなさると問ゆゑ右の次第を語ると隣の倅いそぎ土瓶を持來りて下流を汲とるゆゑ「何をなさる「せんじて親仁にのませます

庭作　酒盛　御加增　古鳥羽南麻呂　作

ある武家年頃の忠勤によつて御加増被仰付あらたに屋敷を買普請もとゝのひたれば職人どもへ御酒を下され庭作りは御庭にて御酒をいたゞきて居たりしを殿様にはお透見遊ばし御近習に此中ではどの者が酒は達者である　近「ヘイ尋ねますでござりませう是〳〵植木や手前達の仲間ではどの者が酒はつよい「ヘイ此吉藏と申者がつようございます　吉「どうして〳〵私よりやア此松の木が酒は達者でござります　近「夫はなぜ　吉「わたくしは呑とぢきに赤くなりますが松は呑ば呑ほど青くなります

大名猪牙舟　春の雪

福阿彌扇夫　作

あるお大名御近臣の内心きゝたる者を召され人の上に立つものは下々の辛苦をもぞんぜねばならぬ夫ゆゑ鷹野などにも出るとじやが身はまた人の思ひやりの出るやうに廓通ひを致さうとおもふ去ながらその往古誰殿の行れたやうに派手にいたしては相ならぬ其方一人を召連山谷通ひトやら申彼猪牙舟で參らうと内々御相談取極めお忍びにて松の太夫がもとへ夜毎お通ひの處かの太夫大守をつれなくもてなしければある時御家人御君邊に人なき折例の松どの最はや君にも昨晩にて引つゞき七度もお通ひ遊ばすにつれなくいたしまするは心外千万まだ外〳〵に太夫もでざればト申上げるに大守其方が申と埋ながら松にかゝッて參れば七度ふつたなどと申せば春の雪のやうじやから此上とても打捨おけつれなく致しても矢はり參らうはゝゝゝば又なぜでございます春の雪じやから降うちには解るであらう

夜櫻　宿なし　飛脚

樂阿彌　作

或人飛脚をつれて夕方より吉原へ夜櫻を見に行しに遠國者ゆゑ肝を潰してゐるうち仲の丁へおいらんが出て來るを見て「モシあの中にお前のおなじみがありますかト聞ばつれの人「イヤ〳〵自己は中〳〵あんなのは買ぬ自己のは宿なしさト聞て飛「きたない宿なしを抱て寢なさるのか「イヤサ部屋のない女郎のとを宿なしといふはサ飛「自己はまた乞食のとかとおもひましたト段〳〵見物するうち追々に仲の丁のおいらんが出て來るを見て飛「モシ大さうに出て來ましたが何をするのでござります「あれは道中をするのサ飛「ハテ感心な自己には駒下駄では道中は出來ぬ

粂仙人　東西南北　白粉

全亭愚生　作

御藏前を四五人連のうち娘二人先に立お德さんおまへの白粉は能つきましたね〳〵湯にはいらないと吾儕のはむらになつていけませんヨ「ナニ能白粉がのりましたヨお前さんのは何處の白粉

でござりますエ「ハイ家橘香でござります「チヤ吾儕も矢ッ張家橘香でございますそして襟へは村田のをつけますヨ「さうでございますかお天氣もよしはやく參らうと存じますと猶道が遲いやうでござります「左樣サぬへ夫に小團次の粂の仙人がよいと申ますから早く見たうございます「吾儕は粂の仙人より市村の娘が見たうございます「おつるさん棧敷は東でございますか母「イヽエ東はとれないから西の下をとると云ッて來ました「樂屋へは西の方が宜ございます子へ「左樣さモシ伯父さんアノ中乘は誰がはじめたのでございますエ伯父「さうヨあれは鶴屋南北がかいた小幡小平次といふ狂言で尾上松錄が元祖だといふとだ「アレサおだまりヨ咄しをするとはやく歩行ないから「それでもッイ聞たいものを「アレサ東西〳〵

鉢植の梅　おかめ　堪忍の額　難波さん京作

日本橋邊に名だかき大家追々日の登る程御繁昌にて年々おかめの面をお求めなされお座敷はおかめの面を所せき迄置ならべ殊の外のおよろこび所々お出入の植木屋より梅の鉢植福壽草をとり交歳暮のおるしに持參りしがその花おびたゞしく滿花なし匂ひ薫々として得も言れず其時上にかけてあるおかめの面大きに腹を立ゆゑかた〳〵のおかめ制しておまへはなぜ其樣に腹を立のじや「さればとよあまりに梅のかほりが烈しいので猶々わたしの鼻がひくゝなるやうな心持でそれゆゑ腹が立ますはエ「なる程それも尤じやがこれ額も堪忍といふがおるしてあるさればものゝ毎おたがひの鼻同やうに内端なほうがよいといふた

氷人石　橘　附會　鈍阿彌文福作

たづぬる方「トキニ先生湯島天神の境内に氷人石と書てある石が建てあるがあれはどういふ譯であらうをしへる方「あれは昔日本武の尊が東夷征伐の時橘姫といふ后が湯島の臺迄送ッて來て彼所で別れた處が尊の御跡を見送ッて極寒の時分一日一晩立すくんで居られたゆゑとう〳〵體だ氷ッて仕舞果は石になつたのサそこで氷人石と號けたものサ　たづぬる方「ハテ夫は解せぬへお咄しだ人が氷ッたは有さうなとだが氷が石になつたのはどういふものだらうをしゆる方「ナニサ氷も石になる理がある水晶を見なせへもとは水だ

東鑑　家主　初午　いく女作

初午の大行燈にある朝比奈の畫を見て「コノ朝比奈は鎌倉の人だの「さうヨ鎌倉に朝比奈の切通しといふ所がある「あれは朝比奈が力にまかせて拵たともいひ又一説には朝比奈のやしき跡だともいふがどれが本とうだらう「さればそれは自己も知らぬが其樣なとは東鑑といふ本をみ

れば知れる斯いふ六かしい本は大屋さまにある筈だ「ヲヽそんなら子供や冬のやか愚生の所へ往て借て來い夫より子僧やがて大屋様へ參り子僧「モシ大屋様あづま鑑をかして下さい大や「あづま鑑といふのは義盛や朝比奈がある本だ何にしなさる子僧「おほかた髭でもぬくのであらう

初暦　湯屋　藝者　菊の屋柳美　作

湯あがりの肩にもうつる梅の花ト申まして名にしおふ所は柳橋邊でござります柳湯と申湯屋がござります正月松の内の事でござります男湯女湯ともに込合ます中にお酌人二人ばかり名はお幸お竹　幸「お竹さんおめで度　竹「ヲヤお幸ちやんお目出度ト互に一禮をのべ「トキニ此間隣の裏から弘めをして出たお初とかいふ子ね「ア、あの子は大そう大きな顔つきをして居るね「そうさねヘァノ子は暦やさんに色があるとサどうりで天上といふ顔をしてゐるヨその癖に寅の日の毘沙門天のやうな顔色をして夫でおまけに巳持だとサトいふうしろに件の初女聞て居るゆゑ大きに腹を立「おまはん達やァなんぼ吾儕が鬼宿がよいといつていゝかげんに馬鹿におし此方にも庚申さまがついてゐるヨ「ナンノ八十八夜のくせに　初「わたしは八專不足だがヲお前達は廿六夜もたゝない癖にト三人云あらそひますゆゑ番頭「先々おまづかになさい初春早々からなんのとでござります先々お靜に〳〵モシおかみさんお這入なせヘナニぬぐ所がねヘエいくらも明

の方がありまさァサァ〳〵どなたもきもんの御用心〳〵

山開　舟人　不二の山　興阿彌有人　作

吉田屋峰次郎といへる者深川の朝歸りに小舟に乘て永代橋の下迄來たりしに身投と見えて年の頃十七八の仇娘南無とばかりに飛込しが夫と見るより　峰次郎「ヲイ八公身なげだ助けて呉ねヘ八「ヘイとばかりに舟を寄せたちまち夫へ引あげて見れば顔よき娘にて今飛入りしばかりと見え身うちにつゝがもあらざれど死なでかなはぬ義理ゆゑに殺して呉よと數回いふを此方は制しとゞめ　峰「どういふわけか一ト通り聞ての上に死たくば殺しもまやうし相談が屆くわけなら及ずながら是れがホンノ乘かけた舟何所迄もお力になりませうト世に頼母しき峰次郎が言葉にほだされ一伍一什を物語る　峰「夫じやァ繼母が邪見で人の世話になれといふのがつらさに夫で身を投うと云なさるのか夫なら何にも子細はねヘ自己がどのやうにも掛合て進ぜやう夫にしても八公何所ぞへまばらく此娘を預けにやァいくめへか　八「さやうサねヘトしばし考へでござります〳〵横矢倉に矢口屋といふ宅がござりますがでもなります　峰「夫じやァ一番はたらいて呉ねヘト夫より件の矢口屋へいたりまか〳〵なりと物語れば彼親仁大に喜び娘を起してまか〳〵と荒增はなせばうなづきて奥の座敷を片付て待間

程なく峯次郎件の娘を伴ひて座敷に通れば此家の娘峯次郎をフッと見て田舍げんじの光氏でも業平さんでも是ほどではあるまひとまばし見とれて居たりしが夫よりおのれは勝手へ來り釜の下を焚附ながら「ホンニまァ能男もあれば有もの夫にしても連のお女中御兄弟ならよけれども御夫婦なら何とせうと　娘　心の一筋に案事煩ふ折こそあれ親父は勝手へ出來り出刄庖丁を磨あるゆゑ　娘「おとッさんどうなさるのだ」此時親父は小聲になり「今奥のお客が御祝儀を下すッたがちらりと見た金入におよそ二歩金で四五十兩ある所にはある物夫故今からあいつをばらして金をとるのだト聞て娘はおどろきしがさあらぬ躰に返回して其儘直に奥に入り父が巧みを峯次郎に語り裏口より逃せしに斯とも知らず件の親父踏込來りて「コリヤ娘あのお客をなぜ逃したありやァ吉田屋峯次郎といふ大金持吉峯とまつて泊たのも深いたくみのあるとだ遠くは行まひ追かけてと裏口へ駈出んとするを娘のお舟は足にすがり　舟「コレとゝさん欲をまらぬものはなけれどもお前のやうに張つめて人はこけやうが倒りやうが自己さへよければといふやうな强欲非道が又ひとり世にあるものかと搔くどきしが邪魔するなと爭ふうち出刄庖丁を取落しとらんとなせし其はづみにッィあやまちて彼親仁が左りのあばらへ突たつれば「ヤァ親し〳〵トいふにおどろくあたりの船頭新棒ちぎりをたづさへて出來るまゝに娘のお舟クワッとばかりに取逆上その儘表へ駈出こがそれ逃すなト數多の船頭追かけ來れば其儘に彼永代寺に逃込みしが此日は彌生の十

八日山びらきの事なれば知るもまらぬもさわぎ立追來るゆゑに境内の富士のうへにあがりたれば人々「ヤァお舟はどうしたらう」「ヤァ富士のうへに居らァハヽァわかつた餘り船頭が多いのでお舟を山へあげた

上野の清水　繪馬賣　蛇の目傘　惠齋芳幾作

「おゑゝ馬〳〵荒神樣のお繪馬〳〵ヤレ〳〵けふのやうに能賣れたことはない赤の繪馬が額になつた是も信心する大師さまのおかげドレ〳〵御遷座へおまゐり申さうとかの繪馬賣上野へ行たる所をりしも櫻の盛にて花見の人のおびたゞしくしばし清水の舞臺から梢の花を見てゐると黑の小袖に紫の鉢巻柾の下駄を履て蛇の目の傘をさし「春霞たてやいづこみよし野とうなりながら來るを見ればとんたりやの助六ゆゑ「コリヤ助六さん今來なすつたか「誰かと思ッたら額屋の万公かこんな形をして面目ない「見れは大ぶ御機嫌だが助六さんその鉢巻は」「この鉢巻は今しがた白酒賣の新公に逢たら不斷やり人だから一ッぺいやれ〳〵と朝顔茶碗を出した故こんな大きな物じやァいけないト一寸と意休で髭を出しナニ呑ねへとがある者かト一ッぺいつがれたからぐッとやつたらモウ一ッぺいやれ〳〵モウ一ッぺいやれ〳〵と無理なことを云やァがるから此方もくわんへら肝氣にさわッてナニ呑日にやァ一ッぺいはおろか千べいでもやるトな

らび女郎のなみ〳〵うけて七八へいあをッたらすッかり酔て大頭痛そこでこの鉢巻さト云ながらグロ〳〵と小間物見世を出しヱヽ先刻喰ッた白玉汁粉が胸へさわつたのだ株でおめへは酔とくだらねへとをまき出すから皆ンながお前のとをあげ巻の助六といふぜ「イヤあげ巻の助六がありがてへ「そしてお前は吉原の外へは出ない人だのに「所が今年は假宅で吉原に櫻がないからそこで上野へ出懸て來たのだ「夫ても上野へ助六はあんまり縁がないじやァないか「ナニない事があるものか清水の舞臺の上に山王山の孔子先爰が上野の山口三浦とまたうなり出すを聞て「モシおめへのうなるのは江戸節かへ「ナニ自己がのは蛇の目傘ヨ「蛇の目傘とは「何東だといふとヨ「なる程お前は能こじつける人だとてものとにいつもの太平樂が聞たいノ「聞たくは言ッて聞さう遠くは八王子のヱヽ炭焼親仁ヱヽ近くはヱヽ山谷のヱヽ間をさつぱり忘れたから清水の舞臺だけ先の方へ飛でやらうはけ先の間から覗いて見ろヱヽなんだかわすれて仕舞た「コウあんまりひどい絶句じやァないか「ヱヽやかましいだまッていろと一朱ひとつ出して遣りければ「モシ此金はヱ「安房と上總が浮畫に見えるお臺場だ「夫じやァ是を呉なさるのかへ「さうヨあんまり自己が絶句したから「どうまました「額やへ蕎麥を買ふのだ

春色三題斷中之卷　終

春色三題斷下之卷

花見　達摩　油さし

柳亭種彦作

「中見世の達摩の手遊び大あくびをして「アノ大勢出かけた向島の櫻も盛であらうチト花見にでも出懸たいものだが此通り目玉はなし腰はたゝず耳さへ附て呉ないから花も見えず三絃の音を聞さへならずトこぼして居れば隣にゐるみゝづくが「自己は眼もあり耳もあればどうぞ花見がまたいものだ和尚も口と鼻はいかめしく附てあるから麝香の匂ひでも嗅いだり美味ものは喰次第二人とも腰拔なればァノ手遊やの代八車に乘て裸人形に引かせて出かけやうではあるまいか夫は宜らうと相談やッと極り達摩とみゝづくが車に乘ると車はちいさしおきあがり小法師は重しひく子僧はよはしいくら引てもギチ〳〵とばかり言て車はうごかずそちこちするうちにもはや薄くらくなり亭主が行燈を出してあかりを附やうとすると裸人形「モシ旦那さん爰へも油をさして下さいまし

菖蒲ゝ慢陀羅　土用干

露の屋梅我作

本町邊の御隠居さまでござりましたが向島お住居でござりまして「コレ増や彼岸の心ざしをせねばならぬからいつもの通り買物を仕にやんな　女「かしこまりましたといふ處へ本宅よりの使「今日は御機嫌よろしう昨日仰せ付られました日蓮さまのお掛ものは虫が喰てをりますから日朝さまのを持て參れと若旦那様が左様御仰ました　曙「ナニ虫がついたアノ掛ものは大切の品夫に毎年土用干もするし虫除の菖蒲も入れて置のに餘ッ程喰たのか「イヽヱところ慢陀羅

思案　腥々　一生奉公

故人　梅廼屋翁作

或御大名でござりますが殊の外御大酒で夫ゆゑ酒器もお好で品々ござりますが此御本家様に探幽下畫の蒔繪の七人腥々の七合入の大盃を古く御所持でこざりましていつもお客の節は御納盃に夫でめしあがることで其時々予も斯いふ盃をほしいと思召ますが御意に叶ひましたのがござりませんが風圖思召つかれた御本家のお盃を拜借遊ばされてその儘に繪を本挽丁に移させ幸この程長崎の御奉行にお手つゞきがあるので龜山の釜元へ別段薄手に仰付られ陶で見事に出來いたし至つて御意に叶ひ御秘藏になさッて入ッしやいます爰に此おやしきのお側女中にさよと申スのがござりますが幼少から上ッてをりましたが中度縁付ました所が持まへの大酒で

似たもの夫婦とやらで兩人して身代を呑潰し小兒もこざりませんゆゑ世帶をおもひ切て離縁いたして御一生を申上度と願いまして再勤いたしてをりますが奉公なれては居ます年増ではありも不束はこざりませんがある時　殿「さよ例の盃でなみ〳〵うけいト被仰て下すッたのを御請をいたして大盃を取あげましたが思はず手がはづれて取おとし細に碎はいたしませんがホックリと底がとれましてハット仰天し殿の御機嫌をはかりかねて傍輩の者も顔を見合せ只恐伏してをります不興至極でさよも御前にをられませんから早々引下り蟄して差ひかへをりますと兩三日たつて奥様より殿様へお願ひ遊ばすにはさよ事御愛器を損じました不調法の段は恐れ入りましてこざりますが盃の御下繪もお手元にこざりませうから今一度長崎へ仰つかはされ御出來になりますやうさよ事幾重にも御免被成下て是迄の通りめし仕るゝやうにとの御託ごとでこざりました　殿「二三日取紛て心づかなんだが陶器の事ではありあれが損じさせんでもいつか碎ける時節もある何も咎を申付たといふではなし早々出勤させいト有がたい御意でこせうなく勤てをりました其後何とも御意はこざりませんがさよもお氣の毒に存ます心からある日申上ますには「先達ての不調法は恐れ入りましてはこざりますが夫につきまして私伯父に寛哉と申す卷繪師がこざりますが茶器などの損じましたをつくろひますが至つて功者じやと申スとでこざります先達て損じましたお盃をつくろはせ此度仰せつかはされたのが御出來まで御用ひになります

るやうに申付度ございますとねがひますと　殿「ウヽ、寛哉かかねて印籠などで名前は承知いたしをる頗る良工の聞えあるものじやそちが内縁もあると申せば幸ひのとじや早速頼みつかはせとの事でこの趣きをさよより自分の麁想の事をくはしく文にしたゝめ頼みつかはしましたゆゑ寛哉も打おかず直につくろひにかゝり出來あがりましたが爰が寛哉の老功な所で見た處では能様じやが酒を盛て見ねば用立か用だゝぬか分らぬと申て酒を入れまして盃のふちへ兩手をかけて取あげますと七合の酒の重みでホツくりと底が抜てしまいました是ではいかぬとさま〳〵に思案を更て取つけて見ますが持保のない所ゆゑ幾度も同様であぐみ果て工夫を凝しをりますとある時殿おもい出し遊ばして「さよ先日申付た盃の繕ひモウ出來たで有う聞に遣はしたかト仰せられますからさよ「その義でございます伯父が申上ますには幾度も取つけて見ますが見ました處では能うございますがお銚子を盛ますると持保がございませんからポツくりと底がとれますのではほとんど當惑致し居まする夫故延引て居と申て參りました　殿「ハヽア夫ではいくらついでやつても底抜か其筈だ七人猩々だものを

初嵐　老木の松　摺もの筋

岡本屋大幸作

世に葉守の神といふあつて雨露霜雪を降し草木萬花をつかさどりて其功莫大なり爰にある所に

老木の松ありあるとしの夏菊の花來りて「わたしが情合をした筋にてさる所にて摺物を拵へる其譯はさる所の關の口の園にかほよ花がある夫に櫻の花がことの外のぼせて通ふ此櫻には糸櫻といふ女房もありよろしからぬことゆゑ此間手をきらせた扨向ふの手の切れた故わたしがちよいとつまんだ處が又此頃はもとの花がかよふとの噂夫を花の身かたの人が摺物にして拵らへるといふはさまだ彫最中のよし其圖はわたしと花と首引をして居る繪が屏風に張ッてあるとその屏風の蔭から腕が出て居てその腕に八十命と彫てあるを八の字に丸を筆が出て書十の字に一點をくはへて千の字になつた所其返答の摺物に女房の糸櫻が欠出して林の檜の木が眞赤におこッて來た所そばにかのかほよ花が菊の花を手に提て立て居る姿これは薄墨でモウロウと見せ度から世話をして書せて下さいもつとも大いそぎと足元から鳥の立やうなこと老木の松はたのまれてあちこち歩行て漸やく出來た處が先の首引の摺物は色ざしの間違ひにてまだ出來ぬうちから此摺物が出たといふ噂ゆゑ松が手柄と思ひしがよく〳〵跡でおもへば是は春の葉守の□が梅に仰せ付られたよし定めし自己のまねことがきれたら春の葉守の神の自己を憎ませ給ふなるべしと案じ暮しいるに菊はそれぎり便りもなく又黛の花に通ふよしァ、若イ衆は立派やかな色ごとをする自己も摺物でもこしらへられるやうな色ごとがきたいが何を云にも老木の松。葉はおちる。腰はかゞむ。杖はつくしみどり子の孫もありて色ごとの花はなけれど万一世にはとしま

の好な花もあらうかと柳橋の柳の元に至り何ぞ相應なものはないかといふと有といふゆゑ聞にぼけの花はぼけているほどの年寄若イのといへばそんなら鬼灯の花是はあどけな過るあとは糸瓜の花や南瓜の花で埒あかず柳のなぶりものになりて歸れば物好もあればあるもの此松の根から蔦が生て青々とした姿でこの松にからみつき段々色濃染るやうす是では何所からぞ摺物筋がありそうなものと思ひゐる所へ淺草よりと封じて來た摺物が來たゆゑ扨はトよろこび袋を扳て明て見れば眞中にかほよ花が盛は過ておぼみかゝつてゐると左右には花は糸櫻とさもむつましく菊は又若木の櫻とむつましく語り大勘定といふありさま上に狂歌あり。野の花のかほよは時のひとさかり菊も櫻もものとのお手いけトありこれはむかしの事ゆゑ分らず標題を見たらおれやうと袋を取上見れば「初嵐とあり「ハ、ァ分ッた初あらしとは急に來た秋風のつよいのだ

芥子坊主　不二の山　厚氷

福阿彌正三作

チイ此芥子坊主の中に芥子種がどのくらゐあるだらう「馬鹿ナ人だぜその中の實の數が上から知れるものか先細なものを芥子のやうだといふではないか「そういゝなさんな何ぼ芥子が細いと云ッて段々寄せていけば一升とも一斗とも一石とも十石とも百石ともなりやすだによつて古人もちり積ッて山と云ッたではないか「これサ〳〵おめへもどういふものだ夫しきのことを利

屈らしく氣を張つめて云なさるのはあんまり薄べらではねへか「イヤ〳〵さうではねへ薄ッぺらだといへばちよつとしたものゝ道理が嚴寒の氷を見なせへ段々に張つめて來るとたゝいてもこわれねへが是も時候と日の恩で解ではないか「夫だに依て誰やらの句にも日の恩や忽ちくだく厚氷などゝいそがしい中で吟じやした是から物の利づめを考へて高きに昇るもひくきよりとやら自己がやうなものでも心がけ次第で不二の山ほど金を溜て見せるは「イヤ〳〵そんなに溜ても入用はあるめへ「何故ェ「それでもあの峰のとをふやうといふではねへか

顔見世　嘘つき　幇間

綾阿彌岸雄作

たいこ「旦那昨夜は顔見世で三丁町へまいりました役者作者の宅は素より太夫元へもまいりましたがモシおつなことを致します子先一丁目へ參りますと來たほどの人々に角切り角に銀杏の葉を敷てぎんなんの燒たのをモシ舞鶴やの親方がはしで出しました夫から二丁目の座元では丸盆の上にかの雲州の　橘がうづ高く有たをこれをもし紀の國や親方が出したは妙でござります子旦「夫から三丁目はどうだ「參りましたが川原崎なら四角な盆を二枚筋違に重ねて出すといふ趣向もでざりませうが森田座ゆゑに矢ッ張丸盆にト少しさしつかへて　旦「フウ　そこで何をのせて有やした子「ェ、何サァノなに「何とはェ、みみかんを二ッ「フム矢ッ張みかんかそして夫

は誰が出した「ヱヽこれもきの國やの田のさんが大勢の中へまきました　旦「夫はなぜ「表の人がまけ〳〵ひろへ　旦「ム「おウ竹〳〵と云ました

餅つき　蹴鞠　禿　　山衣細道作

頃も極月廿日餘りの夕まぐれ心そまぬとありて轉寢なせし客をゆすぶりおこし　禿「モシ大夫さんが此所へ今ちよつと忍んでお出じや程に目を覺してお出なはいましト云間程なく太夫の夕霧だと思へば夕霧節季師走そなたのやうに隙ではないァノこゝな蹴鞠契情　客「誰　夕「ナニ此夕霧を蹴鞠契情とは「ヲヽ今のやうに大盡に踏れたり蹴られたりするを鞠契情といふは　侍　蹴れば町人も蹴るける〳〵〳〵〳〵蹴るはいやイトかの夕霧を蹴るうちにトン〳〵〳〵といふ音すれば「ハテ今そなたを蹴たら何所やらで蹴鞠のやうな音がするがてもマァ不思議のともあればあるものトきよろ〳〵するうち以前のかむろ「モシ伊左さん餅が搗ましたが召あがりませんか　伊「ドレ只の餅なら兎も角も粟なんぞは見るも否じや

釵附鐵炮　淺草海苔　孔明　　立川信四郎作

いづれの時にか有けん賊おこりて人民をなやます然も其賊強くして容易に追討なし難く軍師孔明釵附鐵炮と云ものゝ工風なせしに敵はやくも此ことをしりて用意なせば鐵炮雨あられと打出せど皆空しく玉は途中に落軍師孔明に斯と告ければ軍師つら〳〵是を考ふるにそも鐵炮は堅きを碎く具なれども定めし敵に和かき物ありと覺ゆいかなる物を張ありしや「何やらん其品を心得ねど紙に似て紙ならす黑く漉ぎれ見ゆるもの何枚となく繼立本陣一面に張これあり候と答へければ「夫こそ日本の佳品たる淺艸海苔といふものならん宮戸川とやらんにてとるゝと聞しが風味美にして鐵炮を除るとこれに增ものあらずと聞しがさばかりの知者賊中にあらんとはおもひも寄ずト暫く首をかたむけかんがへいたりしかば「イヱ淺艸海苔ならよい智者もあるはづでござります「ナゼ「芝居が近所でござります

遊女の無心　大黑天　彫物師　　橘阿彌三圓作

遊女溝雲は客宗眠に大黑の像を金にて拵へ來て吳ト無心して此大黑を飾りてより仕合よくなりければ遣手おつめ是をうらやみ宗眠に無心をいふと宗眠いはくあの時は紀文が下がね料百兩出したるゆゑ出來たれど下金がなければ出來ぬといふにおつめへそくりを五十兩出して賴む宗眠其金を忽ち遣ひすて大黑を拵へてやらぬを遣り手はしきりに催促する故宗眠心中めつきにて

拵へつかはしけるを殊の外よろこび祭りけるが是より仕合わるく以前の亭主が來りて金をかせといふ金はなければ着物を貸又勘當の息子が來て着物を借り種々の不仕合ゆゑ待乳山の聖天へいのりに往て歸りがけ土手で追はぎに出逢眞ッ裸にされてほう〳〵三浦屋へかへり借着をして居る處へ宗眠が來りければ此恨みを言けるに宗眠のいわくそれは自己が懐の貧なるとき拵へた大黒ゆゑ左様なるべしといふつめ「そんならあれは金むくではないのかへ「いかにもひんむくなりと言ゆゑ「道理でぬがせられてばかり居た「コレおつめ其様にいふな今一度五十兩の下金を出したら「又ひんむくかへ「ナァニ今度は着で拵て來て遣う

春色三題噺下之卷 終

閑情末摘花の叙言

末摘花は源氏物語の卷の名にして。近曾柳亭の大人が妙案の筆删に。江湖上の婦女子みな暗抄して。奇なりともてはやし。珍なりと稱賛す。然るをこゝに著せる末摘花といふの趣向は。聊源氏にかゝはらずかの芭蕉庵の翁桃青が句に

ゆくすゑは誰肌ふれん紅の花

實紅花園中に花ひらき。旭にまばゆく夕陽に輝きて色を爭ひたるも。既につまれて商賈の手に渡り。終に絞りて美人の口紅となるとき。何方の人の肌にふれて。何方の男子の寵を受るや。半點の朱唇萬客嘗と。唐人もよみたりけむ。現に婦人粧ひの第一たれども。その行方を定むる事なし。嗚呼妙なる哉翁が秀吟。こゝに於て人世の一期もいさゝかこれに似

たり。思ふに配で想はぬに。配偶といふのも往昔より。人の口碑に傳ふる所。得て寓言とすべからず。されば彼秀吟を種として。例の人情世態を編り。紅の花といふべかりしを。末摘花と題せしは。博識めかす戯作者魂。紅屋のかんばん赤帝。高くとまつて言には。侍らはずと志かいふ。

于時天保己亥いやほひの市に鬻く

松亭主人誌

閑情末摘花初編卷之上

東都　松亭金水　編次

第一回

むかし〳〵の狂歌に。屁に寄る月といふ題に。すかしみればひるかと。上もふむさしのゝ。くさきをわけて出る月影と。詠じたりしは往昔の。野原でありしそのさまを。想像たるものぞかし。今はそれには引かへて。家根より出て家根に入る。月の都はまだ見ねど。かゝる繁花は須彌の四州大千世界の廣しとも。また有べしとは思はれず。然るが中にも人々の。幸と不幸はあるものにて。一夜千金を抛嫖客あれば。軒に行みて一錢を乞ふもあり。これ人間世の景勢にて。榮枯盛衰は廻り燈籠に等し。されば富貴も誇るに足らず。貧賤もまた悲むべからず。こゝは名に負ふ横濱町。往來もまげき宵月に。晝より明き軒の下。眞暗になる人だちは。十七八とおぼしき女兒。手拭眉深に面影の。見へぬだけ猶床しさの。聲にまらする愛敬に。節も細かき淨瑠りの三絃の曲さへいと妙なりきゝて「ユモシ甘く語るねへ此聲を持て門行をせずとも。何樣か成そうなものじやァでざいやせんか「左樣サすべて諸藝とも生れ付と見へますヲ　女「アレお松さんお聞ヨアレ彼處のとこが甘いじやァないかヲ。私のお師匠さんが。何樣にやかましくい

ふかまれないけれど。誠に〳〵出來なくッて困るヨ「ヲヤ左樣かへ。私きもサお對だねへ「アレ馬鹿をお言なねへ。節の出來ないお對もないもんだねへホヽヽヽト仇口々に門イが。跡にひきそひ動也々々と。夫から夫と聞て行。折から來かゝる一個の通客。年齡二十三四にて。夜目にはまかと知れねども。色白くして脊高く。眼元口元いやみなく。何樣やら氣轉も菊五郎が。」壯弱にも劣らぬ風俗。衣裳はよろまく推察あるべし。跡に引そふ連の雄士は。供にもあらず友達ならず。出入の者とおぼしきが。名をば久次と呼ぶなるべし。かの旦那はうしろをふりむき旦那「ヲイ久かう〳〵。でへぶ足が遲いな何樣したゝンだ　久「ハヽヽヽ今子。泥水の中へ飛込ました。どふも月を脊にして歩行といふやつァ。兎角泥水へ這入やす旦那「左樣か紙をやらうか　久「ナニ〳〵手拭でふきました旦那「氣めへを見せるにやァまだ早いぜハヽヽヽ　久「實に百三十二文切たての手拭サ旦那「コウ鳥渡聞ねへ。ナントまア美聲の門イじやァねへかノ。年もまだ十七位だ。八とはなるめへ。顏は手拭を冠つて居るから一向見へねへけれどエ。コウ聲の宜といふもなァ一割德だの。何でも美しからうと思はれるぜトいはれて久次は立留り。まばらく聞て居たりしが驚たる顏をして　久「エモシ旦那この聲を持て門イとは何樣したゝンでございませう。師匠をするか左もなかァ。諸侯へお妾にでも出て御覽なせへ。强氣なもんでごせへやすがサ。まかし思ひのほか面が變大で大へんといふお負に蚊不死穴にはいりねるゆゑ死なずといふとなりがすてきで。二

度と拜まれねへ御面相かヲ　旦「何樣だかまらねへが何にしろ可愛そうな事だの　久「ハヽヽ兎角旦那婦人には御不便がかゝりますヲ　旦「なにサ左樣じやァねへが。アノ位な藝を持て居る癖に。門イとは餘まり果敢ねへじやァねへか。實にお前の言通りヨ。己がお出入の。ソレ佐々木さまの奥で。淨瑠璃をよく語る女兒があるなら。殿さまのお伽に世話をして吳ろ。尤標致は能ほどの事はねへが。藝せへ宜ければ大概なのでも濟からと。實はお年寄に恃まれて居るから油斷なく氣をつけるが。サテねへものだノ。今の門イが面は何樣なで。何者め娘だか聞てへもんだがサ　久「ヘエヽ左樣いふ事なら鳥渡聞て見ませう　旦「ムヽ左樣だがノ。種々な事を言ちらかして。萬一出來ねへときにやァわるし。夫よりかマア面を見てへものだヨ　久「マア一寸行て見て來ませうト言ながら駈出すはづみに。其處に寢て居る犬の足をふむ「キヤン〳〵〳〵　久「エヽいめへましい。ホイかんにしろ〳〵トいひながら彼人立をおしわけて。門イが側へゆく。旦那は此方に行みて「輕卒男だト獨り笑して待間程なく。久次はこゝへ駈來りて　久「旦那見といけましたが誠に恂り　旦「なぜだ大變か　久「大變にも何にも辨天さまの。モウ一ぺゑ美麗のでございやす　旦「フン甘くいふぜ。左樣委しくまれるものか　久「所がくつと側へ寄て見ると。子供が短かな竹を持て門イの側に立て居やすから。その竹を私がそつと持添て彼奴が冠つてゐる手拭へ引かけて置て。ヲイ〳〵小供除かねへか〳〵といふと。小供がひよいと除拍子に。竹の